

平安京左京一条四坊十町跡・  
公家町遺跡・京都新城跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇一九―二一

平安京左京一条四坊十町跡・公家町遺跡・京都新城跡

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

2020年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



平安京左京一条四坊十町跡・  
公家町遺跡・京都新城跡

2020年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所





石垣312・堀313（南東から）



平面

X=-108.512

X=-108.508

X=-108.504

X=-108.500



Y=-21.514

Y=-21.510

Y=-21.506

立面



H=49.0m

H=47.0m

H=45.0m



石垣312オルソ画像 (1 : 100)



瓦11



瓦12

出土金箔瓦

# 序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、消火施設建設に伴う平安京跡・公家町遺跡・京都新城跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

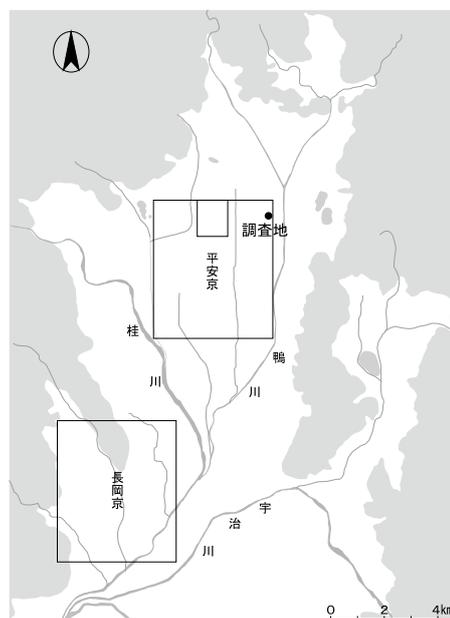
令和2年5月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所 長 井 上 満 郎

# 例 言

- |          |   |
|----------|---|
| 1 遺 跡 名  | 平安京跡・公家町遺跡・京都新城跡（京都市番号 17 H 330）  |
| 2 調査所在地  | 京都市上京区京都御苑3 京都仙洞御所内   |
| 3 委 託 者  | 株式会社 大亀工務店 代表取締役 山本勝廣   |
| 4 調査期間   | 2019年11月5日～2020年3月31日   |
| 5 調査面積   | 125.3㎡  |
| 6 調査担当者  | 小檜山一良   |
| 7 使用地図   | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「御所」を参考にし、作成した。   |
| 8 使用測地系  | 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）  |
| 9 使用標高   | T.P.：東京湾平均海面高度  |
| 10 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。   |
| 11 遺構番号  | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。  |
| 12 遺物番号  | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。   |
| 13 本書作成  | 1～5：小檜山一良<br>付章1：橋本清一（元京都府立山城郷土資料館）、関 晃史（京都市埋蔵文化財研究所）<br>付章2：釜井俊孝・土井一生（京都大学防災研究所）、古川 匠（京都府教育委員会）<br>付章3：北野信彦（龍谷大学）<br>付章4：南 孝雄（京都市埋蔵文化財研究所） |
| 14 備 考   | 上記以外に調査・整理ならびに<br>本書作成には、調査業務職員及<br>び資料業務職員があたった。   |

（調査地点図）



# 目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	1
2. 遺 跡	5
(1) 遺跡の位置と環境	5
(2) 既往の調査	8
3. 遺 構	13
(1) 基本層序	13
(2) 遺構の概要	14
(3) 第5面〔安土桃山時代〕の遺構	14
(4) 第4面〔江戸時代前期〕の遺構	16
(5) 第3面〔江戸時代中期から後期〕の遺構	17
(6) 第2面〔江戸時代末期〕の遺構	21
(7) 第1面〔明治時代以降〕の遺構	21
4. 遺 物	23
(1) 遺物の概要	23
(2) 土器類	23
(3) 瓦類	26
(4) 金属製品	31
5. ま と め	33
付章1 京都新城の石垣に用いられた石材について	37
付章2 高精度表面波探査による堀跡の調査	42
付章3 京都新城跡出土金箔瓦の分析調査	47
付章4 京都新城の復元に関する基礎作業 - 石垣312・堀313の位置比定を中心に -	53

# 図 版 目 次

- 巻頭図版1 遺構 石垣312・堀313（南東から）
- 巻頭図版2 遺構 石垣312オルソ画像（1：100）
- 巻頭図版3 遺物 出土金箔瓦
- 図版1 遺構 第5面遺構平面図（1：80）
- 図版2 遺構 第4面遺構平面図（1：80）
- 図版3 遺構 第3面遺構平面図（1：80）
- 図版4 遺構 第2面遺構平面図（1：80）
- 図版5 遺構 第1面遺構平面図（1：80）
- 図版6 遺構 調査区北壁断面図（1：50）
- 図版7 遺構 調査区西壁断面図（1：50）
- 図版8 遺構 礎石列4、柱列2・3実測図（1：50）
- 図版9 遺構 1 石垣312（北東から）  
2 石垣312（南東から）
- 図版10 遺構 1 石垣312（北から）  
2 石垣312背面礫層（北西から）  
3 石垣312南側背面断割（北から）
- 図版11 遺構 1 石垣312北側断割（南から）  
2 石垣312と堀313底面（北東から）  
3 石垣312の根石（北東から）
- 図版12 遺構 1 第4面全景（南東から）  
2 礎石列4（東から）  
3 礎石列4柱穴255（南から）  
4 礎石列4柱穴263（南から）
- 図版13 遺構 1 第3面全景（北東から）  
2 石室241・243・240（東から）  
3 溝200（東から）
- 図版14 遺構 1 第2面全景（北東から）  
2 第2面北東部（西から）  
3 集石177（北から）
- 図版15 遺構 1 第1面全景（北東から）  
2 土坑136（北から）  
3 埋甕126（北から）

- 図版16 遺物 出土土器  
 図版17 遺物 出土瓦類1  
 図版18 遺物 出土瓦類2

## 挿 図 目 次

図1	調査地位置図（1：5,000）	1
図2	調査区配置図（1：800）	2
図3	調査前全景（南東から）	3
図4	作業状況（北西から）	3
図5	宮内庁職員説明会（北西から）	3
図6	北壁土層剥ぎ取り（南から）	3
図7	矢穴シリコン型取り（東から）	3
図8	石垣土嚢養生（東から）	3
図9	石垣砂養生（東から）	3
図10	高精度表面波探査（西から）	3
図11	周辺調査位置図（1：2,500）	9
図12	基本層位図（1：40）	13
図13	石垣312・堀313実測図（1：60）	15
図14	転落石矢穴（北東から）	16
図15	礎石列3実測図（1：50）、溝200実測図（1：60）	18
図16	石室240・243実測図（1：50）	19
図17	石室241実測図（1：50）	20
図18	石列230実測図（1：50）	20
図19	柱列1実測図（1：80）	21
図20	土坑22・136、埋甕126実測図（1：40）	22
図21	出土土器実測図（1：4、27のみ1：8）	24
図22	出土瓦類拓影及び実測図1（1：4）	26
図23	出土瓦類拓影及び実測図2（1：4）	28
図24	出土瓦類拓影及び実測図3（1：4）	30
図25	出土埴実測図（1：4）	31
図26	出土金属製品実測図（1：2）	31
図27	出土銭貨拓影（1：2）	32
図28	遺構変遷図（1：200）	35

# 表 目 次

表 1	京都新城関係略年表	6
表 2	京都仙洞御所関係略年表	7
表 3	周辺調査一覧表	10
表 4	遺構概要表	14
表 5	遺物概要表	23
表 6	出土土器観察表	25

# 平安京左京一条四坊十町跡・公家町遺跡・京都新城跡

## 1. 調査経過

### (1) 調査に至る経緯

調査地は、京都市上京区京都御苑3の京都仙洞御所内に位置し、平安京左京一条四坊十町跡・公家町遺跡・京都新城跡にあたる。宮内庁京都事務所により当地に消火施設の建設が計画されたことから、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）が試掘調査を実施した。その結果、遺構が良好な状態で検出されたため、文化財保護課は、発掘調査が必要と判断し、工事施工者の株式会社大亀工務店から委託された公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が調査を実施した。

調査の目的は、平安京跡・公家町遺跡・京都新城跡に関連した遺構の確認と歴史の変遷を明らかにすることである。

### (2) 調査の経過

調査区は、文化財保護課の指導により設定した。調査面積は125.3㎡である。発掘調査に先立って計画設備範囲内にある樹木の伐採が行われた。

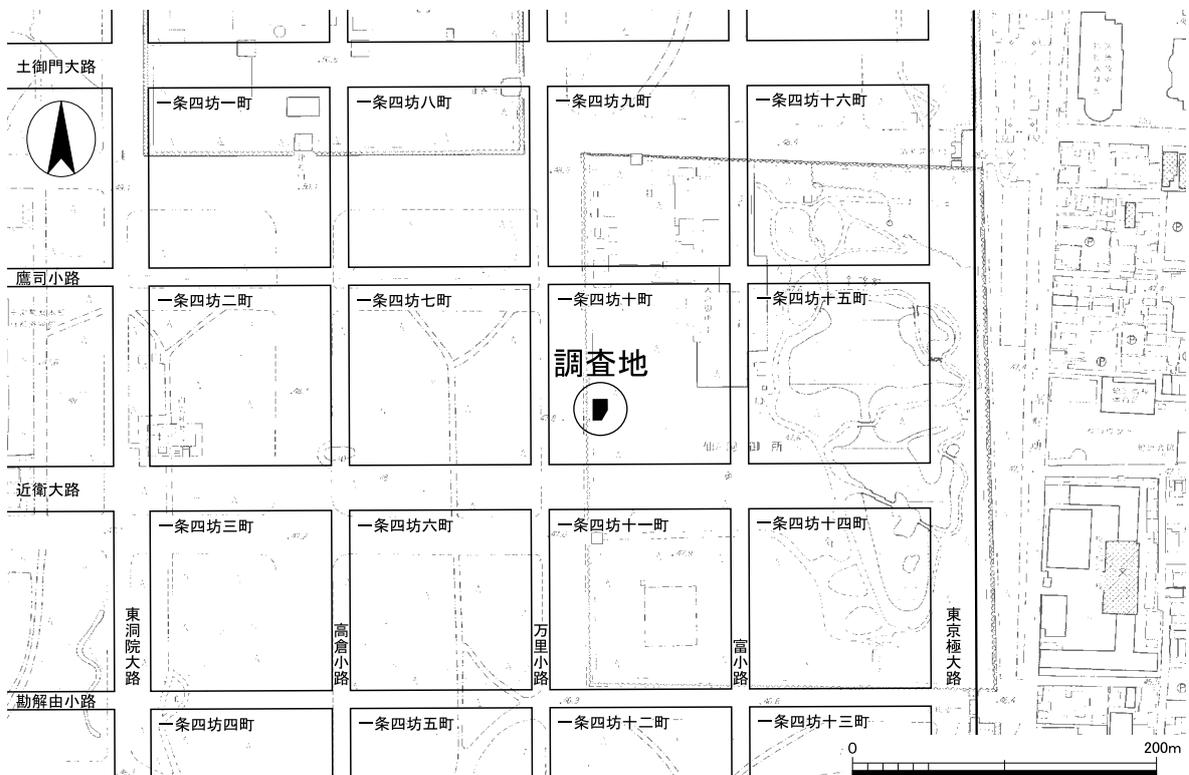


図1 調査地位置図 (1 : 5,000)

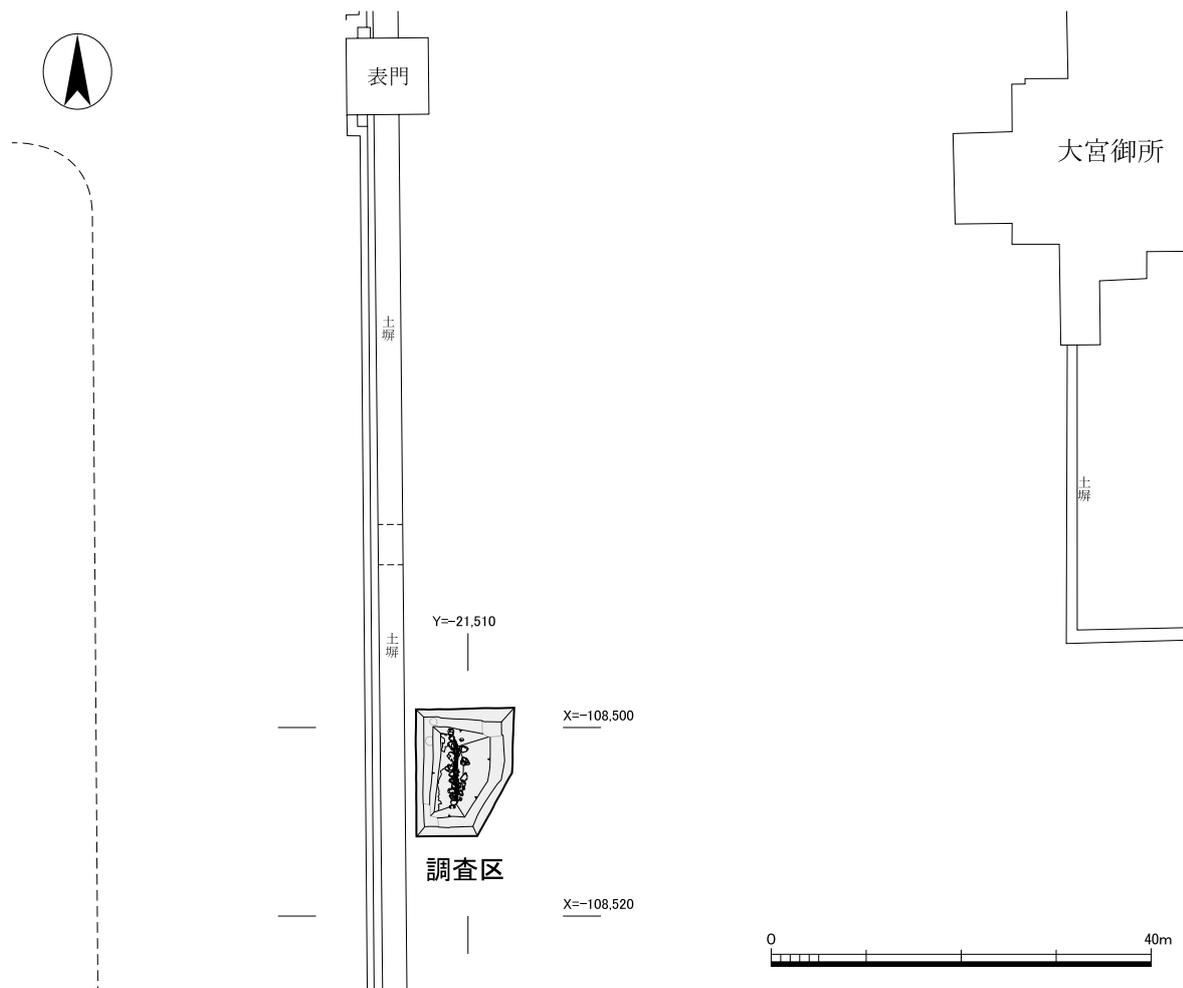


図2 調査区配置図（1：800）

調査は、2019年11月5日から重機による現代盛土の掘削を開始した。掘削と併せて樹木の伐根作業を行った。現代盛土以外の遺構の検出・掘削は基本的に人力で行い、図面や写真による記録作業を行った。調査で発生した排土は、調査区の南東約15mの地点にダンプカーで運搬して仮置きした。

調査では、安土桃山時代から明治時代以降まで5面の遺構面の調査を行った。第1面は、地表下約0.1mの明治時代以降の整地層の上面で、建物・柱列・溝・土坑などを検出した。第2面では、江戸時代末期の柱穴・溝・土坑などを検出した。第3面では、江戸時代中期から後期の礎石列・溝・土坑・石室などを検出した。第4面では、寛永4年（1627）の仙洞御所造営時の整地層上面で、礎石列・柱列などを検出した。第5面では、慶長2年（1597）に豊臣秀吉が築城した京都新城のものと推定された南北方向の石垣と堀を検出した。

これらの検出した遺構の記録は、実測図の作成と写真撮影によって行い、第5面で検出した石垣については3次元写真測量（使用ソフト：コンテキスト キャプチャー、ベントレー・システムズ社）を実施した。また、調査区内の土層の堆積状態が良好で、京都仙洞御所の歴史を説明する地層の堆積状況であることから、北壁の土層剥ぎ取りを実施した。さらに、石垣の転落石に穿たれた矢穴についてはシリコンによる型取りも実施した。



図3 調査前全景（南東から）



図4 作業状況（北西から）



図5 宮内庁職員説明会（北西から）



図6 北壁土層剥ぎ取り（南から）



図7 矢穴シリコン型取り（東から）



図8 石垣土嚢養生（東から）



図9 石垣砂養生（東から）



図10 高精度表面波探査（西から）

京都新城に関連する遺構の発見は今回の調査が初めてのことであり、検出した石垣の時期や特徴また重要性を明らかにするため、1月31日に北垣聰一郎氏（石川県金沢城調査研究所 名誉所長）、2月4日に森岡英人氏（関西大学非常勤講師）、2月5日に中井 均氏（滋賀県立大学教授）・松尾信裕氏（大阪歴史博物館 研究主幹）等によって石垣の観察及び検証を行った。その結果、石垣の特徴や層位関係・出土遺物などから、京都新城の石垣とするのが妥当であり、これまで実態が不明であった京都新城を知るうえで貴重な遺構であると判断された。この石垣の石材に関しては、3月18日に橋本清一氏による石材調査を行った。また、3月24日には堀の幅を知るため、京都大学防災研究所の釜井俊孝教授らによる高精度表面波探査を実施した。次いで25・26日に石垣裏込め部の断割や堀底部の掘下げなどの補足調査を実施し、調査を終了した。

京都新城の遺構を確認したことを受けて、宮内庁と文化財保護課は保存協議を行い、その結果、宮内庁は消火設備の建設予定地を変更することとなり、石垣は土嚢袋と保護砂で養生した後、埋め戻し、現状のまま保存されることとなった。

調査中は適時、文化財保護課の検査・指導を受け、さらに検証委員の立命館大学の木立雅朗教授と同志社大学歴史資料館の浜中邦弘准教授による視察・助言を受けた。

なお、1月15日に宮内庁職員を対象とした説明会を現地にて行い、約20名の参加者があった。

## 2. 遺 跡

### (1) 遺跡の位置と環境 (表1・2)

調査地の位置する京都御苑は、京都盆地の北東寄りにあり、高野川と賀茂川の合流地点から南西へ約1km付近にあたる。付近一帯の地質は、高野川と賀茂川によって形成された複合扇状地の砂礫層である。高野川は北東から南西に流れ、比叡山から東山の東麓斜面を侵食し、土砂を下流に運搬・堆積する。賀茂川は北西から南東に流れ、北山の山間部斜面を侵食し、土砂を下流に運搬・堆積してきた。両河川は合流して鴨川となって南流するが、その流域に扇状地堆積物である砂礫を大量に埋積させた結果、北東から南西方向に傾斜する地形がつくられた<sup>1)</sup>。

現在の京都御苑は、四周を石垣で囲まれ、北を今出川通、東を寺町通、南を丸太町通、西を烏丸通に面する東西約700m、南北約1,300m、面積約90万㎡の大規模な国民公園となっている。今回の調査地である京都仙洞御所は、京都御苑内にあり、京都御所の南東に位置し、四周を築地塀で囲まれ、東西約270m、南北約350m、面積約9.5万㎡の規模である。

京都仙洞御所は、平安京の条坊では、北東隅に近い左京一条四坊九～十一、十四～十六町に該当する。今回の調査地は北を鷹司小路、東を富小路、南を近衛大路、西を万里小路に囲まれた十町にあたる。

平安時代の調査地周辺は、高位の貴族の邸宅街にあたり、平安時代中期には北隣の九町に藤原道長の妻、源倫子の邸宅とされる「鷹司殿」があった。東隣りは南北2町を占める邸宅「土御門殿」で、道長の時代には後一条・後朱雀・後冷泉ら三代の天皇の里内裏でもあった。

現在の京都御所の地に内裏が定着するのは、南北朝時代に光厳天皇が土御門東洞院殿に内裏を移して以降のことであり、その後、足利義満・織田信長・豊臣秀吉らによって周辺も含めて禁裏御所が整備された。公家町遺跡は、豊臣秀吉により内裏周辺に公家を集住させ、公家屋敷街を形成したことによる<sup>2)</sup>。

また、当地は豊臣秀吉が慶長2年(1597)に建てたとされる京都新城の推定地にあたっており<sup>3)</sup>、秀吉の妻・北政所(高台院)が慶長5年(1600)の関ヶ原合戦以後も寛永元年(1624)9月まで居住していた。

京都新城は、聚楽第破却後に豊臣秀吉が洛中に築造した城館である。当初は太閤御屋敷、太閤御所、太閤上京屋敷などと呼ばれており、やがて新城、秀頼御城、京の城と呼ばれた<sup>4)</sup>。当初、京都新城は慶長2年(1597)正月に下京に4町四方の城館の縄張りを行い、整地を開始した<sup>5)</sup>。しかし、同年4月には、城館の選地を北に移動している。「北土御門通ヨリ南へ六町、東ハ京極ヨリ西へ三町」という18町に及ぶ広大な敷地となる<sup>6)</sup>。また、同年8月には具体的な広さはわからないものの、南西へ城域を拡張した様相が見られる<sup>7)</sup>。同年9月には、秀吉、秀頼とも京都新城に移っている<sup>8)</sup>。慶長3年(1598)8月、秀吉が死去すると、京都新城は大坂城から移った北政所(高台院)の邸宅となった<sup>9)</sup>。城館の具体的な施設については不明であるが、関ヶ原合戦前に、門・土塀・石垣を破却し

表1 京都新城関係略年表

和 暦	西 暦	月 日	事 柄
天正10年	1582	6月2日	本能寺の変。
		6月13日	山崎の戦い。
天正11年	1583		大坂城築城開始。
天正13年	1585		秀吉、関白となる。
天正14年	1586		聚楽第着工(天正14年完成)。
天正16年	1588		方広寺大仏殿着工。
天正18年	1590		後北条氏滅亡。秀吉天下統一なる。 京都において天正地割実施。
天正19年	1591		御土居の築造、閏1月着工、4月にはほぼ完成。 寺町を建設。
文禄元年	1592		文禄の役始まる。伏見城(指月)築城開始。
文禄2年	1593		秀頼誕生。
文禄3年	1594		伏見城(指月城)拡張工事(3～8月)。
文禄4年	1595		豊臣秀次自害、聚楽第破却。
文禄5年	1596		京都・伏見で大地震、伏見城倒壊。 木幡山に再建開始、10月本丸完成。
慶長2年	1597	正月14日	慶長の役始まる。
		正月24日	三条と四条の間に太閤御屋敷の縄張り(4町四方)を行う。
		4月26日	屋敷替え。北は土御門より南へ6町、東は京極より西へ3町(18町)。 杭を打ち縄をひく。
		8月3日	新城太閤御所、西南に拡張される。
		9月21日	太閤御屋敷出来。
		9月26日	秀吉上洛。
		9月28日	秀頼、禁裏の辰の角の新宅に移る。
慶長3年	1598	8月18日	秀吉、伏見城にて死去。
慶長4年	1599	9月26日	北政所、大阪より禁裏辰巳の角、故太閤の殿中へ上洛。京之城へ移る。
慶長5年	1600	8月29日	秀頼卿御城の南西の門・堀・石垣を壊す。
		9月15日	関ヶ原の戦い、伏見城落城。
慶長6年	1601		家康、伏見城を再建。 方広寺大仏殿、鑄造中の大仏より出火し炎上。
慶長7年	1602		二条城造営開始。
慶長8年	1603		家康、征夷大將軍となり、伏見城で將軍宣下式。 京都所司代を設置。
慶長10年	1605		秀忠、征夷大將軍となり、伏見城で將軍宣下式。
元和元年	1615		大坂夏の陣、豊臣氏滅亡。
元和2年	1616		徳川家康没。
元和9年	1623		家光、征夷大將軍となり、伏見城で將軍宣下式。伏見城廢城。
寛永元年	1624	9月6日	北政所(高台院)死去。

表2 京都仙洞御所関係略年表

和 暦	西 暦	居 住 者	備 考
寛永4年	1627		仙洞御所・大宮御所造営工事開始
寛永7年	1630	後水尾上皇	①仙洞御所・女院御所(東福門院和子：徳川秀忠娘)に移徙
寛永11～13年	1634～1636	〃	仙洞御所・女院御所庭、小堀遠州作庭
承応～万治	1652～1661	〃	庭園改造：池を広げ、滝を落とし、島を増やし、橋を架ける
万治4年	1661	〃	二条邸より出火、一条邸を仮御所とする
寛文3年	1663	〃	②仙洞御所再建 庭園を改造、拡大する
寛文13年	1673	〃	焼失 ③仙洞御所再建 造営に伴い庭園を改造する
延宝4年	1676	〃	御所内広御所より出火する
延宝5年	1677	〃	④仙洞御所再建 御殿の面積を縮小する
延宝8年	1680	〃	後水尾法皇崩御
天和2年	1682	朝仁親王	女院御所建物を林丘寺、青連院へ移築する 朝仁親王(霊元天皇皇子、後の東山天皇)の東宮御所となる
貞享元年	1684	〃	焼失
貞享2年	1685	〃	⑤仙洞御所再建
貞享4年	1687	霊元上皇	女院御所の再建(御西院の院の御所より建物移築) 池の拡張、南池中島を2つにする
宝永5年	1708	〃	焼失
宝永6年	1709	〃	⑥仙洞御所再建
享保17年	1732	〃	霊元崩御
享保20年	1735	中御門上皇	
元文2年	1737	〃	中御門上皇崩御
延享3年	1746	〃	修理
延享4年	1747	桜町上皇	
寛延3年	1750	〃	桜町上皇崩御
明和5年	1768	〃	明和7年まで修理
明和8年	1771	後桜町上皇	
天明8年	1788	〃	焼失
寛政2年	1790	〃	⑦仙洞御所再建 復古的な様式で再建する 松平定信(惣奉行)、御内庭造作
文化10年	1813	〃	後桜町上皇崩御
文化14年	1817	光格上皇	南池の洲浜が玉石に、小田原の「一升石」
天保11年	1840	〃	光格上皇崩御、のち空屋敷となる
嘉永7年	1854	〃	内親王御殿より出火
慶應3年	1867	〃	大宮御所再建 仙洞御所の建物は再建せず
明治2年	1869	英照皇太后	大宮御所

た記事がある<sup>10)</sup>。このことから、石垣を備えた城館であったことがわかる。関ヶ原合戦後も北政所（高台院）邸として継続利用されていたが、寛永元年（1624）9月、北政所（高台院）が死去した後に、後水尾上皇の仙洞御所の地として選定された。

京都仙洞御所・京都大宮御所は、寛永6年（1629）に譲位し上皇となった後水尾上皇とその後の東福門院のために造営されたことに始まる。高台院屋敷の跡地を利用して、後水尾上皇の院庁御所としての仙洞御所が南側に、上皇后のための女院御所が北側に配置された。

江戸時代の仙洞御所・女院御所の建物は万治4年（1661）、寛文13年（1673）、延宝4年（1676）、貞享元年（1684）、宝永5年（1708）、天明8年（1788）、嘉永7年（1854）までの7回の火災により焼失と再建を繰り返しているが、仙洞御所の建物は嘉永7年の焼失後は再建されていない。一方、女院御所は慶応3年（1867）に英照皇太后（明治天皇の嫡母）のために造営されており、これが現在の京都大宮御所である<sup>11)</sup>。

明治2年（1869）の東京鄭都後、御所や公家町は荒廃するが、明治天皇の命により明治10年（1877）から内裏保存事業が行われ、現在みられる京都御苑の形となった。京都仙洞御所・京都大宮御所では大正及び昭和に建物の建て替えや門の新造などが、大正天皇・昭和天皇の即位に関わる大礼にあたって行われている<sup>12)</sup>。

## （2）既往の調査（図11、表3）

京都御苑内では、これまで発掘調査や試掘・立会調査が実施され、各時代の多岐にわたる遺構を検出している。今回は京都大宮御所・京都仙洞御所内で行われた発掘・試掘・立会調査を集成し、主要な調査成果について概観する。図・表中の調査番号は、本文中の番号と一致する。

**京都仙洞御所周辺の調査** 北辺四坊七町ほかに位置する調査1では、飛鳥時代以前の流路、平安時代の園池・道路、鎌倉時代の地業・道路、室町時代の堀などを検出している。また、安土桃山時代から江戸時代の公家町の遺構群を検出した。同七町の調査2-5では、江戸時代の石組土坑を検出した。同七町の調査2-6では、鎌倉時代と室町時代前期の遺物包含層を検出している。

一条四坊十六町の調査3-1では、池状遺構と景石を検出し、平安時代の土御門殿の園池と推定されている。土御門殿の推定地は京都仙洞御所の北半部にあたる。

土御門大路にあたる調査4では、江戸時代中頃の礎石建物、江戸時代後半の道路を検出した。京都御所南東隅の調査5では、寛政期造営の築地を検出した。調査7では、江戸時代前期の築地を検出し、鷹司邸の北東角と推定されている。仙洞御所築地塀の北側の調査8では、江戸時代の南北方向の築地状遺構を検出している。同東側の調査22では、江戸時代の遺物包含層を検出した。

**京都仙洞御所内の調査** 掘削深度制限のある発掘調査や工事に伴う立会調査が多いため、遺構の時期や性格を把握しがたいものが多いが、女院御所や仙洞御所に関する遺構が検出されている。

北部の調査6-8では、江戸時代中期・末期の焼土層を検出した。北東部の調査6-13では、現存の築地塀基礎の下から石組を検出しているが、時期の特定はできなかった。北西部の調査9では、大宮御所北築地基礎石を検出した。調査11は女院御所の跡地である。宝永大火（1708年）以

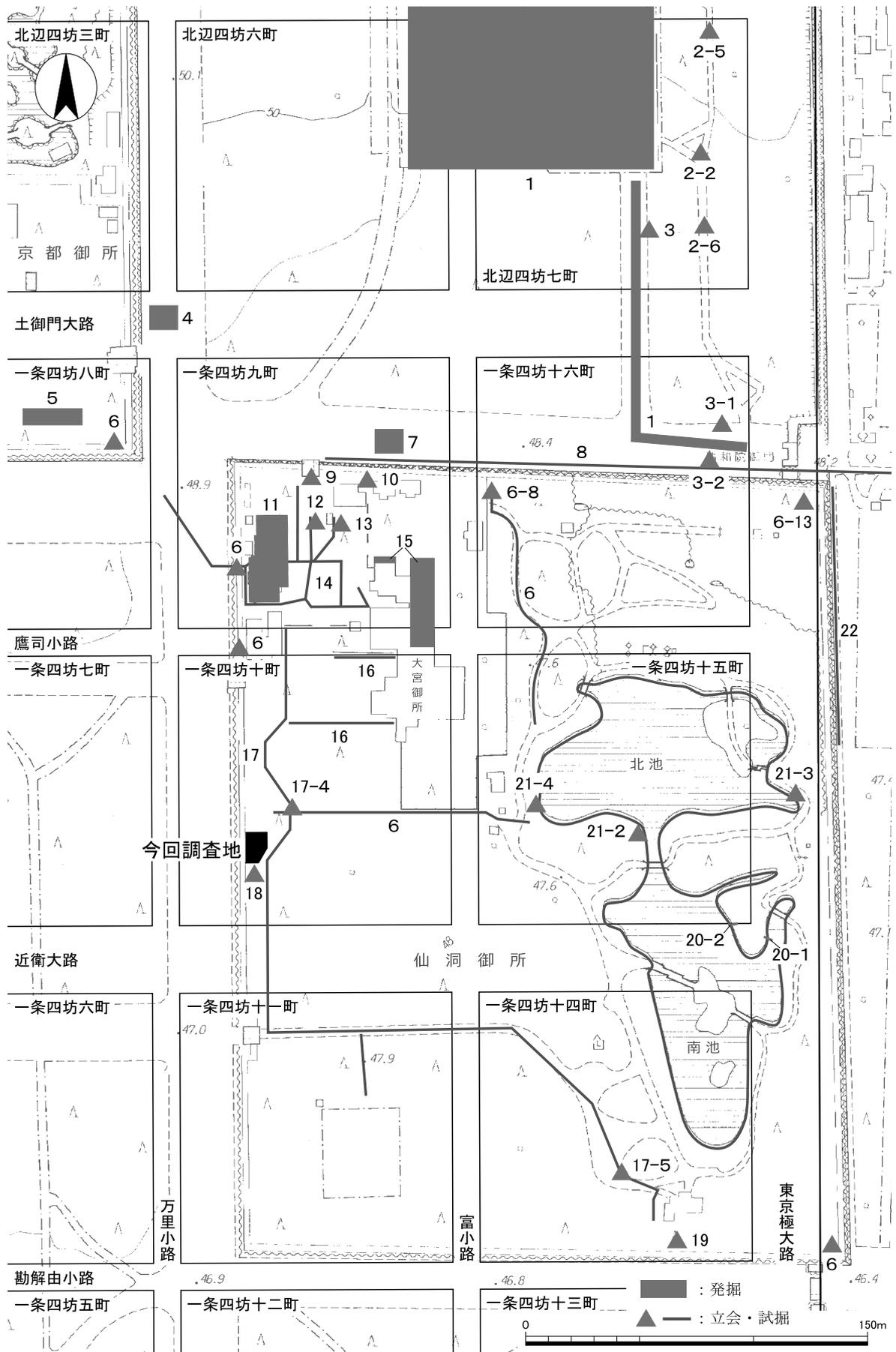


図11 周辺調査位置図 (1 : 2,500)

表3 周辺調査一覧表

番号	条坊	調査方法	調査期間	調査概要	備考	文献番号
1	北辺四坊五～八町、 一条四坊十六町跡	発掘	1997/05/19 ～2001/11/30	飛鳥時代以前の流路、平安時代の園池・道路、鎌倉時代の地業・道路、室町時代の堀、桃山時代から江戸時代の公家町の成立と変遷をたどる遺構群を検出。		2
2	北辺四坊七・八町跡	立会	2001/05/25 ～06/01	No.5：地表下-0.38mで江戸時代の水抜施設の石組土坑を検出。No.6：-1.05mで室町時代前期の包含層、-1.6mで鎌倉時代の包含層を検出。	01HL054	7
3	北辺四坊七町、 一条四坊十六町跡	立会	2000/10/31 ～11/13	No.1：地表下-0.8mで平安時代の池状堆積・景石を検出。土御門殿の庭園遺構の可能性ある。地中保存した。No.2：平安時代後期の包含層を検出。-0.7mで江戸時代の東西方向の石組溝を検出。	00HL228	6
4	一条四坊九町跡	発掘	2001/09/17 ～10/24	江戸時代中頃の礎石建物、江戸時代後半の道路を検出。		8
5	一条四坊八町跡	発掘	1999/03/01 ～03/26	寛政期造営の築地を検出。		3
6	一条四坊十・十五・ 十六町跡	立会	2001/03/06 ～04/10	No.8：江戸時代前期の流れ堆積、江戸時代中期・末期の焼土層を検出。No.13：現存の築地塀基礎下から石組を検出。	00HL362	7
7	一条四坊九町跡	発掘	2002/07/22 ～09/04	江戸時代前期の鷹司邸の築地や土蔵を検出。		8
8	一条三・四坊、 二条三・四坊	立会	1983/10/01 ～12/16	平安時代(10世紀後半)の遺物包含層、近世の南北方向の築地状遺構・土坑。	83HK-G -010-16	1
9	一条四坊九町跡、 公家町遺跡	立会	2017/12/06	地表下-0.22mで大宮御所北築地基礎石を検出。-0.1～1.67mで青灰色粘質土(時期不明包含層)。	17H081	12
10	一条四坊九町跡	立会	2018/03/12 ～03/13	地表下-0.75mまで盛土。	17H774	14
11	一条四坊九町跡	発掘	2015/09/07 ～12/08	大宮御所(女院御所)跡地。宝永の大火(1708年)後から慶応三年(1867年)の建物跡、宝永の大火後に撤去された塀の基礎を検出。		10
12	一条四坊九町跡、 公家町遺跡	立会	2017/01/23 ～11/17	地表下-0.21mでオリブ褐色泥砂、-0.28mで鈍い黄褐色泥砂(時期不明包含層)、-0.41mで灰黄褐色粗砂(時期不明洪水層)、-0.47mで灰黄褐色微砂、-0.55mで赤褐色炭泥混砂(時期不明焼土層)、-0.66～0.7mで灰黄褐色泥砂。	16H154	12
13	一条四坊九町跡	立会	2018/01/29	地表下-0.7mまで盛土。	16H154	14
14	一条四坊九町跡	立会	2015/07/23 ～2016/01/28	調査11の延長と思われる東西方向の築地基底部を検出。推定宝永火災前の女院御所北築地。	14HL067	11
15	一条四坊九町跡	発掘	2006/01/06 ～01/23	江戸時代後半の土坑を検出。		9
16	一条四坊十町跡	立会	2001/09/17 ～09/25	地表下-0.2mで焼土を含む整地層を検出。	01HL196	7
17	一条四坊九～十一・ 十四町跡	立会	1999/07/15 ～08/24	No.4：江戸時代の境界築地とそれに付随する東西溝を検出。No.5：宝永・寛政期造営の御文庫の雨落ち溝を検出。	99HL125	4
18	一条四坊十町跡、 公家町遺跡	試掘	2017/11/26	地表下-0.2m以下、公家町遺跡に関する遺構面を複数確認。	17H330	13
19	一条四坊十四町跡	立会	2001/01/16	地表下-0.35mまで現代盛土。	00HL300	7
20	一条四坊十五町跡、 公家町遺跡	発掘	2019/07/20 ～08/02	出島が江戸時代後半に構築されたことが判明した。		15
21	一条四坊十四・ 十五町跡	立会	2000/01/25 ～03/07	No.2・3：地表下-0.3mで近世の包含層、-0.5mで平安時代から鎌倉時代の遺物包含層を検出。No.4：東西方向の石組溝を検出。	99HL370	5
22	北辺三坊八町・ 一条四坊十六町跡、 公家町遺跡	立会	2017/02/21	地表下-0.31mで鈍い黄褐色泥砂(近世包含層)、-0.54mで褐色泥砂(時期不明包含層)、-0.63～0.7mで暗褐色泥砂(時期不明包含層)。	16H631	12

降の建物跡を検出している。また、断割調査により東西方向の塀基礎を検出し、これは調査14でその延長を確認している。基礎は花崗岩切石を使用し、被熱している。火災時期の特定には至っていないが、寛永期の造営に伴う塀と推定されている。調査15では、江戸時代後半の土坑を検出している。調査16では、焼土を含む整地層を検出しており、嘉永7年（1854）の火災整地層とみられる。調査17-4では、寛政期造営の女院御所と仙洞御所の境界築地とそれに伴う東西溝を検出している。築地基礎は栗石を詰めた土坑で、溝は側石の間の目地を漆喰で固め、底部は漆喰のみで仕上げられている。南東部の調査17-5では、宝永・寛政期の建物群の一つである御文庫の雨落ち溝と考えられる南北溝を検出している。西部の調査18では、公家町遺跡に関する複数の遺構面が検出され、今回の発掘調査指導に至った。南池北東の出島の調査20-1と調査20-2では、出島が江戸時代後半に構築されたことが判明した。北池の調査21-2と調査21-3では、平安時代から鎌倉時代と江戸時代の遺物包含層を検出している。調査21-4では、東西方向の石組溝を検出している。その他、池周辺では池護岸工事に伴う立会調査を行っている。

#### 註

- 1) 河角龍典『平安京における地形環境変化と都市的土地利用の変遷』考古学と自然科学 第42号 日本文化財科学会誌 2000年
- 2) 『京都市の地名』日本歴史地名大系 第27巻 平凡社 1979年
- 3) 内藤 昌・油浅耕三「豊臣家京都新城-武家地の建築：近世都市図屏風の建築的研究-洛中洛外図・その6-」『大会学術講演梗概集 計画系』47（建築史・建築意匠）一般社団法人日本建築学会 1972年  
石崎善久「京都新城跡」『京都府中世城館跡調査報告書 第3冊 -山城編1-』京都府教育委員会 2014年
- 4) 慶長年間の記録では、「太閤御所屋敷」・「新城太閤御所」・「秀頼新宅」・「京都城」（『義演准后日記』）、「太閤御屋敷」・「秀頼御城」（『言経卿記』）、「京之城」（『舜旧記』）などの記載がみられる。
- 5) 『舜旧記』慶長2年（1597）正月29日条に「去二十二日、下京三条下四条之間ニ、太閤御屋敷江繩張有果而御屋敷不出来」とあり、『言経卿記』同年正月24日条には「太閤京都御屋敷、昨日奉行衆徳善院僧正・増田右衛門尉・石田治部少輔等上洛了、三条坊門ヨリ四条坊門マデ四町、又西ハ東洞院ヨリ東へ四町也」、同2月8日条に「太閤之御屋敷一昨日より地ヲナラス云々」とある。
- 6) 『言経卿記』慶長2年（1597）4月26日条には「太閤早朝ニ屋敷被替也云々、北土御門通ヨリ南へ六町、東ハ京極ヨリ西へ三町也云々、クイヲ打繩引也云々、町屋悉相替也云々」、類似の記事は『舜旧記』に「福大明神町、太閤御座所繩張有之」、『義演准后日記』に「内裏ノ東ワカゼカ池ト伝所、太閤御所御屋敷ニ御沙汰云々」、『小槻孝亮宿時禰日記』には「太閤御屋敷之ハコ瀬カ池ヲ、御城之中ニテ、今日御繩張有之」などとみられる。
- 7) 『義演准后日記』慶長2年（1597）8月3日条に「京都 禁裏ノ東ニ今度新城太閤御所御沙汰、大方周備云々、又西南へヒロケラルルト云々、伏見城普請最中大仏殿普請、佐竹以下致之云々」とある。
- 8) 『言経卿記』慶長2年（1597）9月21日条に「太閤御屋敷出来了由有之、見物ニ近所徘徊了、言語無断也」、同月26日条には「太閤・同若公等御上洛了、江戸内府御供也」とあり、『義演准后日記』には「秀頼京都禁裏辰巳角新宅御移徒、諸大名共奉、来二十八日御参内、御元服云々」とみられる。

- 9) 『舜旧記』慶長4年(1599)9月26日条に「太閤政所大坂ヨリ京之城江移也」とあり、『言経卿記』同年9月26日条に「大坂ヨリ政所 禁中辰巳角故太閤殿中へ今日御上洛也」とある。
- 10) 『義演准后日記』慶長5年(1600)8月29日条に「京都城今日ヨリ破云々、禁裏御近所故也」とあり、『言経卿記』に「禁中巽方秀頼卿御城ヲ南面御門崩了、内屏先日相崩也」、『時慶記』には「南城ノ屏・石垣壞由候」とみられる。
- 11) 森 蘊・村岡 正『仙洞御所庭園の研究』造園雑誌23巻 社団法人日本造園学会 1959年
- 12) 森 忠文『明治初期における京都御苑の造成について』造園雑誌41巻 社団法人日本造園学会 1978年

文献(表3 周辺調査一覧表の文献番号に対応する)

- 1 百瀬正恒「平安京左京一条三・四坊、二条三・四坊」『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 2 丸川義広ほか『平安京左京北辺四坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 3 長戸満男「平安京左京一条四坊」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2000年
- 4 吉本健吾ほか「平安京左京北辺四坊二町、一条三坊十六町、四坊一・九・十・十一・十四町(98HL348・375、99HL125)」『京都市内遺跡立会調査概報 平成11年度』京都市文化市民局 2000年
- 5 「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査概報 平成12年度』京都市文化市民局 2001年
- 6 内田好昭ほか「平安京左京北辺四坊七町、一条四坊十六町(00HL228)」『京都市内遺跡立会調査概報 平成12年度』京都市文化市民局 2001年
- 7 「調査一覧表」『京都市内遺跡立会調査概報 平成13年度』京都市文化市民局 2002年
- 8 上田栄治ほか『平安京左京一条四坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-8 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 9 木下保明『平安京左京一条四坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-14 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2006年
- 10 持田 透『平安京左京一条四坊九町跡・公家町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015-13 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2016年
- 11 奥井智子「平安京左京一条四坊九町跡・公家町遺跡(14H067)」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成28年度』京都市文化市民局 2017年
- 12 「調査一覧表」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成29年度』京都市文化市民局 2018年
- 13 「試掘調査一覧表」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成29年度』京都市文化市民局 2018年
- 14 「調査一覧」『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成30年度』京都市文化市民局 2019年
- 15 近藤章子『平安京左京一条四坊十五町跡・公家町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2019-3 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年

### 3. 遺 構

#### (1) 基本層序 (図12)

調査区の基本層序を調査区北壁のY=-21,513.5ライン付近で述べる。地表面の標高は48.9m、地表下0.1mまでが現代盛土である。第1面は、地表下0.1mの暗褐色砂泥層(図12-1層)の上面である。ここでは明治時代の遺構を検出した。

第2面は、地表下0.35mの赤褐色砂泥層(2層)の上面である。この層には焼土・炭・焼け瓦・土器類の細片を多量に含む。嘉永7年(1854)の火災焼土層である。

第3面は、地表下0.45mの灰黄褐色砂泥層(3層)の上面で、嘉永7年の火災被災面となる。なお、この層の下には被熱層(4層)が存在する。顕著な遺構が検出されなかったため詳細は不明であるが、天明8年(1788)の火災被災面の可能性がある。この下層には比較的固く締まる層(5層)があり、これもある時期の機能面である可能性があるが、遺構は確認できなかった。さらにこの下層には、厚さ0.4~0.5mの粗砂を主とする整地層(6層)と洪水層(7層)とがある。これらは、1997~2001年の京都迎賓館建設に伴う調査でも確認されており、17世紀後半の洪水に伴う堆積層とその後の嵩上の整地層と考えられる。

第4面は、地表下1.25mの固く締まる灰白色細砂層(8層)の上面で、寛永度の仙洞御所の遺構面となる。この細砂層は仙洞御所造営時の盛土最上層に施された化粧土とみられる。この下層は固く締まる黒褐色砂泥層(9層)と礫を多く含む京都新城の堀の埋土(10層)で、いずれも仙洞御所造営時の整地層である。

第5面は、地表下1.9mの黒褐色砂泥(11層)の上面で、安土桃山時代の京都新城の遺構面となる。第5面より下層は、南壁西半部の断割では、標高44.8mまで10~13世紀の土師器片を含む整地層で、地山層は確認できなかった。この間の土層は、すべて京都新城造営時の整地層とみられる。西壁断面の観察から、この整地層は北から南の方向に土が順次入れられていることがわかる。

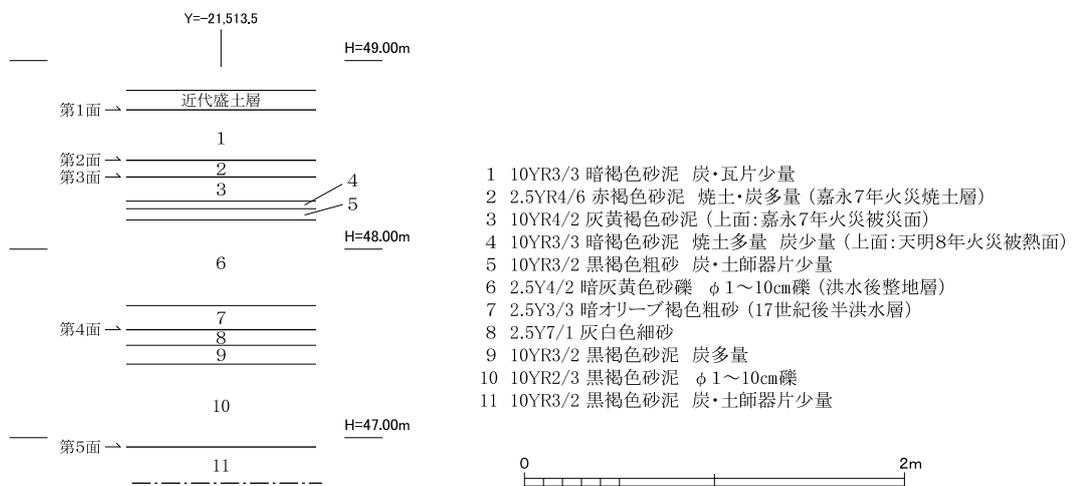


図12 基本層位図 (1 : 40)

## (2) 遺構の概要

今回は、第1～5面の調査を行った。時代は安土桃山時代から明治時代までとなる。検出した遺構には、建物・柱列・柱穴・礎石列・土坑・埋甕・溝・集石・石室・石垣・堀・整地層などがある。遺構総数は313基である。時代別には、安土桃山時代・江戸時代・明治時代以降に分かれ、江戸時代の遺構が最も多い。

## (3) 第5面〔安土桃山時代〕の遺構（図版1・9～11）

京都新城の石垣と堀を検出した遺構面である。

石垣312（巻頭図版1、図版9～11、図13・14） 調査区中央部の地表下約2.3mにおいて東面する南北方向の石垣。南北方向の堀313の西肩をなす。長さ約8mを検出した。南北両側とも調査区外へと続く。高さは1.0～1.6m、築石は3～4段を検出したが、上部は崩されている。第5面の遺構面との関係からさらに2段程度の築石が積まれており、本来の高さは2.3～2.4m程とみられる。構築角度は約75度である。方位は、北で西に約2度振る。石の積み方は、全体として石垣の表面は出入りがなく、よく整っている。使用されている石は基本的には自然石を用いており、野面積みである。築石の間は空隙が空いて背面の栗石が見えている部分が多いが、これは間詰石が抜け落ちたためとみられる。

石材の加工に関しては、矢穴が残るものは堀313出土の転落石に1石ある（図14）。築石に割石の可能性のあるものがわずかにあるが、明確ではない（付章1参照）。

石材は、花崗岩・石英斑岩・チャートの3種類が使用されている。比率は、およそ花崗岩55%：石英斑岩30%：チャート15%である。チャートは石垣下部に多く、上部にはほとんど用いられない。大きさは大小2種類に分かれ、大きいものは長さ0.8～1.1m、小さいものは0.5～0.6mである。築石の積み方は、基本的に正面幅に比して奥行きが長くなるように積まれている。間詰石は0.1～0.6mの大きさで、下段に多くみられ、中段から上部では少ない。中段以上の間詰石は後に外れたものとみられる。

石垣の背面では、裏込めを検出している。栗石は径0.05～0.1mを主とする細かい円礫が用いられている。裏込めは、調査区北壁では築石の背面0.5m程度である。それより背面は、礫層と褐色シルトが互層となっている。石垣312の南半部背面で検出した栗石は、この互層の礫層の可能性が

表4 遺構概要表

時代	遺構	備考
安土桃山時代	石垣312、堀313	京都新城
江戸時代	礎石列3・4、柱列2・3、柱穴、土坑40・223、溝89・200・224・276、石列230・278、石室240・241・243、集石52・177	寛永・嘉永仙洞御所
明治時代	建物1・2、柱列1、柱穴、土坑22・109・136、溝20・21・96、埋甕126	



図13 石垣312・堀313実測図 (1 : 60)



図14 転落石矢穴（北東から）

ある。栗石は空隙がなく、一定、抑え込みながら入れられた可能性がある。なお築石・間詰石の下半部は、表面がマンガンや鉄分によって黒色化している。

築石最下段の前面下部の一部で断割を行い、南北に並ぶ根石を2石検出した。根石は互いに接することなく、約0.2mの間隔がある。南側の根石は、南北長0.5m以上、東西長0.4m以上、厚さ0.5m以上ある。根石は、石垣の東面から東側

に少しせり出すように据えられている。

**堀313**（巻頭図版1、図13・14）石垣312の東側に位置する堀である。成立面から底部まで深さ約2.3m、東西5m以上、南北12m以上であるが、高精度表面波探査により東西幅は約20mと推測される（付章2参照）。堀の底面は堅く締まった暗褐色及び暗灰黄色の粘土で構築されており、泥土などの水性堆積物はない。堀内からは、石垣312を壊した際に落とされた築石が16石出土したが、このうち8石を図に記す。矢穴があるものが1石あり、今回の調査で矢穴が確認できたのはこれのみである（図14）。矢穴の大きさは、矢穴口の長辺が6.5cmで短辺が3cm、矢穴底の長辺が4cmで短辺が1.7cm、矢穴口から矢穴底までの深さが5.5cmである。矢穴は森岡分類の古Aタイプである<sup>1)</sup>。五七桐文や菊花文の金箔瓦が出土した。

#### （4）第4面〔江戸時代前期〕の遺構（図版2・12）

礎石列・柱列などを検出した。ほぼ全面で白色系の砂層を検出しており、白砂の敷かれた建物間の庭のような空間であった可能性がある。

**礎石列4**（図版8・12）調査区北端部で検出した東西方向の礎石列である。掘形は径0.4～0.5m、深さ約0.2m、それぞれ約0.15mの礎石が据え付けられる。4基を確認した。さらに西に延びる可能性がある。柱間は西から2.0m・1.8m・1.9m。掘形埋土はオリーブ褐色粗砂やにぶい黄褐色砂泥を主とする。東西方向の建物の南端と考えられる。

**柱列2**（図版8）調査区西部で検出した南北方向の柱列、塀と考えられる。柱穴は径0.4～0.6m、深さ約0.2m、5基を確認した。南側は調査区外に延びる可能性がある。柱間は北から1.6m・1.7m・1.7m・1.7m。埋土はオリーブ褐色砂泥や暗灰黄色砂泥を主とする。

**柱列3**（図版8）調査区西部で検出した南北方向の柱列である。柱穴は径0.4～0.5m、深さ約0.2m、6基を確認した。南側は調査区外に延びる可能性がある。柱間が北から1.6m・0.8m・0.9m・0.7m・0.9m。埋土は暗灰黄色泥砂や黒褐色砂泥を主体とする。柱穴の重なりから柱列3は柱穴2に先行することがわかる。

**溝276** 調査区中央部で検出した南北方向の溝である。南側を後世の遺構により壊される。幅0.8～1.0m、深さ約0.2m、南北5.0m以上。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。柱列3・4の東に近

接することから、これに伴う雨落ち溝の可能性がある。

**石列278** 調査区東端部で検出した石列である。東側は調査区外となる。掘形は南北0.9m以上、東西1.3m以上、深さ約0.1m。石材は平坦面を上に向け、東西方向に3石、南北方向に2石据え付ける。石材は長辺0.1～0.4mの花崗岩割石である。

### (5) 第3面〔江戸時代中期から後期〕の遺構（図版3・13）

第3面の遺構は、図版6-12層、図版7-37層の上面で検出したが、石室240・241・243は図版6-18層、図版7-42層の掘り下げ中に検出した。礎石列や土坑、石室や石組の溝などを検出した。被熱痕跡のある遺構や埋土に焼土を含む遺構が存在しており、出土遺物の年代から天明8年(1788)の大火の被災遺構とみられる。被熱痕跡のある遺構として石室240・243、溝200などがある。溝200は被熱痕跡のある石組の溝であるが、礎石列3はこの溝200よりも古いことが遺構の重なりから確認できる。また、石室241は被熱痕跡がなく、石室243よりも新しいことが遺構の重なりからわかる。

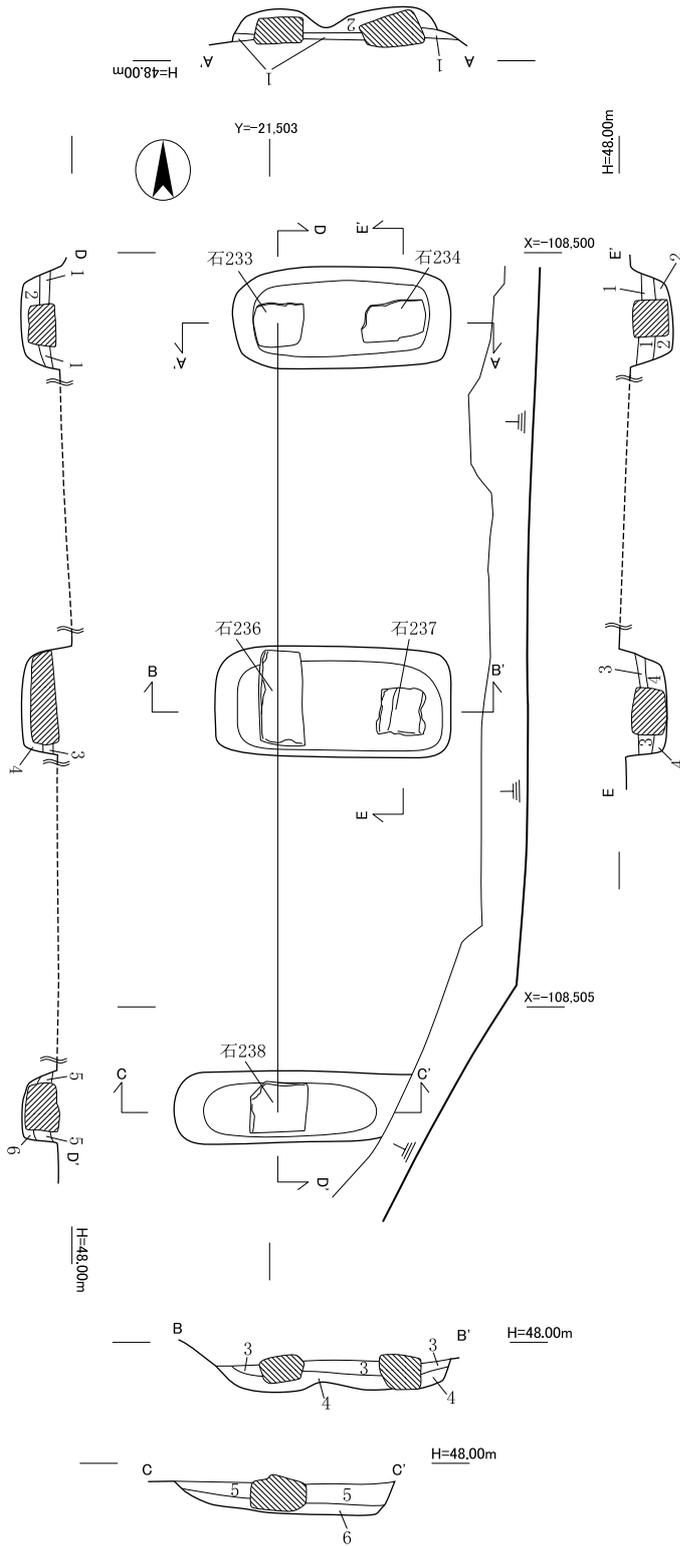
**礎石列3**（図15） 調査区東側で検出した南北方向の礎石列である。3基の礎石掘形を検出しており、南側の1基を除いて一つの掘形の中に2基の礎石を東西に配する。南北2間。柱間は北から2.5m・2.7m、北と中央の掘形内の礎石の東西間は0.8mである。石材は長辺0.3～0.7m、短辺0.3～0.4m、厚さ0.2～0.3mの花崗岩割石である。掘形内に2つの礎石を持つ。礎石列は、調査区外の南及び東に延長し塀となる可能性があるが、柱間2間の西面する門の可能性も考えられる。

**石室240**（図版13、図16） 調査区南西隅で検出した石室である。西側は調査区外となる。掘形は南北約3.7m、東西5.2m以上、深さ約0.9m。石組の内法は南北約2.4m、東西約1.1m、深さ約0.5mである。平面形は長方形を呈するとみられる。石材は長辺0.2～0.6mの花崗岩割石で、1～2段が残存する。埋土は灰黄褐色砂泥を主体とする。石材と床面が被熱により赤色化し、石室内からは多くの石材が廃棄された状態で出土した。

**石室243**（図版13、図16） 石室240の東側で検出した石室である。掘形は南北約3.6m、東西約2.5m、深さ0.6m。石組の内法は南北約2.4m、東西約1.7m、深さ約0.5mである。平面形は長方形を呈する。石材は長辺0.2～0.5mの花崗岩割石で、1～2段が残存する。軸穴が穿たれた転用石もある。石室240と同様に石材と床面は被熱により赤色化し、石室内からは多くの石材が廃棄された状態で出土した。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。石室240と同規模で並列することから、併存していたとみられる。

**石室241**（図版13、図17） 石室243の東側で検出した石室である。掘形は南北約2.5m、東西約2.3m、深さ0.9m。平面形は長方形を呈する。石組の内法は南北約1.3m、東西約1.2m、深さ約0.8mである。石材は長辺0.2～0.5mの花崗岩割石で、1～2段が残存する。各石材の加工度は石室240・243より精度が高い。矢穴が確認できる石材もある。石材を成形する際の剥片が東側の掘形に多く含まれる。埋土は暗褐色砂泥を主体とする。底面からは完形の土器器皿・蓋が多く出土した。石材には被熱痕跡がない。

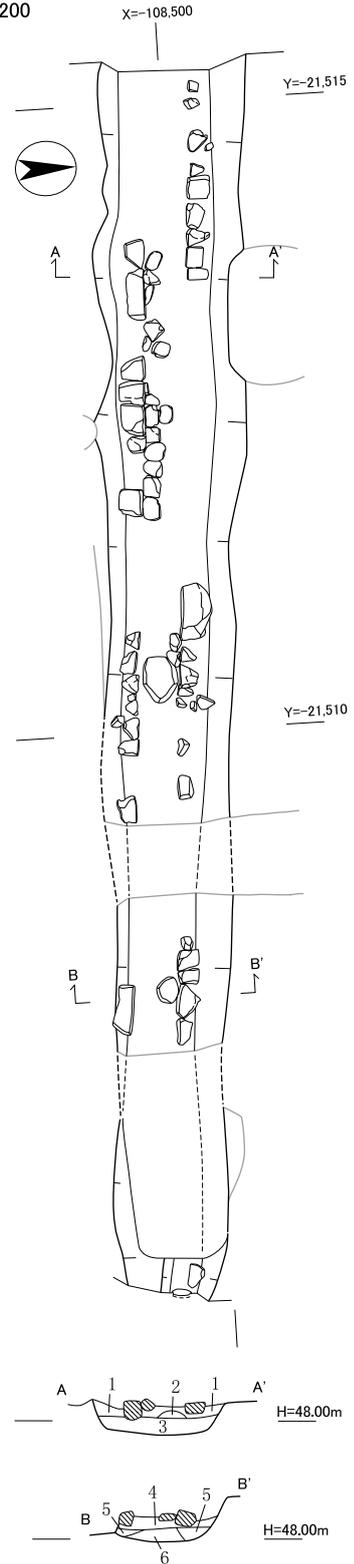
礎石列3



- |                        |                  |
|------------------------|------------------|
| 1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 焼土混 | 4 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 |
| 2 10YR4/4 褐色粗砂礫        | 5 10YR3/3 暗褐色砂泥  |
| 3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥     | 6 10YR2/3 黒褐色砂泥  |



溝200

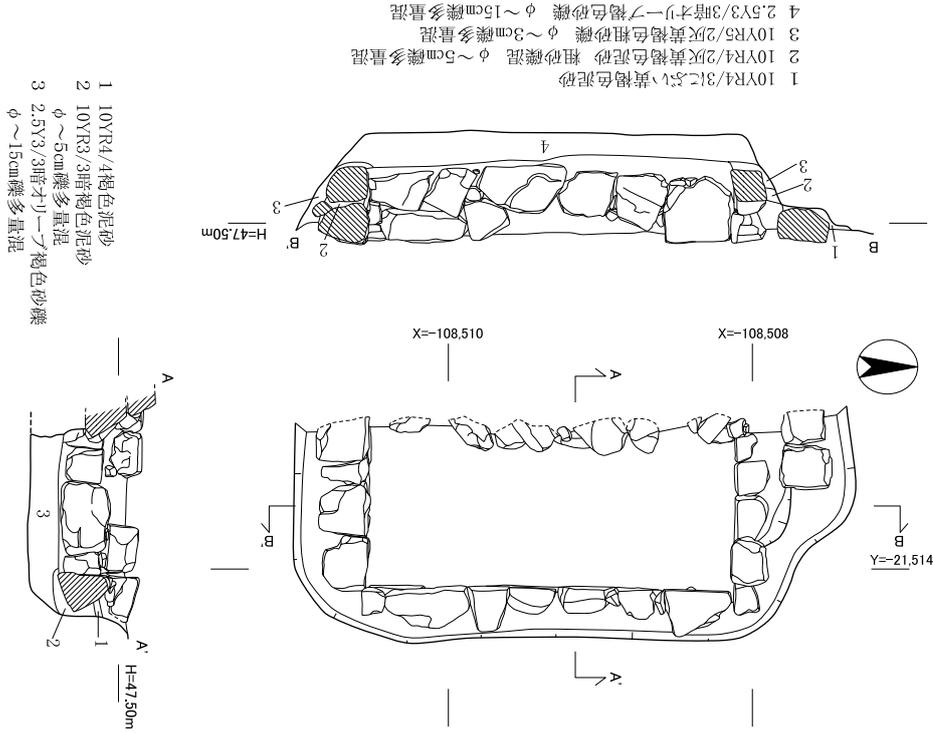


- |                       |
|-----------------------|
| 1 10YR4/4 褐色砂泥        |
| 2 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 焼土少量 |
| 3 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂粗砂  |
| 4 10YR4/4 褐色砂泥        |
| 5 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥    |
| 6 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂    |



図15 礎石列3実測図 (1 : 50)、溝200実測図 (1 : 60)

石室240



石室243

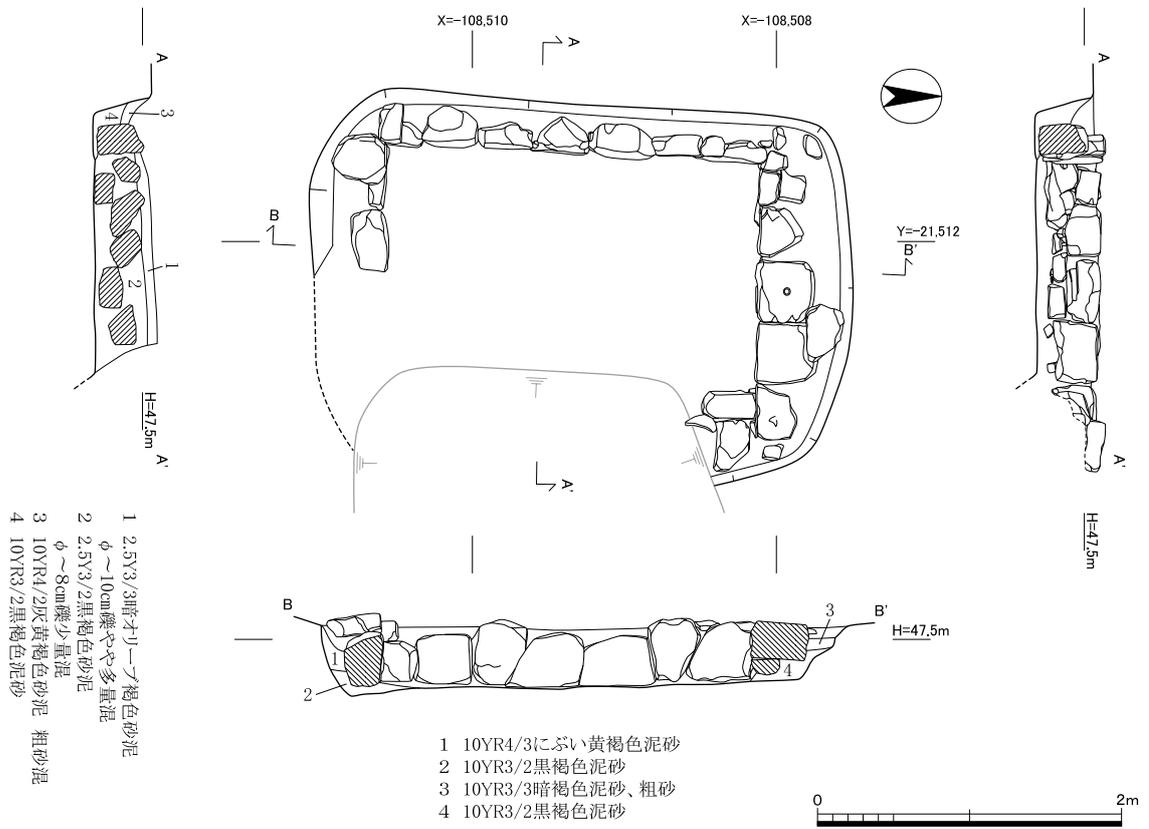
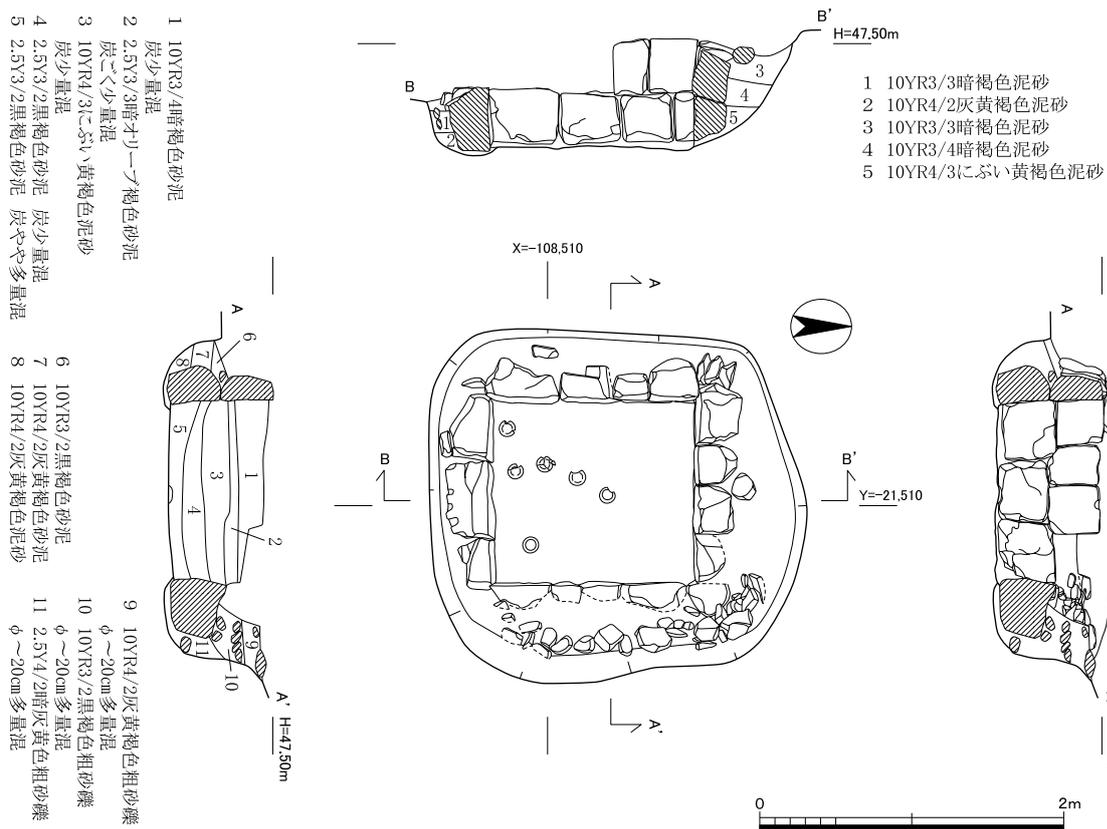
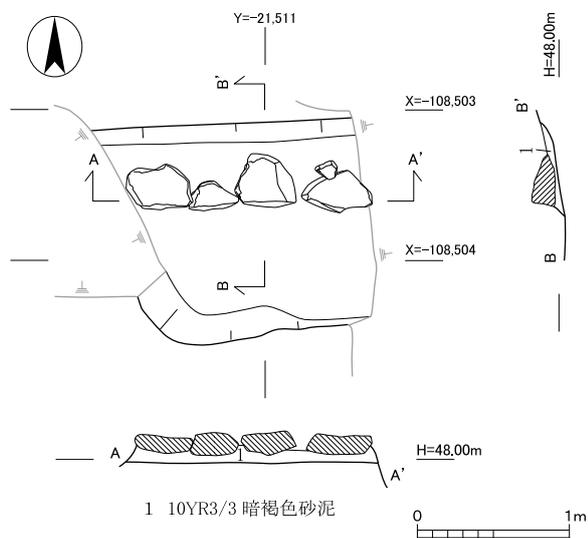


図16 石室240・243実測図 (1 : 50)



石列230 (図18) 調査区西部で検出した東西方向の石列である。掘形は南北約0.6m、東西1.6m以上、深さ約0.2m。東西端は後世の遺構に壊される。石列は東西方向に1段4石並び、南側に面を揃える。石材は長辺0.3~0.4m、厚さ約0.1mの花崗岩割石である。被熱痕跡は認められない。



溝200 (図版13、図15) 調査区北部で検出した東西方向の石組溝である。両側とも調査区外に延びる。掘形の幅1.0~1.2m、深さ約0.4m、東西10m以上、石組の内法幅は約0.35m。石材は長辺0.1~0.5mの花崗岩割石。

溝底部には径0.1~0.2mの河原石が平坦面を上にして据え付けている。南北両側と底面ともに多くの石材が抜き取られている。埋土は赤褐色砂泥の焼土を主とする。完形の埴や瓦類が出土した。

土坑223 調査区北東部で検出した。掘形は東西0.7m、南北1.2m、深さ約0.7m。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。

溝224 調査区南東部で検出した東西方向の溝である。さらに東側は調査区外に延びる。幅0.8~1.1m、深さ約0.2m、東西4.2m以上。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。

(6) 第2面〔江戸時代末期〕の遺構 (図版4・14)

焼土を多量に含む火災後の整地層の上面で成立した遺構面である。被熱した陶磁器類・瓦類・壁土などが細かく砕かれて整地層中に含まれる。溝や調査区北東部で小土坑群を検出した。

**土坑40** 調査区北西部で検出した。掘形は東西約1.3m、南北約1.2m、深さ約0.3m。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。

**溝89** 調査区北部で検出した東西方向の溝である。東側は調査区外となる。幅約0.8m、深さ約0.3m、東西7.0m以上。埋土は暗褐色砂泥を主体とする。

**集石52** 調査区北西部で検出した集石である。掘形は径約0.5m、深さ約0.3m。土坑内に径約0.1mの礫を詰める。

**集石177** 調査区南東部で検出した集石である。掘形は径約0.6m、深さ約0.3m。土坑内に径約0.1~0.2mの礫を詰める。

(7) 第1面〔明治時代以降〕の遺構 (図版5・15)

建物の布掘り基礎や柱列、溝などほかの遺構面と比べて多くの遺構を検出している。これらの中には、大正天皇、昭和天皇の御大典に関連するものもあるとみられる。

**建物1** 調査区西部で検出した建物の布掘り基礎である。平面形がコ字形を呈し、西辺は調査区外となる。東西4.2m以上、南北約7.8m、溝は幅0.6~1.0m、深さ0.6~0.9m。埋土は暗褐色砂泥を主体とする。

**建物2** 調査区東部で検出した建物の布掘り基礎である。平面形が逆コ字形を呈する。東辺は調査区外となる。東西5.0m以上、南北約6.3m、溝は幅0.7~1.0m、深さ0.6~0.8m。埋土は暗褐色砂泥を主体とする。

**柱列1** (図19) 調査区西端部で検出した南北方向の柱列である。柱穴は径0.5~0.6m、深さ0.05~0.2m、8基を確認した。柱間は北側3基が約1.0m、南側6基が約0.8m。さらに南北に延びる可能性がある。埋土は暗褐色砂泥や黒褐色砂泥を主体とする。南北方向の塀・柵の可能性もある。

**土坑22・136** (図20) 調査区南西部で検出した。土坑22の掘形は南北約1.0m、東西約1.1m、深さ約0.3m。平面形はやや歪な隅丸方形を呈する。土坑内に長辺約0.5mの石

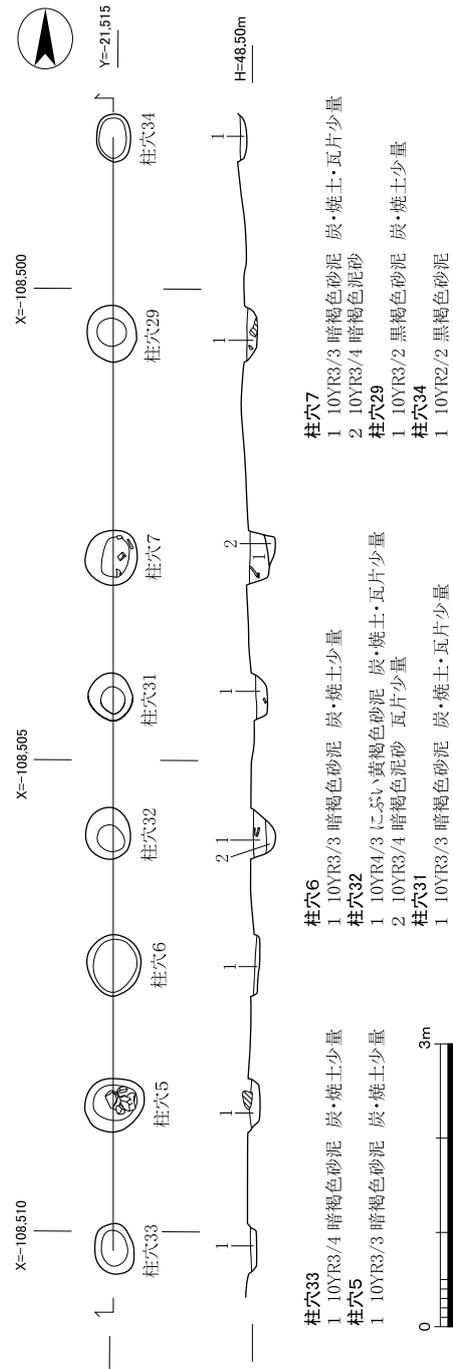
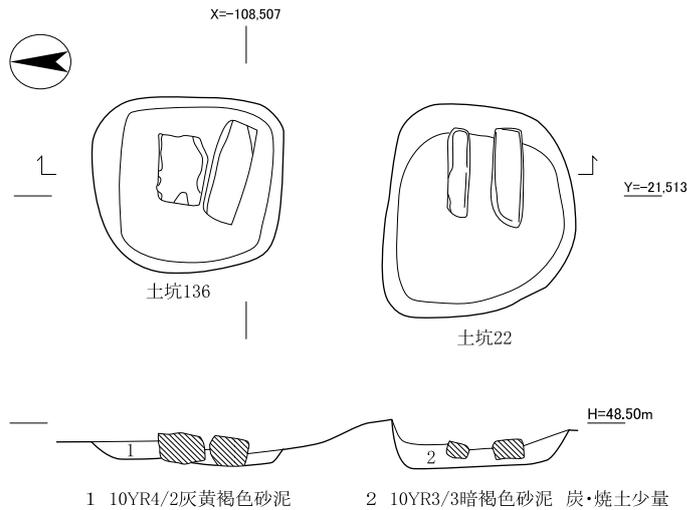


図19 柱列1実測図 (1 : 80)

土坑22・136



埋甕126

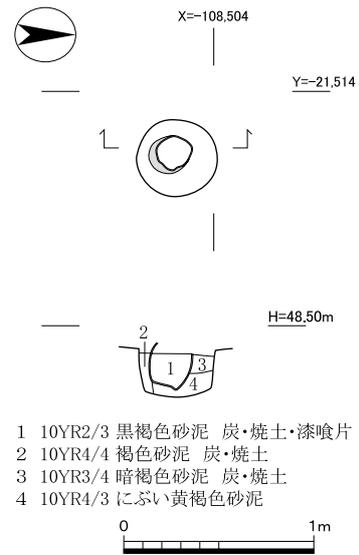


図20 土坑22・136、埋甕126実測図（1：40）

材を2石並べて据える。土坑22の北約0.6mには、土坑136が位置する。掘形は南北約1.0m、東西約0.9m、深さ約0.2m。平面形は隅丸方形を呈する。土坑内に長辺約0.5mの石材を2石並べて据える。石材には矢穴がある。埋土は暗褐色砂泥、灰黄褐色砂泥である。2基は同様の構造をもつことから関連があるとみられるが、性格は不明である。

**溝20** 調査区東部で検出した南北方向の溝である。さらに南北ともに調査区外に延びる。幅0.3～0.5m、深さ約0.5m、南北約12m。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。排水溝とみられる。

**溝21** 調査区の東部で検出した南北方向の溝である。さらに南北ともに調査区外に延びる。幅0.6～0.9m、深さ約1.2m、南北12.5m以上。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。

**溝96** 調査区の東部で検出した南北方向の溝である。さらに南北ともに調査区外に延びる。幅0.6～0.8m、深さ約0.8m、南北10.5m以上。埋土は暗褐色砂泥を主体とする。

**土坑109** 調査区の北東部で検出した。掘形は東西0.9m以上、南北1.3m、深さ約0.5m。西部を溝96に壊される。埋土はにぶい黄褐色砂泥を主体とする。

**埋甕126**（図20） 調査区の西部で検出した。掘形は径約0.4m、深さ約0.3m。土坑内に信楽焼の甕をやや北側に傾けて据え付ける。甕内には黒褐色砂泥とともに炭化物・焼土・漆喰片が充満している。埋土はにぶい黄褐色砂泥を主体とする。

註

- 1) 森岡秀人・藤川祐作「矢穴の型式学」『古代学研究』第180号 - 森浩一先生傘壽記念論文集 - 2008年

## 4. 遺物

### (1) 遺物の概要

遺物は、整理コンテナに56箱出土した。時代別にみると江戸時代のものが最も多く、次いで平安時代から室町時代となり、安土桃山時代のものは少ない。遺物の種類では、瓦類が多くを占める。

安土桃山時代の石垣312掘形や堀313などから、土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・輸入陶磁器・瓦類が出土した。瓦には桐文や菊文などの金箔瓦がある。なお、堀313からの遺物の出土量は多くはなく、コンテナ2箱程度である。第5面の整地層からの出土遺物は、土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・瓦器・施釉陶器・焼締陶器・輸入陶磁器・瓦類など、平安時代から室町時代の遺物が主となっている。

江戸時代の柱穴・土坑・溝・石室・整地層などからは、土師器・土師質土器・焼締陶器・施釉陶器・染付・輸入陶磁器・土製品・瓦類などが出土した。肥前産の禁裏御用品の染付に関しては後期の遺構から多く出土しているが、すべて小片であった。また、瓦類には埴が含まれる。

その他の遺物には、金属製品・石製品・ガラス・貝・骨などがある。金属製品には、飾金具・釘・銭貨があり、銭貨には輸入銭や寛永通寶がある。

遺物は種類ごとに時代の古い順から記述する。個々の土器類の詳細については、遺物観察表に掲載した。出土遺物の時期は、平尾政幸氏の編年に準拠した<sup>1)</sup>。

### (2) 土器類 (図版16、図21、表6)

第5面出土土器 (1・2) 土師器・焼締陶器・施釉陶器・輸入磁器などが出土した。1・2は土師器皿Sである。やや平坦な底部から体部が緩やかに外上方に立ち上がる。口縁部は丸く収め内

表5 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、瓦類		軒丸瓦3点、軒平瓦5点		
鎌倉時代 ～室町時代	土師器、瓦器、輸入陶磁器、瓦類				
安土桃山時代	土師器、金箔瓦、軒丸瓦、飾り瓦		土師器2点、金箔瓦8点、軒丸瓦1点、飾り瓦1点		
江戸時代	土師器、焼締陶器、施釉陶器、染付、輸入陶磁器、瓦類、金属製品、石製品		土師器19点、施釉陶器1点、軟質施釉陶器1点、染付3点、瓦類20点、金属製品13点		
明治時代	施釉陶器		施釉陶器1点		
合計		63箱	78点 (5箱)	0箱	58箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より7箱多くなっている。

側にわずかに面をもつ。底部内面にわずかな圏線状の盛り上がりが認められる。口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデを施し、外面はオサエ。11 A段階に属する。

**石室241出土土器 (3~19)** 土師器・焼締陶器・施釉陶器・染付などが出土した。3~16は土師器である。3~6は皿Sの特徴をもつ蓋である。皿Sの外面を丁寧にナデ調整し、外面中央部付近に摘みを貼り付けるが、摘みは剥離している。5の口縁部の一部には油煙が付着する。7~9は皿Nである。口縁部から底部が一体的に丸味をもつ口径が小さい皿である。外面底部と内面底部の一部のみにナデ調整がみられる。10~15は皿Sである。やや丸みを帯びた底部から口縁部が緩やかに外反して立ち上がる。口縁端部は丸く収める。内面底部に凹線状の圏線が巡る。口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデを施し、外面はオサエ。10の口縁部には油煙が付着する。12の底部外面には墨書があるが判読できない。16は大型皿Sである。口径は19.7cm。これらの土師器は13 A段階に属する。17~19は肥前磁器染付の椀。いずれも器壁は薄く、高台の作りも丁寧である。17は高台周囲に土波を巡らせ、体部には簡略化された草文を表す。18は松梅文を描く。高台内に角福銘がある。19は松竹梅文を描く。

**溝96出土土器 (20~22)** 土師器・施釉陶器・染付などが出土した。20~22は土師器皿Sである。平坦な底部から口縁部は中ほどで緩やかに外反し、端部は丸く収まる。内面底部に凹線状の圏線が巡る。口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデを施し、外面はオサエ。13 B段階である。

**溝144出土土器 (23)** 土師器・焼締陶器・施釉陶器・染付・輸入磁器などが出土した。23は土師器皿Sである。やや丸みを帯びた底部から口縁部は中ほどで緩やかに外反して立ち上がる。口縁

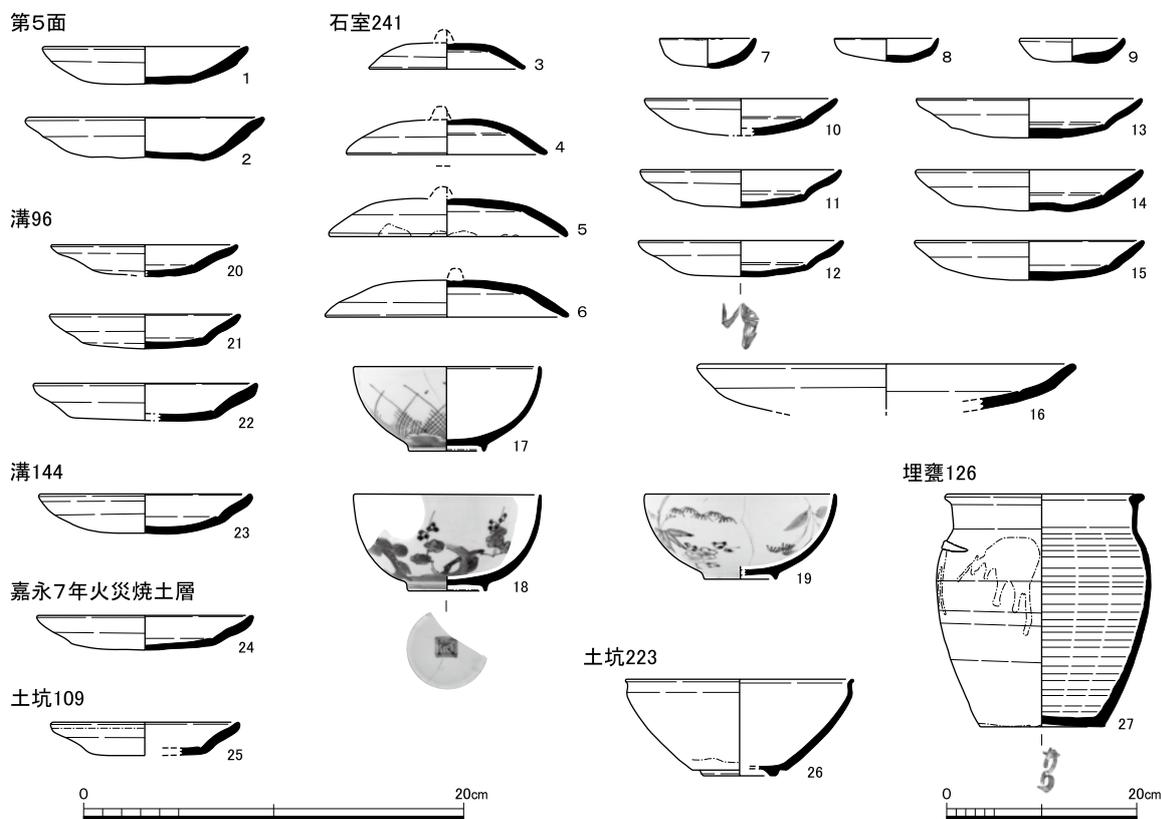


図21 出土土器実測図 (1 : 4、27のみ 1 : 8)

端部は丸く収める。内面底部に凹線状の圏線が巡る。口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデを施し、外面はオサエ。13 B段階に属する。

嘉永7年火災焼土層出土土器 (24) 土師器・焼締陶器・施釉陶器・染付などが出土した。24は土師器皿Sである。平坦な底部から口縁部が中ほどで緩やかに外反して立ち上がる。口縁端部は丸く収める。内面底部に凹線状の圏線が巡る。口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデを施し、外面はオサエ。14 B段階に属する。

土坑109出土土器 (25) 土師器・施釉陶器・染付などが出土した。25は軟質施釉陶器である。土師器皿Sの口縁部付近に施釉する。13 B段階に属するとみられる。

表6 出土土器観察表

※( )は残存数値

番号	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	胎土色調	備考
1	土師器	皿S	第5面	10.6	2.0		50	7.5YR8/8黄橙色	
2	土師器	皿S	第5面	12.3	2.3		40	7.5YR8/8黄橙色	
3	土師器	皿S蓋	石室241	8.0	1.4		95	10YR7/4にぶい黄橙色	
4	土師器	皿S蓋	石室241	10.7	1.9		95	7.5YR6/4にぶい橙色	
5	土師器	皿S蓋	石室241	12.4	(2.0)		95	5YR7/6橙色	口縁部油煙付着
6	土師器	皿S蓋	石室241	12.6	(2.0)		95	7.5YR8/8黄橙色	
7	土師器	皿N	石室241	5.0	1.6		100	7.5YR7/4にぶい橙色	口縁部油煙付着
8	土師器	皿N	石室241	5.4	1.3		100	10YR7/4にぶい黄橙色	
9	土師器	皿N	石室241	5.4	1.4		100	10YR7/4にぶい黄橙色	
10	土師器	皿S	石室241	10.0	2.0		35	10YR8/3浅黄橙色	
11	土師器	皿S	石室241	10.5	2.0		100	7.5YR7/4にぶい橙色	
12	土師器	皿S	石室241	10.7	2.0		35	7.5YR7/4にぶい橙色	底部外面墨書
13	土師器	皿S	石室241	11.8	2.1		35	2.5Y7/1灰白色	
14	土師器	皿S	石室241	11.8	2.2		100	5YR7/6橙色	
15	土師器	皿S	石室241	11.9	2.1		100	7.5YR6/6橙色	
16	土師器	皿S	石室241	19.7	(2.5)		25	5YR7/6橙色	特大
17	染付	椀	石室241	9.7	4.5	3.9	70	N9/0白色 釉:N8/0灰白色	
18	染付	椀	石室241	9.8	5.2	4.0	50	N9/0白色 釉:N8/0灰白色	
19	染付	椀	石室241	10.0	4.5	3.8	50	N9/0白色 釉:N8/0灰白色	
20	土師器	皿S	溝96	9.8	1.7		50	7.5YR8/4浅黄橙色	
21	土師器	皿S	溝96	10.0	1.8		50	7.5YR8/4浅黄橙色	
22	土師器	皿S	溝96	11.7	2.0		40	7.5YR8/6浅黄橙色	
23	土師器	皿S	溝144	11.2	1.8		40	7.5YR8/4浅黄橙色	
24	土師器	皿S	嘉永7年火災 焼土層	11.0	2.1		100	2.5Y8/2灰白色	白色
25	軟質施釉陶器	皿	土坑109	9.8	1.7		30	7.5YR8/6浅黄橙色	
26	施釉陶器	天目椀	土坑223	1.8	5.1		20	2.5Y8/1灰白色 釉:N2/0黒色	京焼
27	施釉陶器	甕	埋甕126	20.5	24.7	13.0	80	N9/0白色 釉:5YR3/4暗赤褐色	底部外面墨書

土坑223出土土器(26) 土師器・施釉陶器・染付などが出土した。26は施釉陶器の天目椀である。京焼。器壁が薄く作りが丁寧である。二次的な被熱が前面に認められる。

埋甕126出土土器(27) 27は施釉陶器甕である。信楽焼。底部外面以外に暗赤褐色の釉を掛ける。肩部に黒色釉を掛け流す。肩部には焼成時の溶着痕がみられる。底部外面に墨書が認められる。口径は20.5cm、器高は24.7cm。

### (3) 瓦類 (巻頭図版3、図版17・18、図22～25)

瓦類には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・道具瓦・塼などがあり、金箔瓦も含まれる。柱穴・土坑・溝・石室・堀・整地層などから出土している。時代別にみると平安時代・安土桃山時代・江戸時代の瓦類があり、量的には江戸時代のものが多い。鎌倉・室町時代の瓦当は出土していない。安土桃山時代の瓦は、金箔瓦を含んでおり、京都新城所用瓦と思われるが、出土量はコンテナ1箱程度である。

#### 平安時代 (図22)

軒丸瓦(瓦1～3) 瓦1は複弁蓮華文軒丸瓦である。中房・花卉ともに平坦である。瓦当裏面に粗い布目あり、瓦当部成形は一本造り技法。全体に摩滅が著しく調整は不明。胎土には3mm前後の白色粒・黒色粒を少量含む。色調は灰色で、焼成はやや軟質。時期は平安時代中期。第4面整地層から出土。

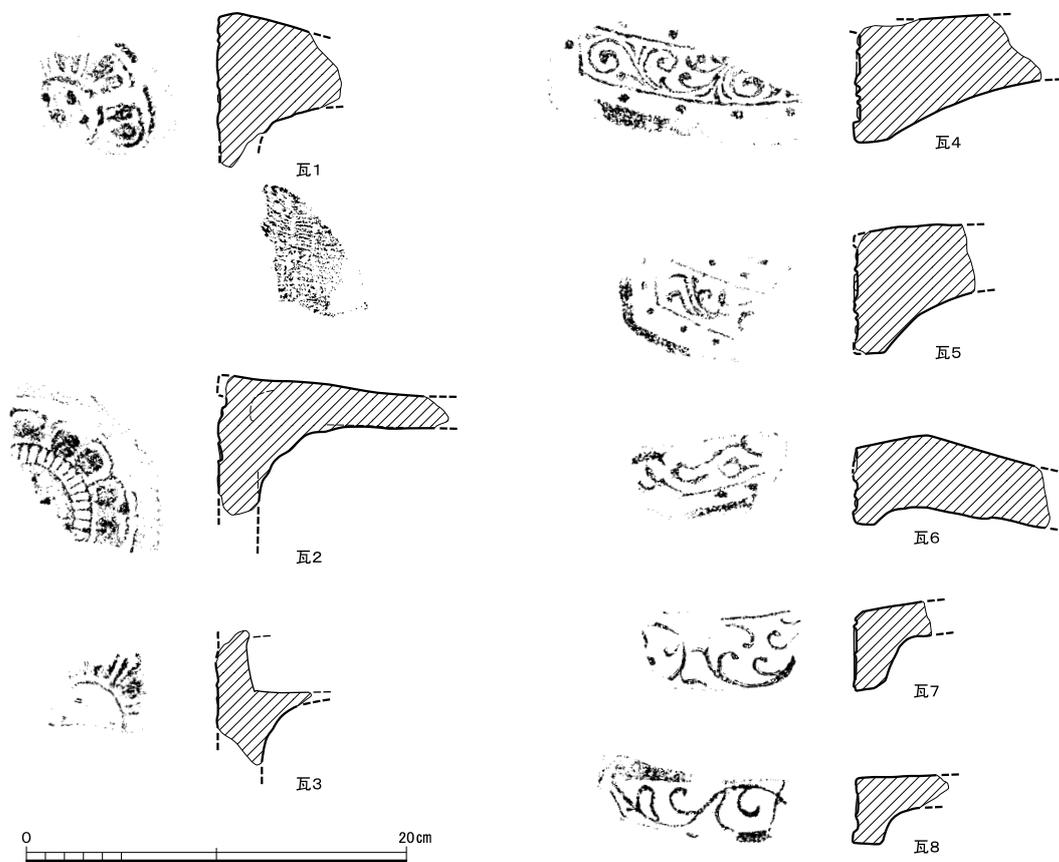


図22 出土瓦類拓影及び実測図1 (1:4)

瓦2は複弁蓮華文軒丸瓦である。径の大きな凸形中房の周りに蕊帯が巡る。中房と短い複弁ともに平坦である。瓦当部裏面上部に丸瓦を当て、粘土を付加して接合。瓦当裏面はオサエ、丸瓦部凸面はタテ方向ヘラケズリ。全体に摩滅が著しい。胎土には2mm前後の白色粒を少量含む。色調は灰色で、焼成はやや軟質。時期は平安時代後期。堀313から出土。

瓦3は蓮華文軒丸瓦である。中房・花卉ともに平坦である。瓦当部裏面上端付近に丸瓦接合した跡が残る。瓦当部裏面はオサエ。胎土には2mm前後の白・黒・赤色粒を含む。色調は橙色で、焼成は軟質。時期は平安時代後期。石室240から出土。

軒平瓦（瓦4～8） 瓦4は均整唐草文軒平瓦である。唐草文の主葉は強く巻き込み先端は丸くなる。顎部凸面はヨコ方向のケズリのちナデ。顎部裏面から平瓦凸面はタテ方向のケズリ、平瓦部凹面はヨコ方向のナデ。胎土には1mm前後の白・黒色粒と5mm程度の礫を少量含む。色調は浅黄橙色で、焼成はやや軟質。時期は平安時代前期。第5面整地層から出土。

瓦5は唐草文軒平瓦である。唐草文は緩く反転する。顎部凸面はヨコ方向のケズリのちナデ。顎部裏面はタテ方向のナデのちヨコナデ。平瓦部凹面には布目痕が残る。胎土には1mm前後の白・黒色粒を少量含む。色調は浅黄橙色で、焼成は軟質。二次的な被熱痕跡がみられる。時期は平安時代中期。堀313から出土。

瓦6は偏向唐草文軒平瓦。主葉は緩やかに反転する。全体に摩滅が著しく調整は不明。瓦当成形は折曲げ技法。胎土には1mm前後の白・黒色粒と5mm程度の礫を少量含む。色調は灰色で、焼成はやや軟質。京都産。時期は平安時代後期。第4面整地層から出土。

瓦7は偏向唐草文軒平瓦。主葉は大きく反転し、支葉は強く巻き込む。瓦当部上端部はヨコ方向のケズリ。顎部凸面はヨコ方向のケズリ、顎部裏面はオサエのちヨコ方向のナデ。瓦当成形は折曲げ技法。胎土には1mm前後の白・黒色粒を少量含む。色調は浅黄橙色で、焼成は軟質。京都産。時期は平安時代後期。堀313から出土。

瓦8は偏向唐草文軒平瓦。主葉は連続して大きく反転し、支葉は強く巻き込む。瓦当部上端部はヨコ方向のケズリ。顎部凸面はヨコ方向のケズリ、顎部裏面はオサエのちヨコ方向のナデ。平瓦部凹面には布目痕が残る。瓦当成形は折曲げ技法。胎土には1mm前後の白色粒を微量含む。色調は灰色で、焼成はやや軟質。時期は平安時代後期。第4面整地層から出土。

### 安土桃山時代（巻頭図版3、図23）

以下の瓦類の時期は、瓦当文様・成形技法から安土桃山時代と考えられ、京都新城所用瓦と考えられる。

金箔軒丸瓦（瓦9～12） 瓦9～11は金箔五七桐文軒丸瓦である。瓦9・10は周縁と桐文の凸部に金箔を施す。周縁はヨコ方向のナデ、瓦当部側面はヨコ方向のナデ、瓦当部裏面はナデ。胎土は緻密で、焼成は良好で焼き締まり、暗灰色を呈する。瓦9は第4面掘下げ中、瓦10は堀313から出土。瓦11は周縁部が欠損する。瓦当部裏面はヨコ方向のケズリ。胎土は緻密で、焼成は良好で焼き締まり、暗灰色を呈する。第5面から出土。

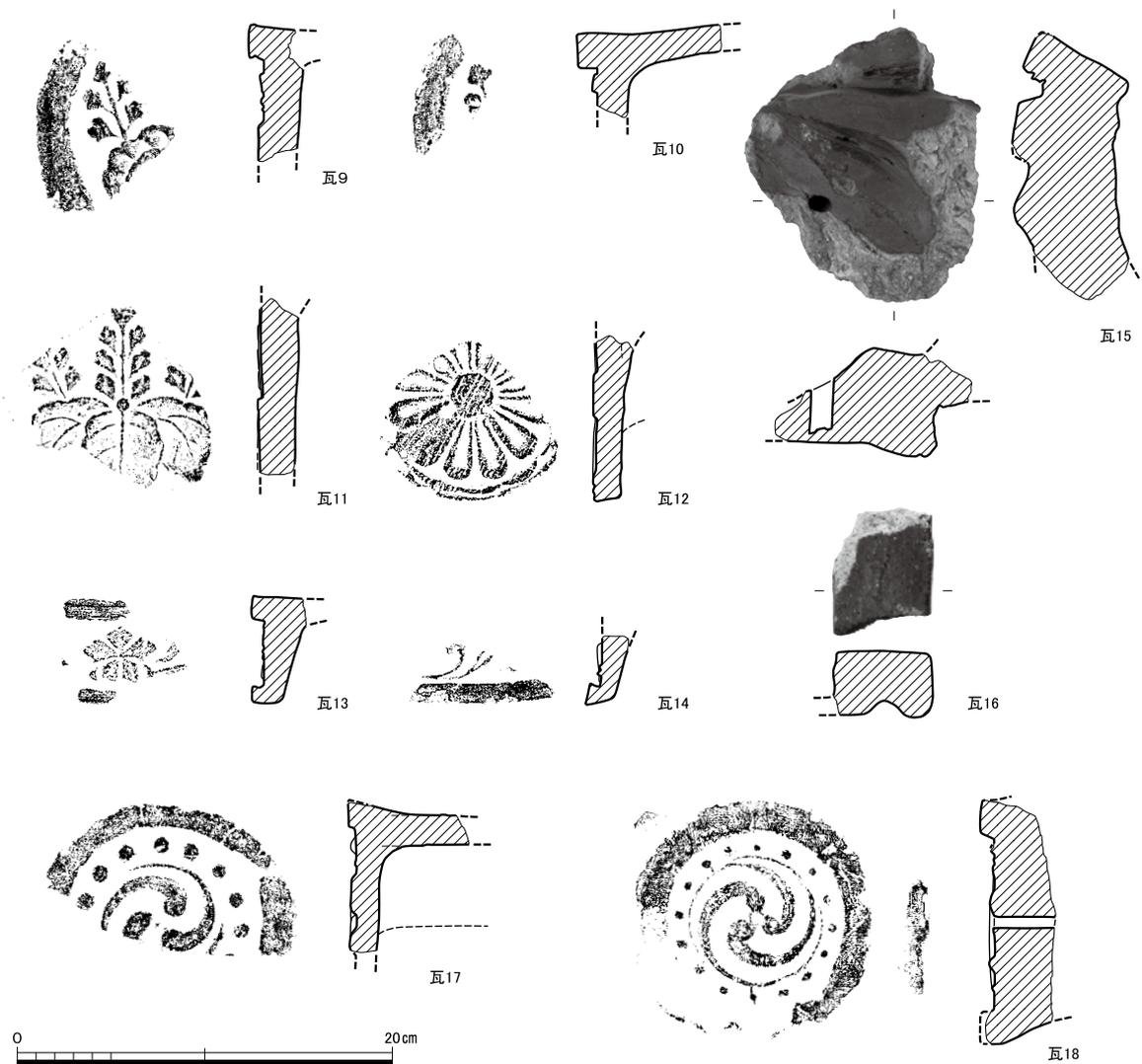


図23 出土瓦類拓影及び実測図2（1：4）

瓦12は金箔菊花文軒丸瓦である。周縁はない。花卉は単弁で凸線の輪郭線で表す。凹面を含む瓦当全面に金箔を施す。瓦当部側面はヨコ方向のナデ、瓦当部裏面はナデとオサエ。胎土は緻密で、焼成は良好で焼き締まり、暗灰色を呈する。第4面掘下げ中に出土。

**金箔軒平瓦（瓦13・14）** 瓦13は金箔花文軒平瓦である。周縁と花文の凸部に金箔を施す。瓦当部凹面と顎部凸面はヨコ方向のナデ。瓦当部裏面はナデ。胎土は緻密で1mm前後の白色粒を微量含む。焼成は瓦質。色調は断面が白色、表面は黒灰色を呈する。第4面整地層から出土。

瓦14は金箔唐草文軒平瓦である。周縁と瓦当凸部に金箔と朱漆が残る。顎部凸面はヨコ方向のナデ。瓦当部裏面はヨコ方向のナデ。胎土は緻密で1mm前後の白色粒を微量含む。焼成は瓦質。色調は断面が暗灰色、表面は黒灰色を呈する。第5面整地層から出土。

**金箔飾り瓦（瓦15・16）** 瓦15は鬼瓦の一部とみられる。花卉の凸面の一部に金箔と朱漆が残る。文様面に径1cm・深さ2.5cmの穴が穿たれる。裏面まで貫通はしない。瓦16は道具瓦の一部とみられる。残存する金箔はわずかである。胎土は1mm前後の白・黒色粒と5mm程度の黒色粒を含む。焼成は瓦質。色調は断面が灰色、表面は黒灰色を呈する。瓦15・16ともに堀313から出土。

軒丸瓦（瓦17） 三巴文軒丸瓦である。巴は右巻きで尾が互いに接しない。外区に小粒の珠文がやや密に巡る。瓦当部裏面上部に丸瓦を当て、粘土を付加して接合。調整は、瓦当側面はヨコナデを施す。丸瓦凸面にはタテ方向のナデ。丸瓦凹面には布目が残る。胎土は密で、焼成は瓦質。色調は灰色を呈する。第4面整地層から出土。

飾り瓦（瓦18） 三巴文の飾り瓦の一部である。巴が右巻きで尾が互いに接しない。外区に16個の小粒の珠文が巡る。巴中心部に円孔がある。裏面は全面にカキヤブリを施す。胎土は密で、焼成は良好で焼き締まり、黄灰色を呈する。瓦当面にはキラ粉が付着する。堀313から出土。

### 江戸時代（図24・25）

軒丸瓦（瓦19～21） 瓦19は三巴文軒丸瓦。巴は右巻きで尾は互いに接しない。外区に大粒の珠文が13個巡る。瓦当部裏面上部に丸瓦を当て、少量の粘土を付加して接合。外区外縁及び内縁に面取りを施す。瓦当側面はヨコナデ、瓦当裏面下端に円周状ナデを施す。丸瓦凹面には細かい布目が残る。胎土は1mm前後の白・黒色粒を少量含む。焼成は瓦質。色調は断面が白灰色、表面は黒灰色を呈する。瓦当面にはキラ粉が付着する。第2面整地層から出土。

瓦20・21は三巴文軒丸瓦。巴は右巻きで尾は互いに接しない。外区に大粒の珠文が巡る。瓦当側面はヨコナデ、瓦当裏面下端に円周状ナデを施す。瓦21は周縁部の外縁及び内縁に面取りを施す。ともに胎土は密で、焼成は良好で焼き締まり、灰色を呈する。瓦当面にはキラ粉が付着する。瓦20は土坑97、瓦21は溝200から出土。

軒平瓦（瓦22～25） 瓦22～25は唐草文軒平瓦。瓦22・23は瓦当部上下端に面取り、顎端面と顎裏面をヨコナデ。瓦24は瓦当部下端に面取り、瓦25は瓦当部上端に面取りを施す。いずれも胎土に1mm前後の白・黒色粒をわずかに含む。焼成は瓦質、色調は断面が白灰色、表面が黒灰色を呈する。瓦当面にはキラ粉が付着する。瓦22～24は溝200、瓦25は土坑40から出土。

棟丸瓦（瓦26～35） 瓦26～35はいずれも菊文の棟丸瓦である。周縁のあるものとないものに大別できる。

瓦26～33は周縁を持つタイプで単弁。瓦26～32はともに花卉を凸線の輪郭線で表す。瓦33は花卉を盛り上げて表す凸弁である。瓦26～30は八弁菊文である。調整は瓦当側面はヨコナデ、瓦当裏面下端は円周状にナデ、さし部外面はタテ方向のナデ。胎土に1mm前後の白・黒色粒わずかに含む。焼成は瓦質。瓦26のみ外区外縁に面取りを施す。瓦27の瓦当面にはハナレ砂が付着する。瓦28～30の瓦当面にはキラ粉が付着する。瓦31～32は十三弁菊文、瓦33は十六弁菊文である。いずれも調整は、瓦当側面はヨコナデ、瓦当裏面下端は円周状にナデ、外区外縁に面取りを施す。胎土に1mm前後の白・黒色粒をわずかに含む。焼成は瓦質。瓦当面にはキラ粉が付着する。瓦26・32は第2面掘下げ中、瓦27～31は溝200、瓦33は土坑97から出土。

瓦34・35は周縁のないタイプである。瓦34は単弁、瓦35は単弁二重。ともに花卉を凸線の輪郭線で表す。瓦34の瓦当部裏面はナデ。さし部外面はタテ方向のナデ。胎土は密で、焼成はやや軟質。灰白色を呈する。瓦当面にはハナレ砂が付着する。瓦35の瓦当部外周はヨコ方向のナデ、裏面

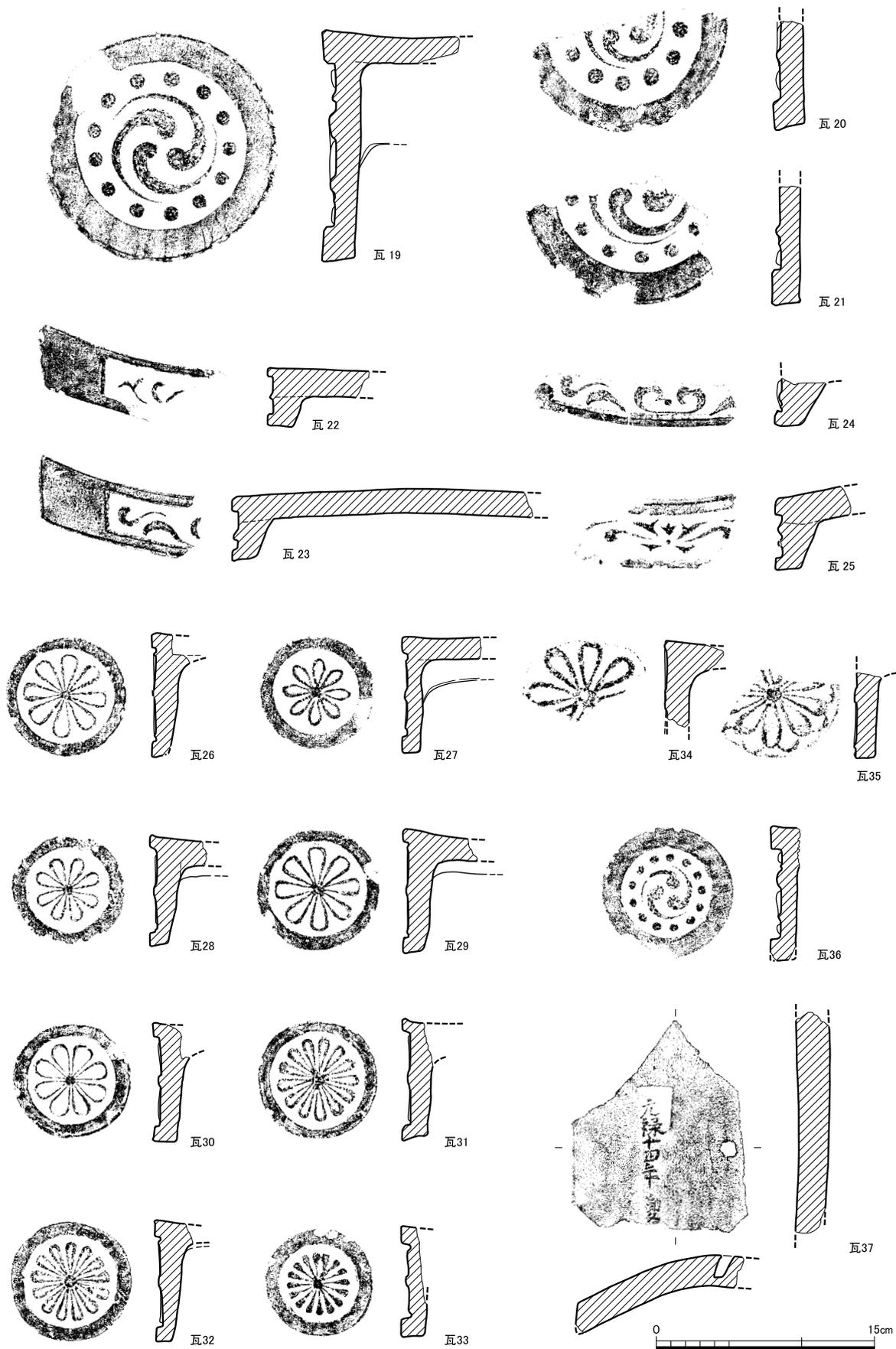


图24 出土瓦類拓影及び実測図3 (1 : 4)

もナデ。胎土は密で、焼成はやや軟質。浅黄橙色を呈する。ともに第1面掘り下げ中に出土。

瓦26～29・31・35には二次的な被熱痕跡が認められる。

飾り瓦（瓦36） 三巴文の飾り瓦の一部である。巴は右巻きで尾が互いに接しない。外区に13個の珠文がやや密に巡る。外区外縁に面取りを施す。裏面にはカキヤブリが施される。胎土に1mm前後の白・黒色粒をわずかに含む。焼成は瓦質。瓦当面にはキラ粉が付着する。柱列1の柱穴32から出土。

平瓦（瓦37） 凹面凸面ともにナデ、側面はタテ方向のナデ。凸面に「元禄十四年御□」の刻印がある<sup>2)</sup>。凸面頂部の円孔は凹面にまでは至らない。胎土に1mm前後の白・黒色粒をわずかに含む。焼成は瓦質。柱穴123から出土。

塼（瓦38） 24.5×27.5cm、厚さ約3.2cm。上面はナデ、側面はヨコ方向のナデ、裏面はナデでハナレ砂が付着する。上面の角は面取りする。胎土は密で、胎土に1mm前後の白・黒色粒をわずかに含む。焼成は瓦質。溝200から出土。

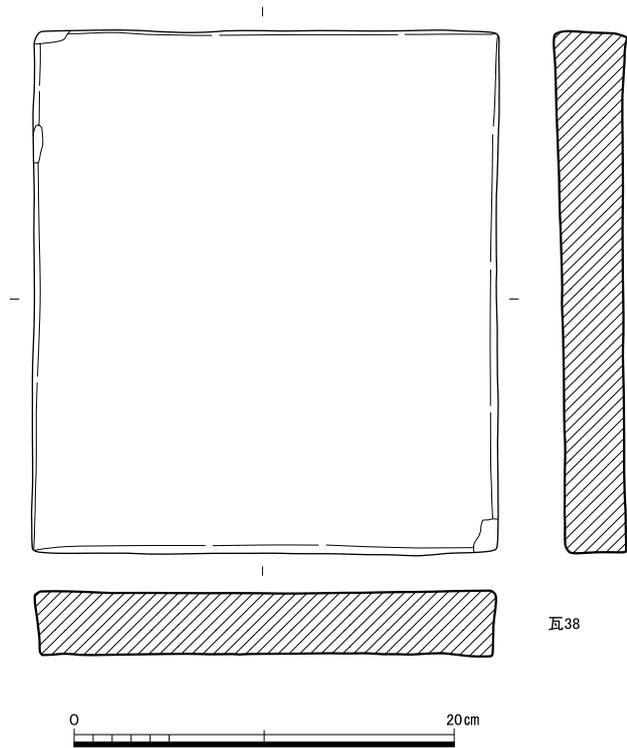


図25 出土塼実測図（1：4）

#### （4）金属製品（図26・27）

金属製品には、飾り金具・釘・銭貨などがある。

飾り金具（金1） 金1は水鳥を象ったとみられる板状の飾り金具である。頭部には花卉が6弁線刻され、斜め下方にはくちばしとみられる突起がある。体部にはタテ方向の線刻で翼もしくは羽毛を表す。脚部は細く先端が尖る。第1面整地層から出土。

釘（金2～6） 金2～6は鉄製の釘である。長さは2.3～5.2cm、断面形は四角形を呈する。鍛造製で頭部の形成は叩き延ばして一方に折り曲げる。嘉永7年火災焼土層から多数出土したが、状態の良好なものを図示した。

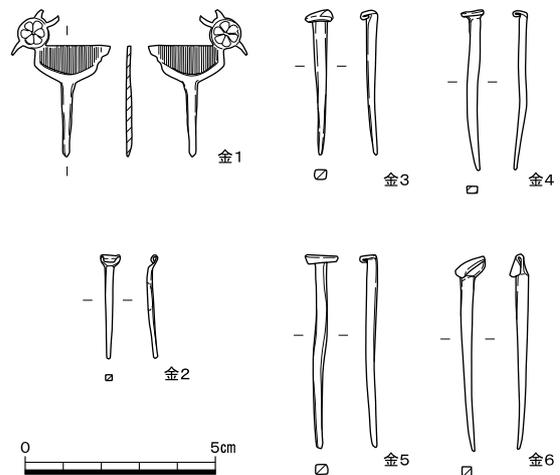


図26 出土金属製品実測図（1：2）

銭貨（銭1～7） 銭貨は合計10枚出土した。このうち3枚は銭文の判別はできなかった。判読できた銭貨には、輸入銭と寛永通寶がある。

輸入銭には、祥符元寶（銭1）、皇宋通寶：真書（銭2）、嘉祐元寶：篆書（銭3）、元豊通寶：篆書（銭4）、元祐通寶：行書（銭5）の5種類がある。銭1は第5面検出中、銭2・4・5は第4面整地層から、銭3は柱列2柱穴269から出土。

寛永通寶（銭6・7）はともに新寛永である。銭6は石室241、銭7は第2面整地層から出土。

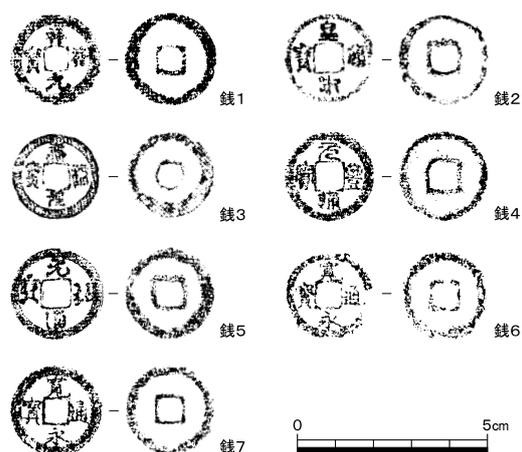


図27 出土銭貨拓影（1：2）

註

- 1) 平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年

750年			840年			930年			1020年			1110年			1170年			1260年			1350年			1410年			1500年			1590年			1680年			1740年			1800年			1860年		
1			2			3			4			5			6			7			8			9			10			11			12			13			14					
A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	A	B					

- 2) 同文とみられる刻印「元禄十四年 御修復」の瓦が、京都市東山区の知恩院三門修理の際に使用されている。『第66回 埋蔵文化財研究集会 幕藩体制下の瓦 - 近世都市遺跡における生産と流通 - 発表要旨・資料集』 2017年

## 5. ま と め (図28)

今回の調査地は、平安京左京一条四坊十町跡・公家町遺跡・京都新城跡にあたる。

平安時代の調査地周辺は、高位の貴族の邸宅街にあたり、藤原道長の土御門殿は後一条・後朱雀・後冷泉ら三代の天皇の里内裏としても利用された。現在の京都御所の地に内裏が定着するのは、14世紀前半に光厳天皇が土御門東洞院に移って以降のことである。

調査地である京都仙洞御所は、京都御苑内の東部に位置し、寛永4年(1627)に譲位し上皇となった後水尾上皇のために造営されたことに始まる。当地は豊臣秀吉が慶長2年(1597)に建てた京都新城(太閤御殿、北政所の屋敷)の推定地にあっており、仙洞御所はその跡地を利用したとされている。

今回の調査では室町時代以前の遺構は検出していない。検出した遺構は、安土桃山時代以後のものである。しかし、遺構や整地層からは平安時代中期・後期の土器類や瓦類が出土し、また、室町時代の遺物も出土していることから、調査地または周辺の土地利用状況を一定反映していると思われる。

以下、安土桃山時代から近代の調査成果を時代ごとに述べる。

**1期(第5面)** 東面する南北方向の石垣312とその東側に堀313を検出した。石垣312は、寛永度の仙洞御所整地層の下層で成立していること、その埋土から五七桐文・菊花文などの金箔瓦が出土すること、以下に述べる石垣の諸特徴などから、慶長2年(1597)に豊臣秀吉によって造営された京都新城の石垣と判断できる。また、石垣は京都新城本丸の西辺を区画する堀の西方部をなす石垣とみられる(付章4参照)。

石垣は大型の自然石を用いた野面積みで3～4段、高さ最大1.6mを検出したが、遺構面との関係から、造成当時はさらに2段程度の石が積まれ、本来の石垣の高さは2.3～2.4m程になると推定できる。石垣の構築角度が約75°と角度が急なのは、高さが約2.4m(復元高)と比較的低いことと関連すると思われる。石垣の特徴は、長さ0.8～1.1mの比較的大きな自然石を主として用いていること、割石がほとんど用いられていないことなどがあげられる。17世紀以降の石垣が花崗岩の割石を多用するようになることと比較して古い要素として捉えることができる。石材には花崗岩・石英斑岩・チャートなどが使用されるが、花崗岩・石英斑岩が主体をなしており、全体として見た目の印象は白色を基調としている。石垣の全体の構築は、自然石を用いながらもよく面を整えており、南北方向のラインも直線に揃えられている。裏込めの栗石は、5～10cm程度の細かい円礫を主とし、築石の背面から0.5m程とそれ程厚みはない。また、堀の中からは築石が16石出土している。石垣上段部を崩しながら堀の中に落としたものとみられる。『義演准后日記』・『言経卿記』・『時慶記』に関ヶ原合戦の前に、京都新城の石垣や堀が破壊されている様子がみられるが、今回調査した部分の堀や石垣の埋没状況からは、寛永度の仙洞御所造営時に石垣を崩して埋め戻したことがわかる<sup>1)</sup>。

今回の石垣312築石に用いられた花崗岩の産地は比良山周辺とみられる。一方、聚楽第石垣の花

崗岩の産地は滋賀県観音寺周辺とされており、京都新城と聚楽第における石垣石材の花崗岩供給地に違いがあることがわかる（付章1参照）。

2期（第4面）寛永4年（1627）に造営された当初仙洞御所の時期にあたる。白砂による化粧仕上げを施した整地層の上面（第4面）で礎石建物の一部とみられる礎石列4を検出した。また、南北方向の柱列2・3は造り替えがあり、東側には雨落ち溝276が付属する。さらに東部には性格は不明であるが東西方向の石列278も存在する。また、整地層は厚さ約0.3mの非常に堅く叩き締められた6～7層から構成されており、さらに最上層は白砂により化粧仕上げを施すなど、極めて丁寧に造成されていることが判明した。第4面は、時期の判明する遺物の出土は少ないが、上下の遺構面の時期や整地の状況から寛永度の仙洞御所造営時の遺構面と考えられる。『寛永度後水尾院御所並東福門院御所指図』<sup>2)</sup>によると、今回の調査地は、後水尾院御所内の中心的な建物群からは北西方向に離れた場所に位置すると思われる。検出した礎石列4がどのような規模・性格の建物であったのか不明であるが、南側には白砂を敷いた空地があったとみられる。

また、この第4面は、厚さ約0.2mの洪水砂層に覆われている。万治元年（1658）、禁中に洪水が及んだとする記録<sup>3)</sup>があり、これに対応するとみられる。この洪水層の上には、厚さ約0.5mの砂層が堆積する。洪水後にこの厚い砂礫層で地表を嵩上げしたとみられる。同様の嵩上のための砂層は、周辺では京都和風迎賓館敷地<sup>4)</sup>・宮内庁京都事務所敷地<sup>5)</sup>・同志社女子大学構内<sup>6)</sup>でも確認されており、時期は17世紀後半である。

3期（第3面）3期は、天明の大火の被災面（図版6-15層：北壁）で成立した遺構と考えられるが、面としての検出は行っていない。遺構には、礎石列3、溝224、石室240・243などがある。礎石列3はその形態から門であった可能性を想定することができ、溝224はその南側を区画する存在であったとみることができる。石室240・243からは炭化物・被熱痕跡のある瓦などが出土した。この2つの石室は東西に並んで、同規模とみられることから、併存して機能していたものが同時に被災したとみられる。

4期（第3面）嘉永7年の被災遺構群である。溝200、石室241がある。4期の遺構の成立面は、第3面（図版6-12層：北壁、図版7-37層：西壁）とみられ、これらの上面には白色系の砂質土が部分的に確認できた。化粧仕上げの整地層の可能性もある。整地層は、厚さ約0.3m内に非常に堅く叩き締められており、寛永度と同様に丁寧に造成されている。寛政度の仙洞御所のものと考えられる。『仙洞御所御構内惣絵図』<sup>7)</sup>をみると、おおよそ院御所の北西部にあたり、検出した遺構から、この付近は地下収納施設などが配置された、日常生活を支える施設が所在していた空間と推測される。

5期（第2面）第2面は、被熱した瓦類・壁土・炭化物などの小片を含む赤褐色の砂泥を主とする層の上面で成立している。嘉永7年（1854）の火災処理整地後の遺構面である。東西方向の溝89や土坑・集石などを検出した。西側に小規模な柱穴が多数分布するが、建物を復元するには至らない。嘉永7年の火災による仙洞御所の建物焼失後にも、当地には建物が建てられていた時期があることが判明した。

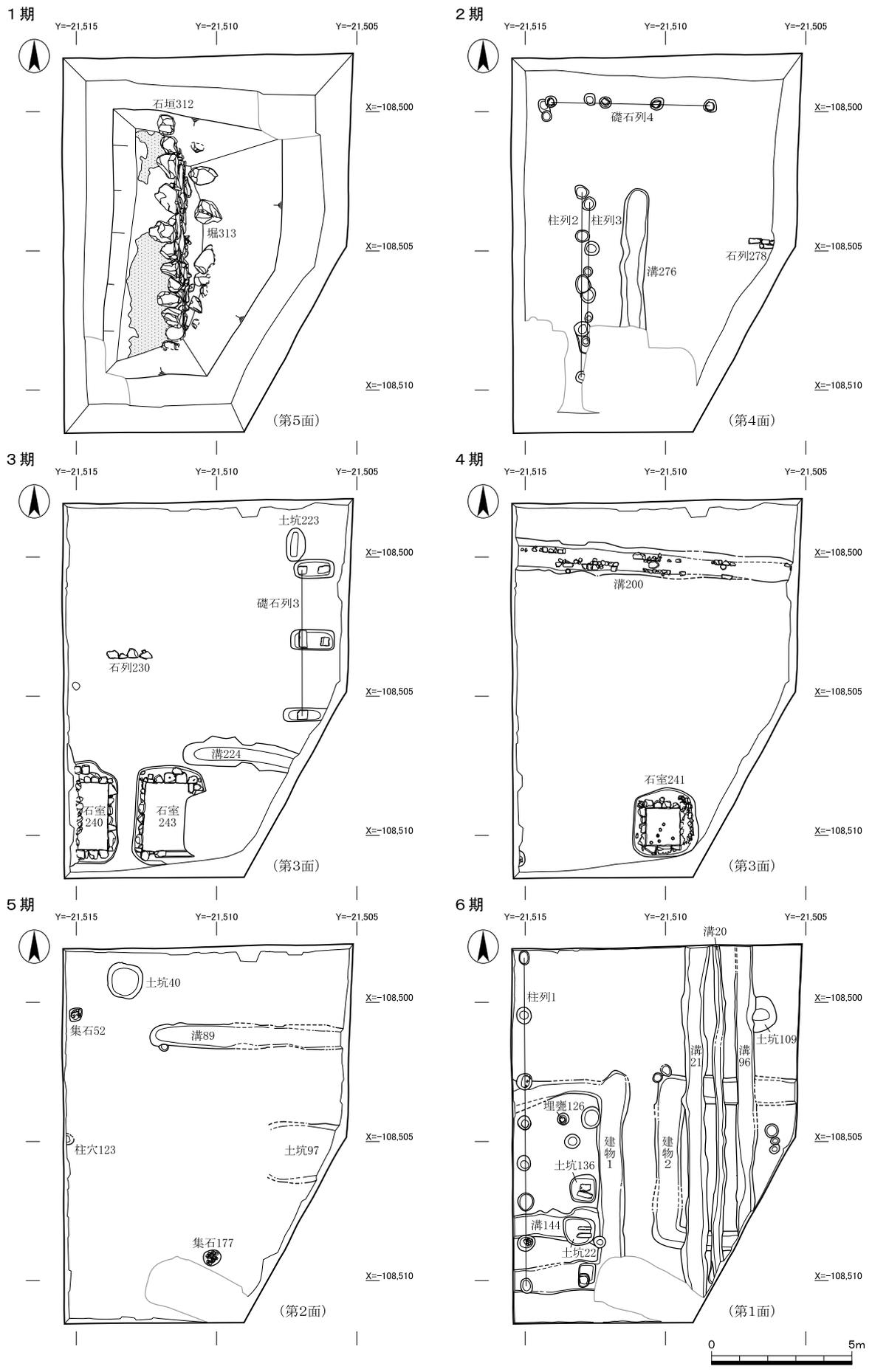


図28 遺構変遷図 (1 : 200)

6期（第1面） 第1面では、建物布掘り基礎や柱列・土坑・溝など多くの遺構を検出した。大正・昭和の時代に仙洞御所で即位礼・大嘗祭が開催・挙行されており、それらに関連する遺構の可能性がある。

今回の調査では、安土桃山時代・江戸時代・明治時代以後の遺構を良好な状態で検出した。京都大宮御所・京都仙洞御所内の調査では、これまで調査掘削深度が浅く、江戸時代後半の遺構面までしか確認されていなかったが、今回の調査により仙洞御所の造営過程の一端及び当地の環境や土地利用についての資料を得ることができた。特に文献の記録が少なく詳細が明らかではなかった京都新城の遺構を初めて発見することができたことは、大きな成果となった。

註

- 1) 2020年5月に行った報道発表において、石垣312の破壊と堀313の埋め立てが関ヶ原の合戦時としたのは誤りである。層位的に見て、石垣が破壊されたのは仙洞御所造営時である。
- 2) 『寛永度後水尾院御所並東福門院御所指図』 宮内庁所蔵
- 3) 池田正一郎『日本災変通史』 新人物往来社 2004年 山鹿素行の日記に、「八月三日四日、・・京都鴨川堤破崩、水入禁裏、洛中洪水・・」と鴨川の堤防が決壊して御所にも洪水が及んだという記述がある。
- 4) 丸川義広ほか『平安京左京北辺四坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 5) 丸川義広『公家町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-5 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009年
- 6) 若林邦彦ほか『常盤井殿町遺跡発掘調査報告書』同志社大学歴史資料館調査研究報告第8集 同志社大学歴史資料館・同志社女子大学 2010年
- 7) 『仙洞御所御構内惣絵図』寛政度 『大工頭中井家建築指図集 中井家所蔵本』思文閣出版 2003年

# 付章1 京都新城の石垣に用いられた石材について

橋本清一（元京都府立山城郷土資料館）

関 晃史（京都市埋蔵文化財研究所）

本報告では、仙洞御所内の調査で検出した京都新城に伴うとされる石垣について、石材観察の機会を得られたので、その結果を述べる。報告は橋本が現地において石材を観察し、その結果を関がまとめたものである。

観察は以下の通り実施した。

- ・寸法の測定は、長径、中径、短径を図1の通り計測<sup>1)</sup>し、土中などで全長が計測できない場合は、計測可能値に「+」を付した。
- ・円磨度は、図2に示す段階表を用いた<sup>1)</sup>。
- ・風化度は、表1に示す区分で評価した<sup>2)</sup>。
- ・詰石に用いられている石材は岩石名のみを記した。
- ・裏込めに使用される栗石に関しては、無作為に抽出した40点を観察対象とした。

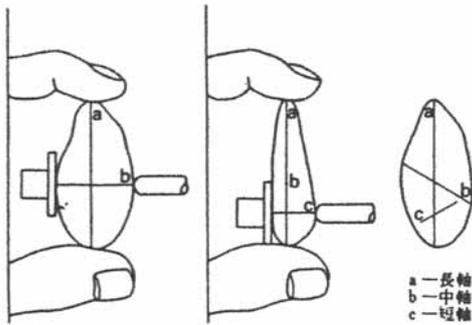


図1 礫の大きさの測定法

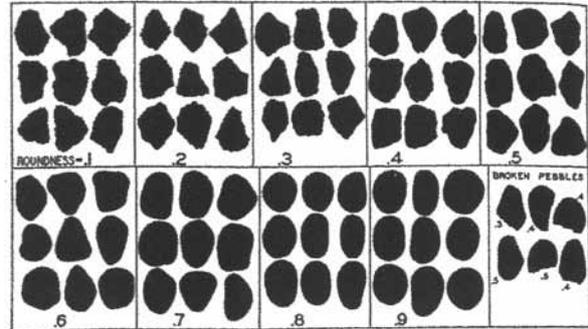


図2 礫の円磨度の段階表

表1 肉眼観察による岩石の風化度の区分

風化度	特 徴
新 鮮	岩石の表面および内部がほとんど風化していないもの。ただし、表面が少し変色している程度のもは含める。顕微鏡等による観察では、ある種の鉱物は風化している場合がある。
弱風化	岩石の表面や節理、層理面などの各種の面・線構造に沿って、厚さ数mm程度かそれ以上の風化層を生じているもの。ハンマーなどで割ると、岩石の中央部に近づくと新鮮になっている。
中風化	岩石の風化が、表面から中心にまで達しているが、ハンマーなどを使わないと割れないもの。
強風化	岩石の風化が、表面から中心にまで達しており、そのため風化が激しいので、ナイフ等で容易に削れたり、手で握りつぶせるほどにやわらかくなっているもの。

観察結果を表2・3に示す。石垣の築石に用いられていた石材は花崗岩、石英斑岩、チャートの三種類である。各石材の特徴からみた産地としては、花崗岩は大文字山周辺から比良山周辺、石英斑岩は滋賀県三井寺西方から山科盆地北東端、山科東方の音羽川山中にのびる岩脈、チャートは高野川下流または高野川東側の支流の谷川を挙げる事ができる。また、これら石材の円磨度は0.3～0.5程度であり、加工痕を有する石材はNo.29の矢穴痕が遺る1点である。この矢穴痕については、石切り場における切り出し、もしくは石垣構築時の調整分割の可能性が考えられるが、ここでの結論は控える。いずれにせよ、上記1点を除いた石材の観察面において、人為的な加工痕が認められないことから、岩体から外れた崖錐や河床礫などの自然石の中で、石垣構築に見合う大きさの石材を主として集め、京都新城の石垣に用いられたとみて良いであろう。詰石と裏込め栗石については、上記の岩石名のほか、ホルンフェルス、珪岩、玢（ヒン）岩、花崗岩質アプライト、花崗閃緑岩、砂岩がみられ、寸法は大人の握りこぶし大のものが多い。これらは鴨川の河床礫の特徴を示し

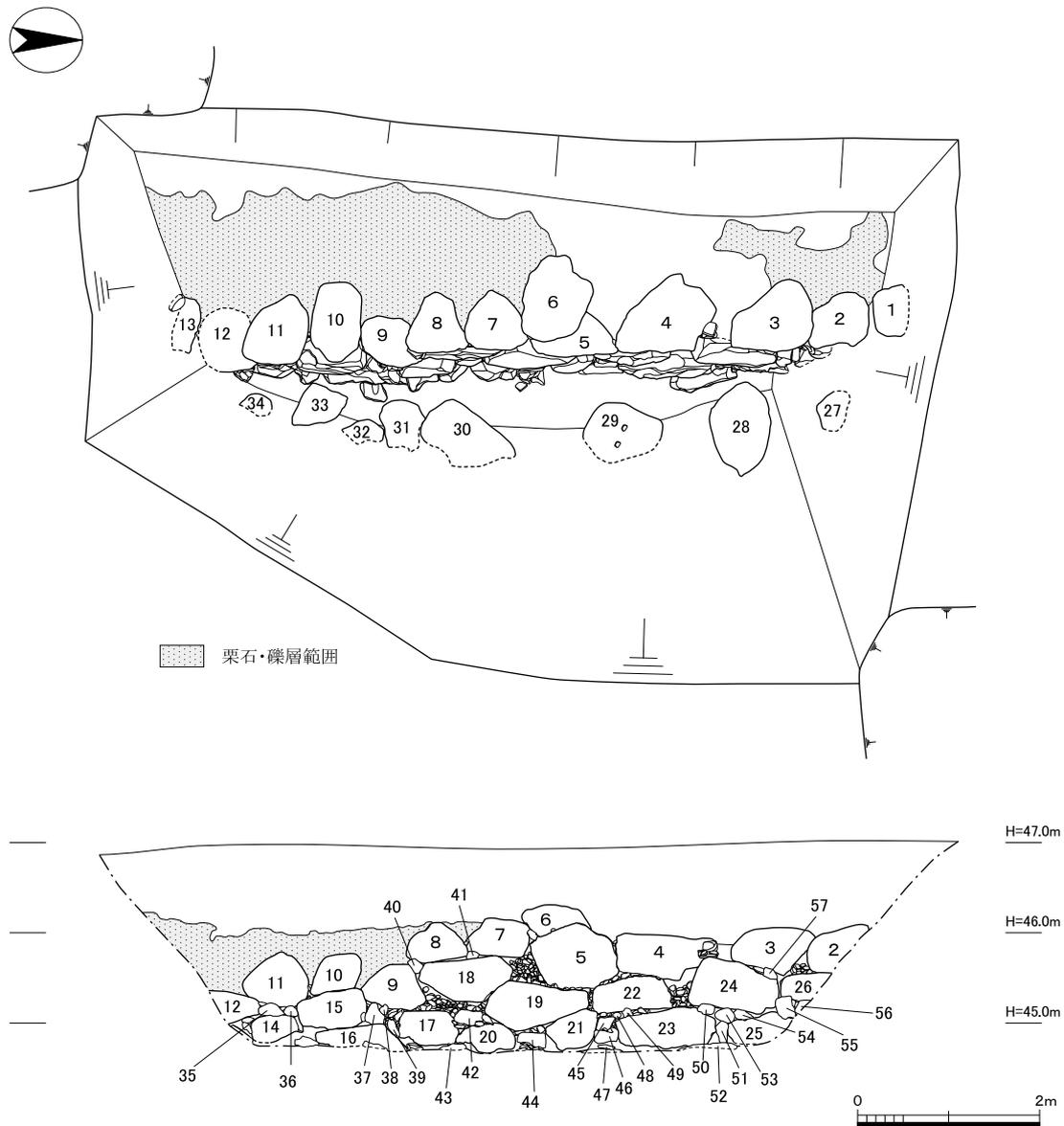


図3 京都新城の石垣実測図（付したNo.は表2に対応）

ており、本地域の地山の礫層か当時の河床から採取したものと考えられる。

また、関連する石垣例である、京都府埋蔵文化財調査研究センターが報告している聚楽第の石垣(SW105)<sup>3)</sup>では、石材の産地として滋賀県観音寺周辺や田上山周辺、比叡山山麓周辺が候補地に挙げられており、京都新城の石垣312と石材産地に違いがみられた。そのため、聚楽第石垣(SW105)で石材調査を行った田結庄良昭(神戸大学名誉教授)氏に石垣312で用いられた花崗岩の肉眼写真から鉱物組成の観察を依頼し、聚楽第石垣(SW105)で用いられていた花崗岩とは、鉱物組成が異なる所見を頂戴した<sup>4)</sup>。これは、聚楽第石垣(SW105)と京都新城の石垣312における花崗岩供給地に違いがあることを改めて示すものといえる。

以上の様に、京都新城の石垣に用いられた石材について、観察から得られた結果を述べたが、今回の調査で初めて確認された京都新城の石垣は当然のこと、聚楽第の石垣についても、石垣全体のうちの一部分を調査した成果であり、あくまでも現時点における調査報告である。したがって、今後の更なる調査によって得られる成果と共に、引き続き検討していくこととしたい。

#### 註

- 1) Krumbain,W.C. Measurement and geological significance of shape and roundness of sedimentary particles, *Journal of Sedimentary petrology*, Vol.11 No.2 1941
- 2) 橋本清一「今里車塚古墳の葺石の石材」『京都府埋蔵文化財発掘調査概報 第2分冊』京都府教育委員会 1980
- 3) 岩松 保・岸岡貴英・古川 匠・小山雅人・伊野近富「1.平安宮跡・聚楽第跡発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集 第156冊』京都府埋蔵文化財調査研究センター 2013
- 4) 田結庄良昭氏には、崩落石花崗岩の新鮮な破面を撮影した肉眼写真から観察して頂き、花崗岩の鉱物組成のほか、多くの御教示を賜った。ここに記して感謝を申し上げます。賜った所見の概要は以下の通り。

粗粒の花崗岩で、石英粒は自形で丸く大きい。有色鉱物は黒雲母のみで自形で点在し、モード量は高くない。斜長石はやや白色を呈する長方形で自形から半自形である。カリ長石はやや薄い黄色がかった色調を呈しており、形状は半自形、一部ではやや他形でモード量は高い。以上の特徴は、比良山系の黒雲母花崗岩由来のものと思われる。

※観察に用いた花崗岩は公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所において保管している。

#### 参考文献

- 橋本清一「今里車塚古墳の葺石と乙訓地域の古墳の葺石」『京都府埋蔵文化財発掘調査概報 第2分冊』京都府教育委員会 1980
- 橋本清一「古墳葺石の材質研究」『考古学と自然科学 第28号』日本文化財科学会 1993

表2 石垣材観察結果一覧 (Noは図3に付した数字に対応)

種類	No.	岩石名	径(cm)			円磨度	風化度	備考
			長径	中径	短径			
築石 (根石含む)	1	石英斑岩	75	60	35	0.5	弱風化	
	2	花崗岩	70	55	50	0.4~0.5	新鮮	
	3	花崗岩	105	75	50	0.4~0.5	弱風化	
	4	石英斑岩	110	90	50	0.4	弱風化	石英1~3cm
	5	石英斑岩	100	60	50+	0.4		
	6	石英斑岩	95	75	35	0.4~0.5	弱風化	0.5~0.1cm岩片含む
	7	石英斑岩	70	70	45	0.4	弱風化	石英・岩片1~2cm含む
	8	石英斑岩	65	60	45	0.3~0.4	弱風化	
	9	石英斑岩	70	50	50	0.3~0.4	新鮮	アプライトの脈幅2~3cmが2本
	10	石英斑岩	90	45	43	0.4~0.5	弱風化	ゼノリス15~18cm含む、緑灰色目立つ
	11	花崗岩	85	70	60	0.4	新鮮	等粒状、斜長石・カリ長石・石英・黒雲母からなる
	12	花崗岩	80+	65+	30	0.4	新鮮	等粒状、斜長石・カリ長石・石英・黒雲母からなる
	13	チャート	60	10+	35	0.4?	新鮮	やや熱変成を受ける
	14	花崗岩	?	55	40	0.5	新鮮	
	15	花崗岩	70	35+	45	0.4	新鮮	
	16	花崗岩	105	10+	40	0.3~0.4	新鮮	
	17	花崗岩	75	50+	40	0.3~0.4	新鮮	
	18	チャート	105	45	35	0.4	新鮮	白黒の層状
	19	石英斑岩	110	50+	50	0.4	弱風化	石英・岩片0.5cm
	20	花崗岩	60	55	40	0.4	新鮮	
	21	花崗岩	55	45+	40	0.4	新鮮~弱風化	
	22	チャート	80	70	40	0.2~0.3	新鮮	白黒、三疊紀
	23	チャート	110	55+	50	0.3	新鮮	灰色、中生代・ジュラ紀
	24	花崗岩	90	55	55	0.4	弱風化	
	25	チャート	70+	25+	25	0.3	新鮮	白黒の層状
	26	花崗岩	70+	50+	50	0.4	弱風化	
	27	花崗岩	50	50	40	0.4	弱風化	
	28	花崗岩	105	65	25	0.5	新鮮	
	29	花崗岩	85	75	50	0.4	新鮮	矢穴痕3カ所
	30	花崗岩	105	60	25	0.4	新鮮	
	31	花崗岩	65+	40	30	0.4	新鮮~弱風化	
	32	石英斑岩	20+	35+	25	0.3~0.4	弱風化	
	33	花崗岩	70	40	25	0.4~0.5	新鮮	
	34	花崗岩	35+	35+	35	0.5	弱風化	
詰石	35	石英斑岩	—	—	—	—	—	
	36	花崗岩	—	—	—	—	—	
	37	花崗岩	—	—	—	—	—	
	38	チャート	—	—	—	—	—	
	39	花崗岩	—	—	—	—	—	
	40	石英斑岩	—	—	—	—	—	
	41	砂岩	—	—	—	—	—	
	42	花崗岩	—	—	—	—	—	
	43	花崗岩	—	—	—	—	—	
	44	花崗岩	—	—	—	—	—	
	45	珪岩	—	—	—	—	—	
	46	珪岩	—	—	—	—	—	
	47	ホルンフェルス	—	—	—	—	—	
	48	砂岩	—	—	—	—	—	
	49	チャート	—	—	—	—	—	
	50	チャート	—	—	—	—	—	
	51	花崗岩	—	—	—	—	—	
	52	花崗岩	—	—	—	—	—	
	53	花崗岩	—	—	—	—	—	
	54	チャート	—	—	—	—	—	
	55	花崗岩	—	—	—	—	—	
	56	花崗岩	—	—	—	—	—	
	57	チャート	—	—	—	—	—	

表3 裏込め栗石観察結果一覧（図示なし）

種類	No.	岩石名	径(cm)			円磨度	風化度	備考
			長径	中径	短径			
裏込め栗石	1	砂岩	8	6	4	0.4~0.5	新鮮	
	2	砂岩	12	8	5	0.5~0.6	新鮮	
	3	砂岩	19	10	7	0.6	新鮮	
	4	チャート	12	8	4	0.3~0.4	新鮮	白黒
	5	ホルンフェルス	10	8	4	0.6	新鮮	黒色泥質、やや熱変成を受ける
	6	チャート	11	8	6	0.4~0.5	新鮮	
	7	チャート	8	6	2	0.4	新鮮	白黒
	8	玢(ヒン)岩	7	6	3	0.6	新鮮	
	9	チャート	6	5	3	0.4	新鮮	赤色
	10	花崗岩	4	4	2	0.6	新鮮	
	11	花崗岩	11	7	6	—	弱風化	
	12	チャート	8	6	3	0.4~0.5	新鮮	黄白色
	13	花崗岩	7	7	4	0.6	新鮮	
	14	花崗岩	8	5	5	0.4~0.5	新鮮	
	15	砂岩	7	5	3	0.4~0.5	新鮮~弱風化	
	16	砂岩	10	8	6	0.5~0.6	新鮮	
	17	砂岩	8	6	4	0.5~0.6	新鮮	
	18	砂岩	12	9	4	0.6	新鮮	
	19	ホルンフェルス	8	8	3	0.6~0.7	新鮮	黒色泥質、やや熱変成を受ける
	20	チャート	15	8	6	0.4~0.5	新鮮	
	21	チャート	7	6	3	0.6	新鮮	赤白
	22	チャート	8	5	3	0.4	新鮮	赤白
	23	ホルンフェルス	8	5	3	0.6	新鮮	黒色泥質、やや熱変成を受ける
	24	花崗岩質アプライト	9	6	3	0.6~0.7	弱風化	
	25	砂岩	9	6	3	0.6	新鮮~弱風化	
	26	砂岩	14	8	4	0.5	新鮮~弱風化	
	27	チャート	11	10	3	0.4~0.5	新鮮	灰色
	28	チャート	10	4	4	0.5	新鮮	
	29	チャート	7	5	3	0.4~0.5	新鮮	やや珪質
	30	砂岩	11	7	5	0.4~0.5	弱風化	
	31	花崗閃緑岩	8	8	5	0.6	新鮮	
	32	花崗岩	15	8	7	0.6	新鮮	
	33	砂岩	8	7	5	0.6~0.7	弱風化	
	34	チャート	13	7	5	0.4	新鮮	白黒
	35	チャート	12	7	5	0.4~0.5	新鮮	灰色
	36	砂岩	12	8	5	0.4~0.5	新鮮	
	37	ホルンフェルス	11	5	4	0.4~0.5	新鮮	黒色泥質、熱変成弱
	38	チャート	7	6	3	0.4~0.5	新鮮	灰白色
	39	チャート	9	6	4	0.4~0.5	新鮮	黒灰
	40	花崗岩	9	7	4	0.4	新鮮	細粒

## 付章2 高精度表面波探査による堀跡の調査

釜井俊孝（京都大学防災研究所）

土井一生（京都大学防災研究所）

古川 匠（京都府教育委員会）

### (1) 探査の目的

今回の発掘によって、京都新城のものと思われる南北方向の大規模な堀跡が発見された。そこで、高精度表面波探査の測線をこの堀跡を横切るように設定し、堀跡に対応する地盤構造を検出し、堀の延長、及び規模を推定するためのデータを収集する。

### (2) 方法

高精度表面波探査は、多数のgeophone（4.5Hz）を測線上に配置し、同時にレーリー波を観測することで地下構造（S波速度構造）を推定する手法である。今回の探査測線は、東西に約60mとし、zr測線・zs測線・及びzt測線と呼ぶ、3本の測線を設定した。zr測線とzs測線の起点（東端）は、大規模な堀跡が見つかったトレンチの南東端から、南にそれぞれ、15mと50mの地点である。

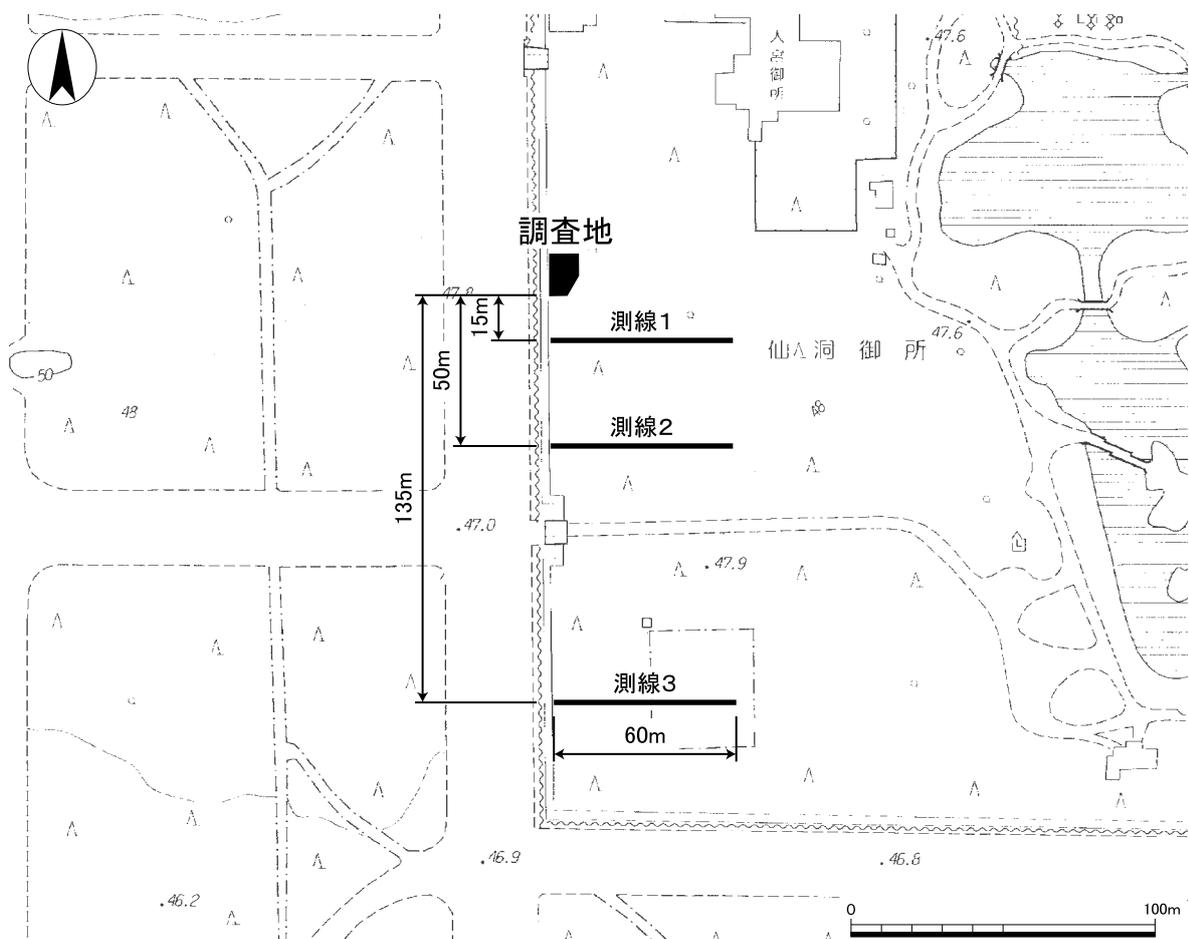


図1 表面波探査実施位置図（1：2,500）

移動式固定展開におけるコネクタ・ケーブル・センサー・ショットの関係

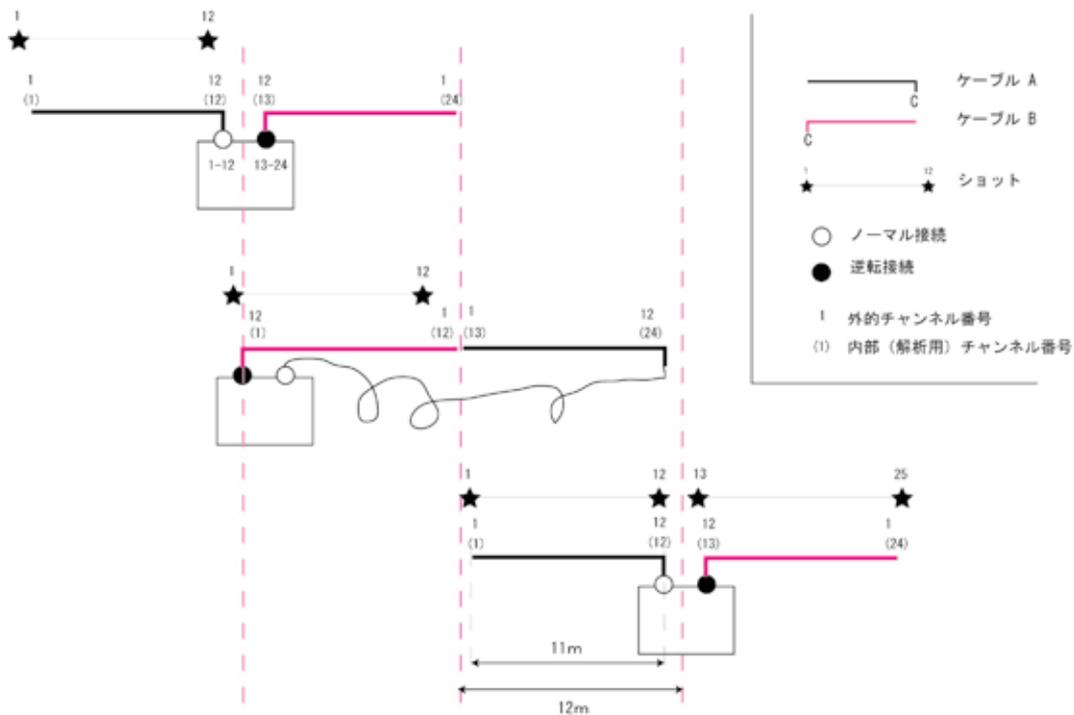


図2 センサーの移動式固定展開

zt測線の起点（東端）は、それらよりも更に南で、仙洞御所の南東角から、壁の内側を北に34.5 m隔てた地点である。いずれの起点も、御所の南北の壁の内側から2 mほど内側とした。zr測線とzs測線は、主に植栽の中、zt測線は、テニスコートの中を通過している。

探査では、1 m間隔で24個のgeophoneを配置した。展開は、移動式固定展開法によって、通常の固定展開よりも長い測線で探査を行った。いずれも、東端を起点（0 m点）とした。図2に移動式固定展開におけるセンサー、及びケーブルの配置とショット（起震）の関係を示す。

### (3) 結果

図3は、各測線に2 m間隔で設定した解析地点（Common Mid Point地点）におけるレーリー波の分散曲線（位相速度と周波数の関係）である。読み取りは周波数で規制し、60Hzまでとした。全般に、深い場所では速度が速く（地盤が固く）、浅い所では遅いという、通常良く見られる関係が得られた。一方、これら個々の曲線の形それぞれは、この関係を求めた場所（CMP地点）における1次元（深さ方向）の速度構造を表している。

そこで、それらの一次元構造をスムージングしながら繋げて、2次元の速度構造とした。図4にその結果を示す。ただし、ここでは、レーリー波速度を0.9で割ってS波速度の推定値とし、その等値線を示した。通常、レーリー波速度はS波速度の0.9～0.95倍であることが知られているからである。図4での色の表現は、S波速度が150～400m/sの範囲を10m/sピッチで区分した。

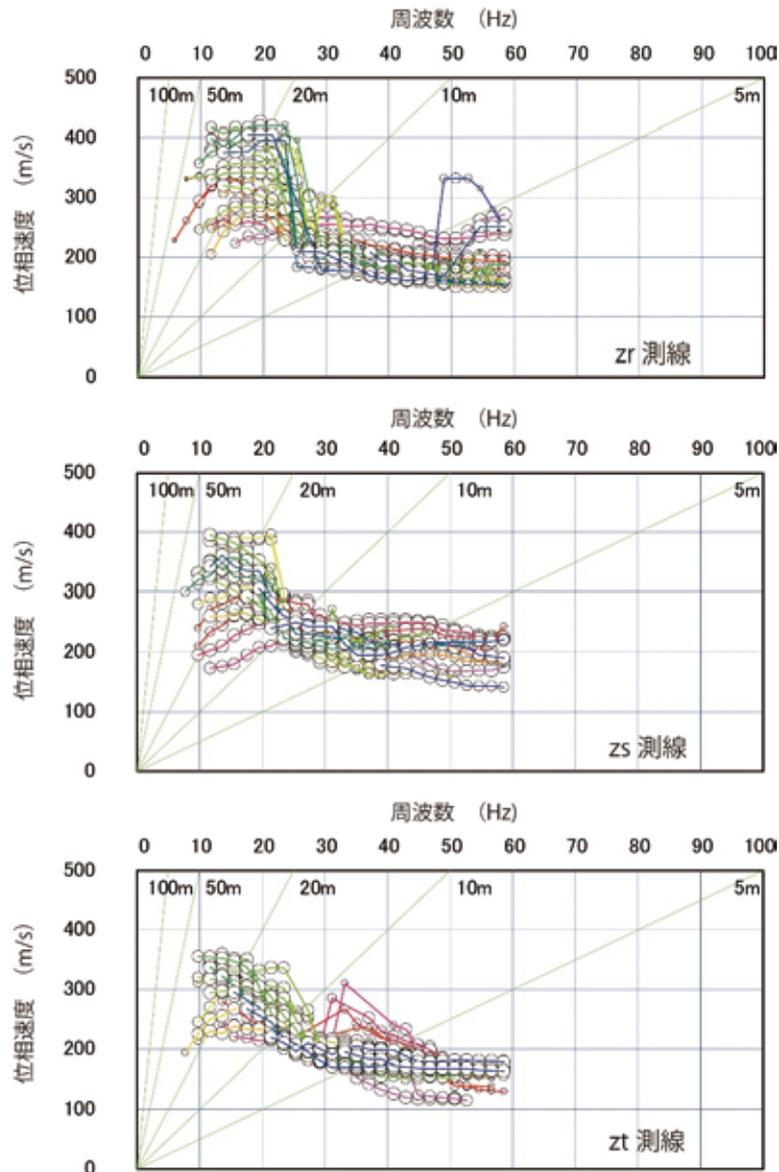


図3 分散曲線

図4の各測線とも、最も明瞭な速度の不連続が、深さ2～3mに認められ、これ以浅は柔らかい（S波速度が遅い）地盤からなっている。この浅い速度不連続面を第1速度不連続面と呼ぶことにする。

一方、第1速度不連続面以深の速度構造は、測線の水平方向（東西）によって異なっているが、主に以下の様な特徴が認められる。

1) zr測線の西部（始点側）には、第1速度不連続面よりも深い部分で、急に速度が増加する部分（第2速度不連続面）が、認められる。zr測線におけるこの不連続面は、深度7m付近にあって、始点から約20m西方にほぼ水平に連続する。東端は、ほぼ垂直に上昇して、深度2～3mで第1速度不連続面（仙洞御所造営時の地形面）に収斂する。

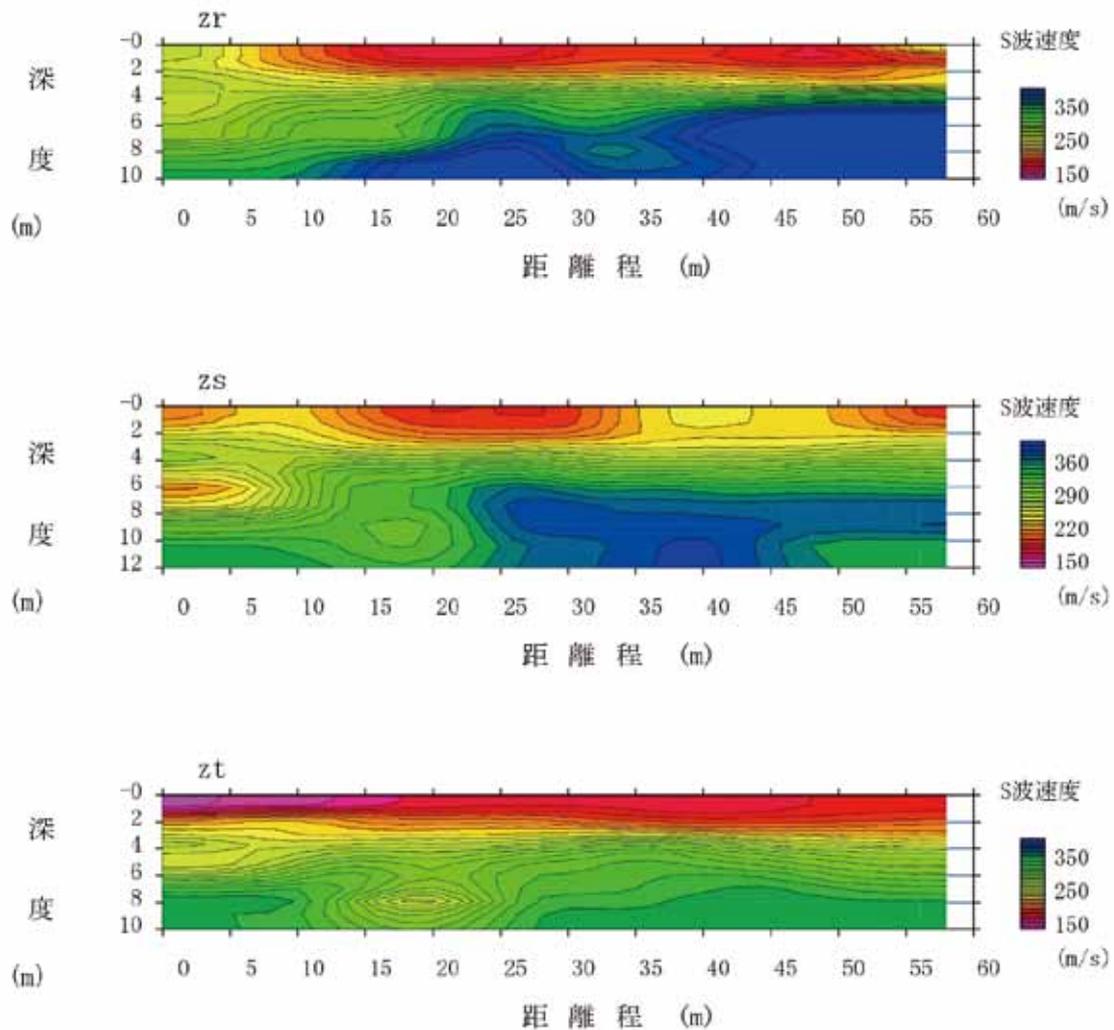


図4 S波速度の2次元分布（速度構造）

2) zr測線と同様の第2速度不連続面は、zs測線においても深度約7mに認められ、ほぼ水平に始点から東へ約12m追跡可能である。東端は、zr測線と同様、ほぼ垂直に上昇して第1速度不連続面に収斂する。

3) zt測線の第2速度不連続面は、深度5.5m付近に見られる。約10m東方へ連続するが、他の2測線と異なり、東端は緩やかに上昇して、第1速度不連続面に収斂する。

4) 上記の第1と第2速度不連続面に囲まれた部分では、速度の逆転や塊状の部分（等値線間隔が幅広い部分）など、異常な速度構造が認められる。不均質な地盤で構成されていると考えられる。

5) 第2速度不連続面よりも下の地盤（図4で青～暗緑色で示した部分）は、地山であると考えられる。しかし、zrでは始点から約32m、zsでは約17m、ztでは約18m付近を中心に幅5m程度の低速部が認められる。

#### (4) 結果の解釈

発掘成果と照らし合わせると、第1速度不連続面は、近世初頭の仙洞御所造営時の地表面（地業）か京都新城の遺構面に対応すると考えられる。

また、第1と第2速度不連続面に囲まれた、地山に比べて低速度な部分は、京都新城の堀跡の南方延長に相当すると考えられる。すなわち、第2速度不連続面は、始点からしばらく水平に連続し、そののち急角度で浅部に収斂するという特徴的な形状をしている。このことから、第2速度不連続面は、堀底に相当すると考えるに足る蓋然性がある。

しかし、発掘成果では、石垣の最深部は現地表から約4 mで、第2速度不連続面の深度5.5～7 mとは開きがある。その理由については、現時点では不明である。この点を明らかにするためには、堀の石垣が二段築造である可能性、及び「堀跡」内部に見られる速度逆転部の意味などについて、今後検討を加える必要がある。

一方、各測線において、堀の西側の壁が検出されなかったのは、探査の精度が測線の端部で相対的に悪いことと、解析（地盤構造の推定）の間隔が、2 mとやや粗いためであると考えられる。

また、上記5)で述べた地山中の低速度部は、ほぼ同じ規模、同じ位置に出現しており、南北に連続する構造を輪切りに見ている可能性がある。天然の水路跡、あるいは未知の人工構造物の可能性も含めて検討するべきであると考えられる。

## 付章3 京都新城跡出土金箔瓦の分析調査

北野信彦（龍谷大学）

### （1）はじめに

京都御苑内の京都仙洞御所において、豊臣秀吉が最晩年に造営したとされる京都新城の石垣および堀跡が検出され、金箔瓦が8点出土した。今回、この金箔瓦に関する分析調査を実施する機会を得たので、本報ではこの結果を報告する。

### （2）調査対象試料

本調査では、出土金箔瓦片8資料であり、軒丸瓦片・軒平瓦片・飾り瓦片などであるが、軒丸瓦4資料中の3資料は五七桐文、1資料は菊文といった豊臣家ゆかりの家紋瓦であった。調査は京都市埋蔵文化財研究所の下鳥羽収蔵庫において、①全体の状態観察、②基本の写真撮影、③漆箔箇所拡大観察、④可搬型蛍光X線分析装置を用いた材質分析、などをまず行った。次に詳細な漆箔に関する分析調査を実施する目的で、1mm角程度の漆箔料剥落小片を4資料から1サンプルずつ京都市埋蔵文化財研究所の関 晃史氏と協議のうえ北野が注意深く採取して分析試料とした。

### （3）調査方法

#### 3.1 漆箔の拡大観察

調査対象である各金箔瓦における漆箔の表面状態は、まず（株）スカラ製のDG-3型デジタル顕微鏡を用いて50倍の倍率で拡大観察した。引き続き、注意深く採取した漆箔小破片試料は、（株）ハイロックス社製のVH-7000S型デジタルマイクロスコープにより1,000倍から2,500倍の高倍率で細部の観察を実施し、それぞれ画像記録として保存した。

#### 3.2 金箔および接着漆の構成無機元素の定性分析

調査対象試料である各漆箔の金箔の定性分析は、まず（株）リガクのNiton XL3t-700携帯型のエネルギー分散型蛍光X線分析装置を調査対象箇所に注意深く近接させて大気中で分析した。設定条件は、測定視野は直径8.0mmスポット、管球は対陰極Agターゲット、管電圧は15kV～40kVの切替操作、大気圧で分析設定時間は60秒である。引き続き採取した漆箔小破片試料の構成無機元素に関する詳細な定性分析は、分析用カーボンテープに固定した顔料を（株）堀場製作所MESA-500型の蛍光X線分析装置を使用した。設定条件は、分析時間は600秒、試料室内は真空、X線管電圧は15kVおよび50kV、電流は240 $\mu$ Aおよび20 $\mu$ A、検出強度は200.0～250.0cpsである。なお採取した微量の金箔試料については、金（Au）：銀（Ag）：銅（Cu）の合金比率が箔の品質を理解する上で重要なポイントとなるため、（株）日立ハイテクノロジーズ社製SU3500型走査型電子顕微鏡に（株）堀場製作所製EMAX X-MaxN型EPMA分析装置（設定条件：加速電圧・30.0、照射時間・任意）を連動させて金箔試料の比較標準試料による補正を行いつつ定量値を算定した。

#### (4) 調査結果

各種の分析調査を行った結果、次のような基礎的データの蓄積を得た。

① 本調査で対象とした出土金箔瓦片の軒丸瓦4資料のうち3資料は五七桐文、1資料は菊文といった豊臣家ゆかりの家紋瓦であった。特に資料4(瓦11)の五七桐文の中央花卉はやや楕円形であり、この点は伏見城下町の西端に近い地域で出土した五七桐文金箔瓦の花卉と比較的類似した図様であった(図9)。この金箔瓦片が出土した伏見城下町関連遺跡は伏見城下西端の土取り穴も存在するある程度の空間地を伴う地区であった。2004年度の発掘調査では、武家屋敷跡や町屋などの建造物関連遺構は検出されず、この土取り穴跡に伏見城および城下大名屋敷群からの資料群が廃棄されていた。いずれにしても京都新城と伏見城では類似した図様の金箔瓦が使用されていたようである。また資料1(瓦9)、資料7(瓦10)の五七桐文の花卉は、都久夫須麻神社本殿内陣蔭絵など、豊臣家ゆかりの資料群では比較的多くみられる比較的丸形の花卉図様と類似していた(図10)。

② 本遺跡出土金箔瓦の金箔箇所それぞれ数箇所ずつ可搬型蛍光X線分析装置を用いた非破壊分析を行った。その結果、いずれも比較的顕著な金(Au)を検出した。その一方で銀(Ag)や銅(Cu)はほとんど検出されなかった(表1)。さらに採取した金箔の小破片試料においても、いずれの試料からも顕著な金(Au)のピークは検出されるものの銀(Ag)や銅(Cu)のピークは検出されなかつ

表1 京都新城金箔瓦分析結果

No.	S	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Cu	Zn	As	Ag	Sn	Pb	Au	Hg	備考
1①	5524	15.9K	2562	4434	334	11.6K	27	78		12	23	12	1478	156	瓦9:第4面掘下中 (五七桐文:軒丸瓦)
1②	6428	15.6K	2450	4134	325	11.2K	41	89		12	24	11	1614	185	
1③	5933	14.0K	2046	3743	293	11.1K	31	90		17	28	12	1609	164	
2①	1481	7298	2951	2235	340	17.0K	37	84	10	12			335	57	瓦14:第5面 (唐草文:軒平瓦)
2②	2406	13.2K	4941	4186	511	21.2K	52	92	12		31		454	78	
3①	524	7394	1288	2347	210	18.9K	32	59	15	21	37	40	40		瓦16:堀313 (飾り瓦)
3②	435	12.9K	1338	3923	553	15.6K	26	65		11	27	34	64	6	
4①	4904	12.0K	7146	3833	1101	25.0K	104	141	12	28	21	15	2868	185	瓦11:第5面 (五七桐文:軒丸瓦)
4②	4935	10.4K	5564	3286	874	23.9K	90	117	10	20	28	11	1755	130	
4③	4031	13.0K	3874	4196	869	25.4K	60	129	12	27	32	11	1634	114	
4④	5354	11.4K	6630	3635	971	24.2K	95	127	18	25	18	10	2552	188	
5①	3999	15.8K	3297	5056	882	29.4K	60	117	20	17	22	20	993	73	瓦12:第4面掘下中 (菊文:軒丸瓦)
5②	2796	11.3K	2901	3618	733	26.4K	56	103	20	20	28	19	911	64	
5③	4040	17.9K	3432	5431	750	29.7K	63	112	23	24	26	21	1003	70	
6①	1337	22.7K	2098	4877	317	12.2K	36	89		22		17	266	21	瓦15:堀313 (飾り瓦)
6②	879	22.5K	1856	4977	259	11.9K	32	76		13	22	14	172	14	
6③	2949	18.3K	2103	3902	257	11.7K	27	97		18	29	15	981	74	
7①	4848	12.7K	2455	3926	352	11.0K	33	82		12	21	27	1036	84	瓦10:堀313 (五七桐文:軒丸瓦)
7②	4721	13.5K	2591		336	11.3K	34	79		19	21	21	1990	71	
7③	2830	8686	1700	2636	363	9738	38	68		25	29	20	1787	57	
8①	544	11.8K	1390	2420	282	10.4K	38	62		14	23	54	115	11	瓦13:第4面掘下中 (桔梗花文:軒平瓦)
8②	524	14.1K	1572	2666	288	11.5K	37	66		13	17	50	170	17	

た(図4-4・5-4・6-4・7-4)。このうちの資料4(瓦11)の金:銀:銅分析比率値は金(Au):銀(Ag):銅(Cu) = 95.0:3.6:1.4である。この点から本遺跡出土金箔瓦に使用された金箔の金純度は高いものと理解した。ちなみに伏見城跡出土の金箔瓦の金:銀:銅分析比率値は金(Au):銀(Ag):銅(Cu) = 94.8:3.6:1.6である。

③ 本遺跡出土各金箔瓦の漆箔の表面状態を50倍の拡大観察した結果、いずれも瓦胎部の上にならず接着材料である生漆塗料を塗布し、その上に1枚掛けで金箔が貼られている状況が確認された(図4-2・5-2・6-2・7-2)。さらにこの漆箔箇所を採取試料の詳細な高倍率観察した結果、黒色もしくは暗赤褐色系漆を下塗り漆としていた(図1-2・2-2・3-2・4-3・5-3・6-3・7-3・8-2)。



図1-1 資料1(瓦9)

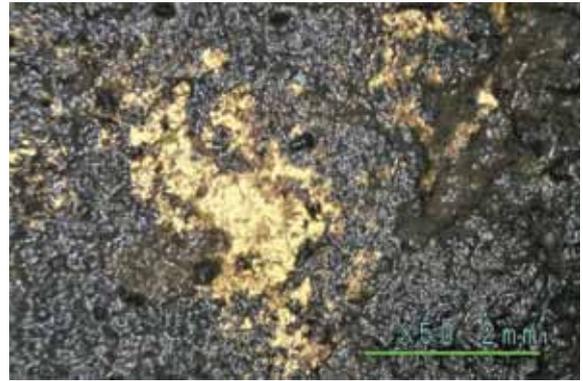


図1-2 同 漆箔の拡大観察



図2-1 資料2(瓦14)

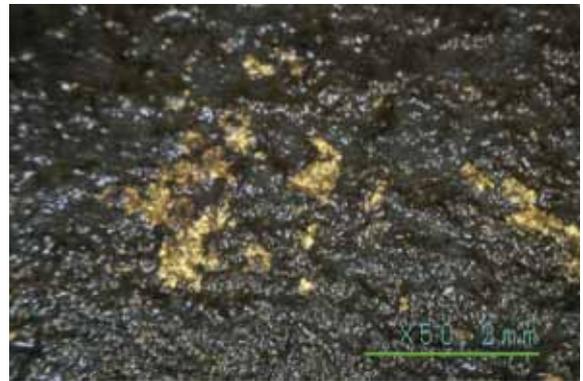


図2-2 同 漆箔の拡大観察



図3-1 資料3(瓦16)

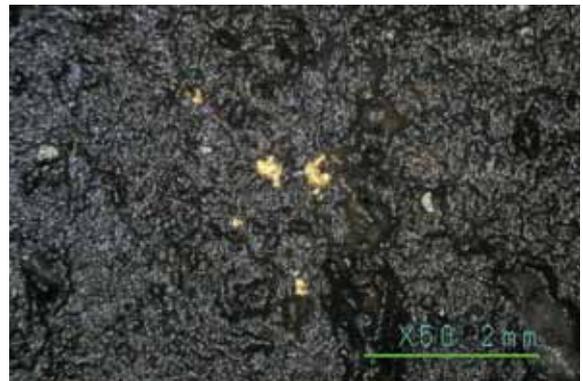


図3-2 同 漆箔の拡大観察



図4-1 資料4 (瓦11)



図4-2 同 漆箔の拡大観察

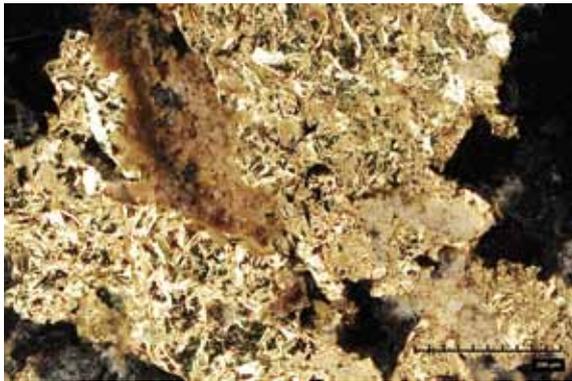


図4-3 同 漆箔の拡大観察

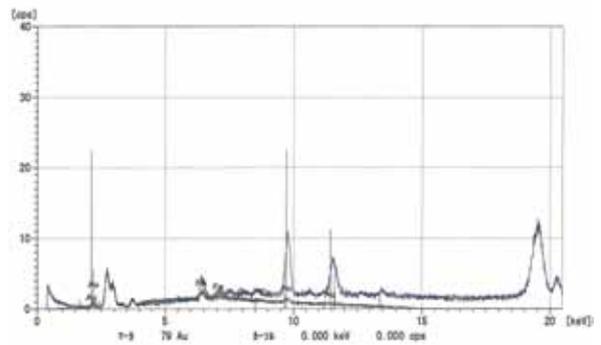


図4-4 同 金箔の蛍光X線分析結果



図5-1 資料5 (瓦12)



図5-2 同 漆箔の拡大観察

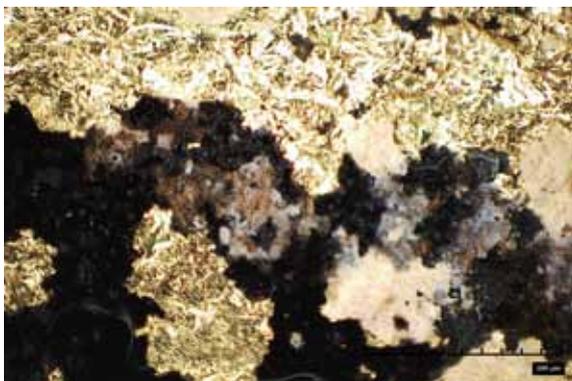


図5-3 同 漆箔の拡大観察

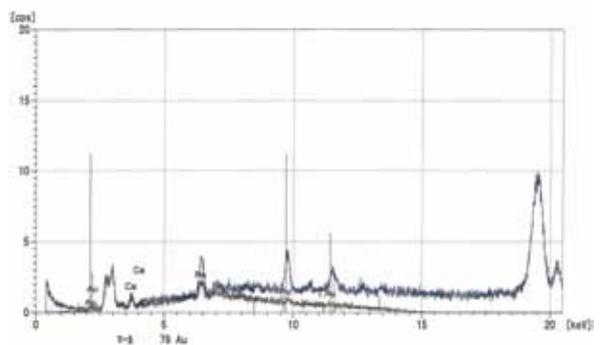


図5-4 同 金箔の蛍光X線分析結果



図6-1 資料6 (瓦15)



図6-2 同 漆箔の拡大観察

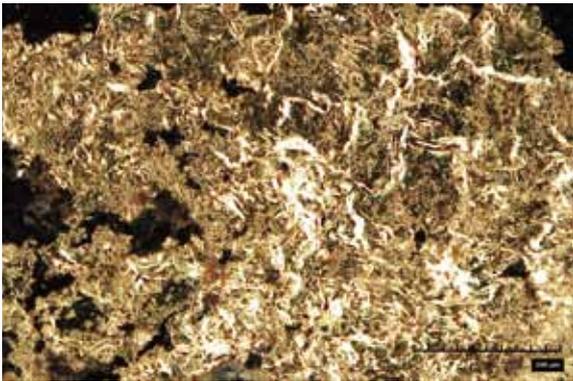


図6-3 同 漆箔の拡大観察

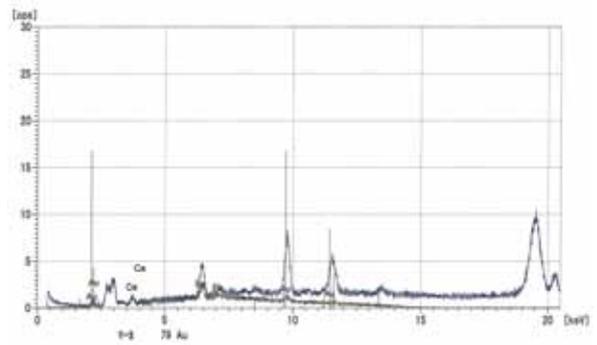


図6-4 同 金箔の蛍光X線分析結果



図7-1 資料7 (瓦10)



図7-2 同 漆箔の拡大観察



図7-3 同 漆箔の拡大観察

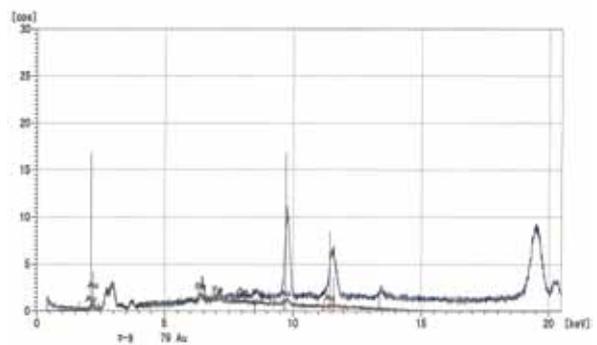


図7-4 同 金箔の蛍光X線分析結果



図8-1 資料8 (瓦13)

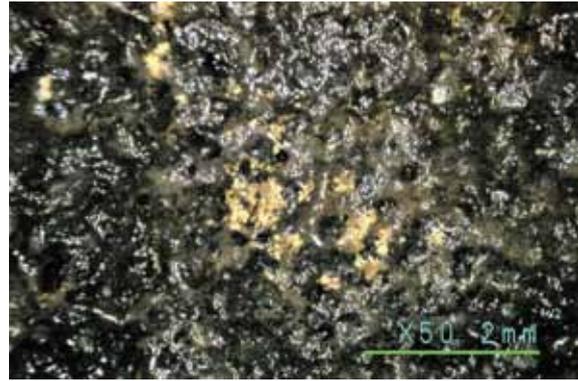


図8-2 同 漆箔の拡大観察



図9 伏見城跡出土金箔瓦の五七桐文図様



図10 都久夫須麻神社本殿内陣の五七桐文蒔絵図様  
(写真提供：都久夫須麻神社)

#### 参考文献

平尾政幸『伏見城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004 - 18 財団法人京都市埋蔵文化財研究所  
2005年

北野信彦『桃山文化期漆工の研究』雄山閣 2018年 pp.352

龍谷大学 文学部 文化財科学室「附章 指月伏見城堀跡出土金箔瓦の分析調査」『京都市内遺跡発掘調査報告 令和元年度』京都市文化市民局 2020年 p.194-200

## 付章4 京都新城の復元に関する基礎作業 －石垣312・堀313の位置比定を中心に－

南 孝雄（京都市埋蔵文化財研究所）

### （1）京都新城の造営過程と位置

今回の調査で検出した石垣312と堀313は、検出層位・出土遺物・石垣の特徴などから京都新城の遺構と考えられる。その埋没時期は、土層の堆積状況から、寛永年間の仙洞御所造営時期とみられる。史料から、京都新城については造営過程や全体の規模に関してはおおよそ知ることができるものの、その具体的な構造を窺うことは容易ではない。ここでは、先行研究に導かれつつ、石垣312・堀313が京都新城の中でどのような位置に存在したのかを検討してみたい。

京都新城の造営過程と位置についてその概略をみておきたい。<sup>1)</sup>

#### 史料1. 『舜旧記』慶長2年（1597）正月24日

去廿二日、下京三条下四条之間二、太閤御屋敷江繩張有果而御屋敷不出来

#### 史料2. 『言経卿記』慶長2年正月24日

太閤京都御屋敷、昨日奉行衆徳善院僧正（前田玄以）・増田右衛門尉（増田長盛）・石田治部少輔（石田三成）等上洛了、三条坊門マテ四町、又西ハ東洞院ヨリ東へ四町也、先在家可立之由有之間

#### 史料3. 『当代記』慶長2年

自此春中、四条に太閤新構有普請けるか、地利狭して又白川出口江有普請、町人壊家を迷惑す

#### 史料4. 『言経卿記』慶長2年4月26日

太閤早朝ニ屋敷被替也云々、北土御門通ヨリ南へ六町、東ハ京極ヨリ西へ三町也云々、クイヲ打繩引也云々、町屋悉相替也云々、

#### 史料5. 『義演准后日記』慶長2年4月26日

内裏ノ東ワカゼカ池ト云所太閤御所御屋敷ニ御沙汰云々、仍三条御屋敷普請最中ト云トモ 被休了、町人迷惑

#### 史料6. 『小槻孝亮宿祢日記』慶長2年4月26日

太閤御屋敷之ハコ瀬カ池ヲ御城之中ニテ、今日御繩張有之

史料1・2から、繩張りが慶長2年正月22日には始まっていたことと、造営場所が当初は三条坊門通から南へ4町、東洞院通から東へ4町の範囲であったことがわかる。しかし史料3では、同年春に土地が狭いことを理由に造営場所を変更している。史料4によるとその場所は、土御門通から南へ6町、京極通から西へ3町のすなわち内裏の南東になる。また、史料5・6から、その敷地内に「ワカゼカ池」または「ハコ瀬カ池」と呼ばれる池を取り込んでいる。この池については『山城名勝志』に「阿古瀬池」の名称で記されており、秀吉の別館の跡地である仙洞御所の中に存在する池として記されている。これに従えば、現在、京都仙洞御所内の阿古瀬淵がそれにあたることになり、京都新城にも園池が設けられていた可能性がある。

図1は、平安京条坊復元ラインを記した京都市都市計画基本図に、史料4から知ることのできる京都新城の位置を落としたものである<sup>2)</sup>。なお、京都新城の敷地は、その造営途中で南西に拡張されたようであるが、具体的な位置や規模が不明なため、ここでは復元の対象とはしない<sup>3)</sup>。また、この復元案では新城の北西隅部は御所と重なっており、本来は考慮すべきであるが、ここでは平安京条坊区画に沿っての城の規模の復元として全体プランを長方形として提示する。また、東京極大路は京都新城の域内に含まれていた可能性もあるが、ここでは含めずに提示する。この復元による京都新城の規模は、東西約370m、南北約790mとなる。

また、図1には寛永度の仙洞御所の規模を示している。寛永度の仙洞御所の規模は東西167間(約329m)、南北142間(約280m)である<sup>4)</sup>。1/2,500都市計画基本図への重ね合わせは、現在の京都大宮仙洞御所の南築地と寺町通を定点とした。なお寛永度の仙洞御所は、現在よりも西側に張り出しかつ北側は短い。現在の規模は、宝永5年(1708)大火後の公家町の再編、宝永度仙洞御所造営に伴う変化である。

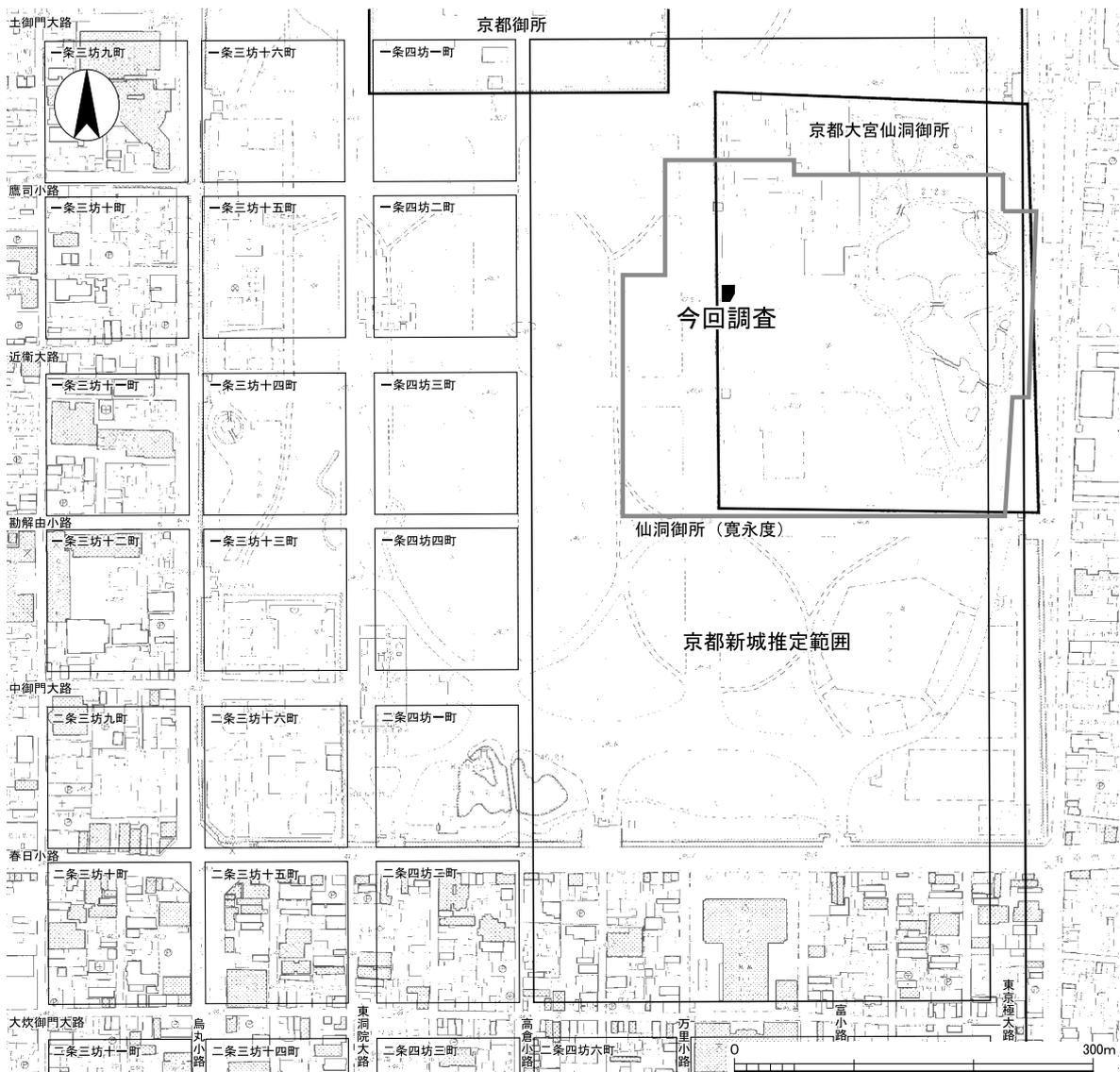


図1 現在の大宮仙洞御所と京都新城の位置 (1 : 6,000)

## (2) 高台院屋敷と仙洞御所

京都新城は、慶長3年(1598)8月の豊臣秀吉の死後、高台院屋敷(北政所・ねね・おね)となる。さらに高台院の死後、その跡地は後水尾上皇の仙洞御所となるが、その経過を史料から確認したうえで、仙洞御所・高台院屋敷・石垣312と堀313の位置比定を行いたい。

史料7.『舜旧記』慶長4年(1599)9月26日

太閤政所大坂ヨリ京之城江移也

史料8.『義演准后日記』慶長4年9月26日

從小坂(大坂)、北政所京都御殿へ移徙

史料9.『言経卿記』慶長4年9月26日

小坂(大坂)ヨリ政所禁中辰巳角故太閤殿中へ、今日御上洛也、政所御上洛見物

京都新城は、慶長2年(1597)9月の秀頼の従四位左近衛少将の初めての初叙任に際して、秀吉・秀頼が初めて移徙し、翌慶長3年の秀頼の中納言昇進に際しての利用時には「秀頼御殿」と呼ばれるなど、秀頼との関係が深いことが窺えるが、慶長4年10月以降は、寛永元年(1624)9月6日の高台院の死去に至るまで、京都新城は高台院の屋敷となる。

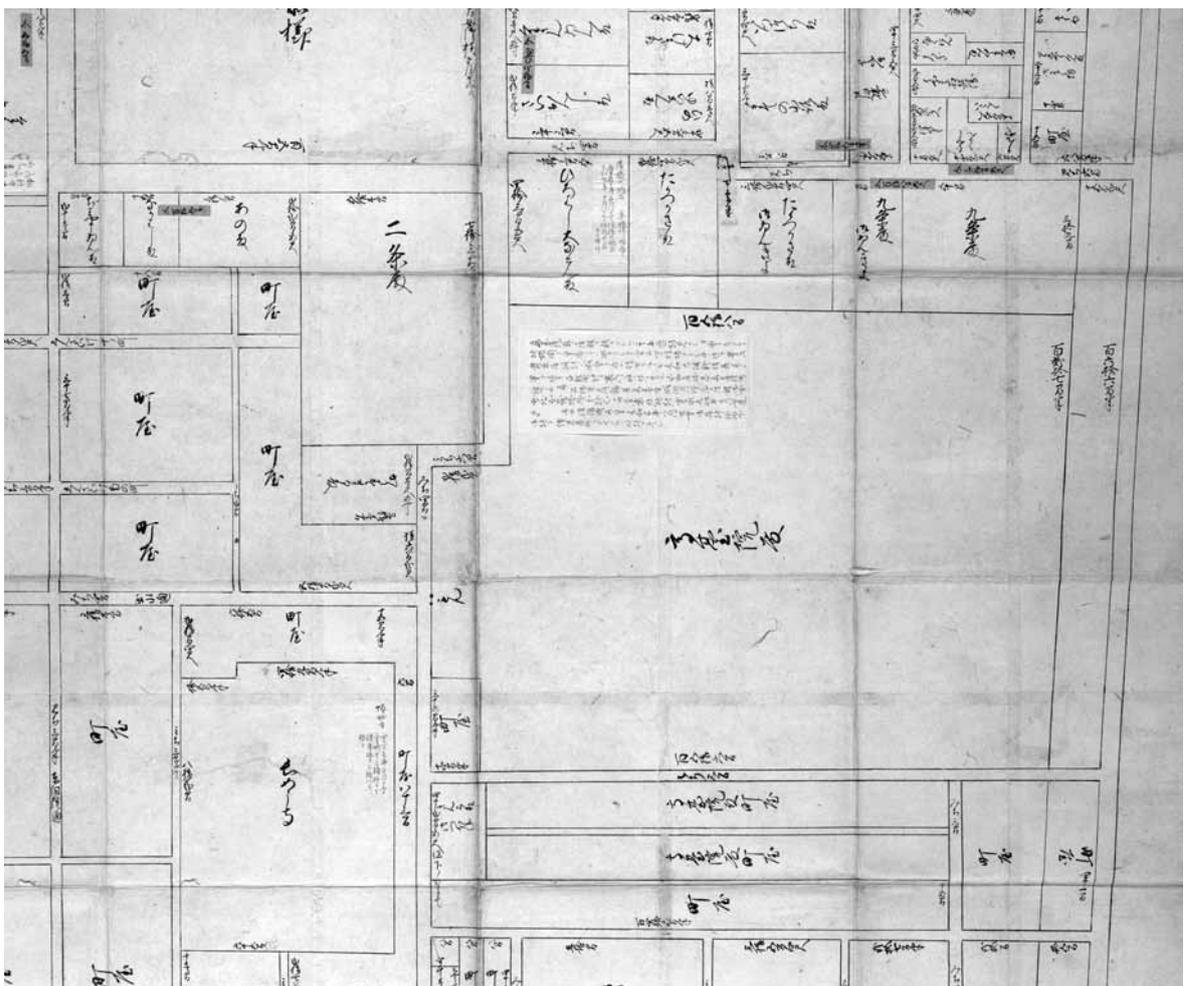
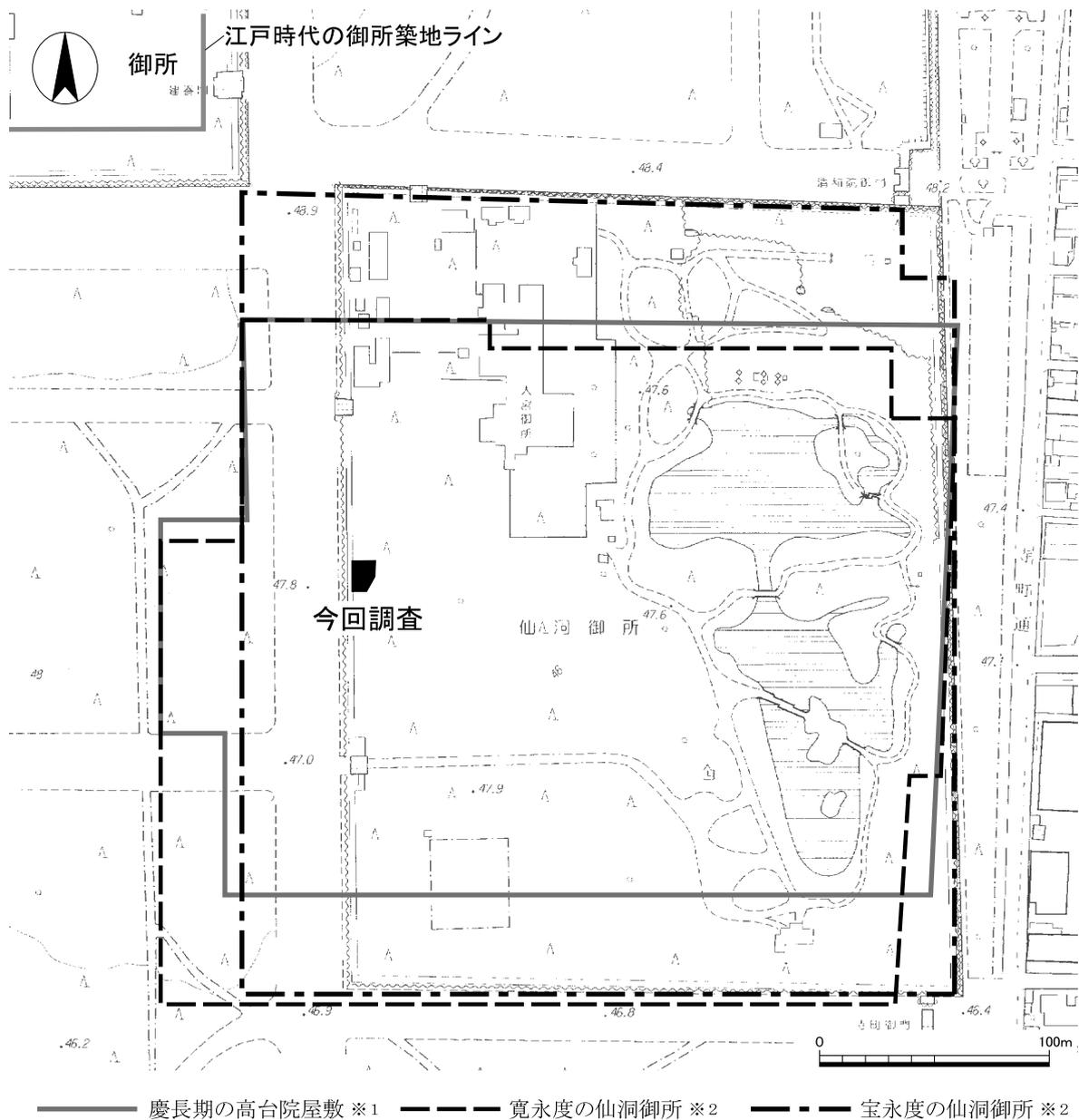


図2 中むかし公家町之絵図(京都府立京都学・歴史館所蔵)



※1 「中むかし公家町之絵図」京都市立京都学・歴史館所蔵 中井家文書385、「慶長年間御築地内之図」『御所沿革史料図譜』芸艸堂 1914年より  
 ※2 「近世における仙洞御所の沿革」平井聖 日本建築学会論文報告集第61号 1959年より

図3 高台院屋敷と寛永・宝永度の仙洞御所の範囲 (1 : 3,000)

高台院屋敷となってからの京都新城は、「慶長年間御築地内之図」<sup>6)</sup>や「中むかし公家町之絵図」<sup>7)</sup>(図2)から、その規模を縮小し秀吉造営時の京都新城の北東部の一画に収まることになる。「中むかし公家町之絵図」によれば、その規模は東西が西側の張り出しまで含めて180間(約355m)、南北127.5間(約251m)、約89,100㎡である。先に見た通り、寛永度の仙洞御所の規模は東西167間(約329m)、南北142間(約280m)、92,000㎡であるから、寛永度の仙洞御所は高台院の屋敷跡地をほぼそのまま利用したことがわかる。

高台院屋敷となって京都新城は大きくその規模を縮小する。秀吉・秀頼の居城から高台院屋敷となってから面積は半分以下となる。その縮小時期は、高台院移住時と思われるが詳細は不明である。また、高台院屋敷は、それ以前に京都新城でこの場所がどのような性格であったのかも明らかで

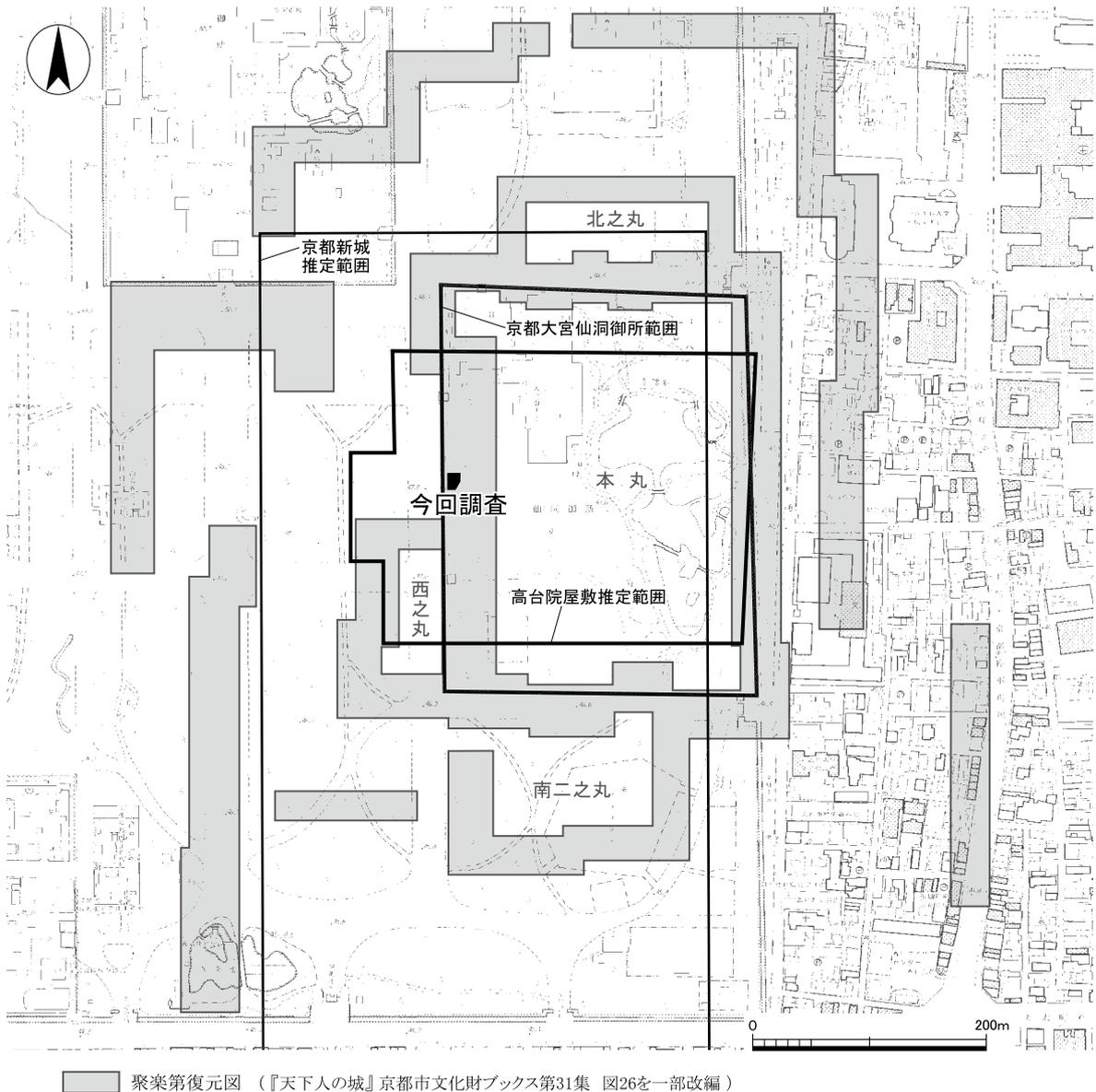


図4 仙洞御所・京都新城と聚楽第の規模比較（1：6,000）

はない。しかし、その位置が御所に近接することや、御殿などはそれ以前の既存建物の利用が想像されることから、京都新城の中核部分と想定してよいと思われる。

図3は、これらの絵図の高台院の屋敷と仙洞御所のそれぞれの南限を現在の仙洞御所の南築地、東限を現在の寺町通として1/2,500都市計画基本図に反映したものである。今回の調査地は、高台院屋敷と仙洞御所のそれぞれ西部に位置しており、今回の調査で検出した石垣312と堀313は、京都新城外郭をなすものではなく、京都新城の内郭と外郭を区画するものと考えられる。

### （3）京都新城の構造と石垣312・堀313の位置

京都新城の構造について史料上知りうることは少ない。秀吉期の施設としては「寝殿」「ワカゼカ池（ハコ瀬カ池）」、高台院の屋敷としては「城の矢倉」<sup>8)</sup>「石垣」<sup>9)</sup>「南面御門」<sup>10)</sup>「内堀」<sup>11)</sup>などが存在したことがわかるが、具体的な構造については不明である。ただ、「内堀」からは外堀の存在が伺

えるので、複郭構造と考えることはでき、それは高台院の屋敷となる以前の京都新城から踏襲したものと考えられる。天守の存在については不明であるが、京都新城の造営は、御殿として出発したとしても、「城の矢倉」「内堀」「石垣」の存在から、城郭に近い構造を持っていたことが窺える。

さらに、先に見た現在の京都大宮仙洞御所と寛永度の仙洞御所との位置比定、寛永度の仙洞御所と高台院屋敷との位置比定から、石垣312と堀313は京都新城の中核部分を区画するものといえる。また、複郭構造であったとすれば、堀313は本丸と呼べる中核部分の内堀の可能性が考えられる。

ここで豊臣政権の京都の政庁であった聚楽第の平面プランとの比較を行い、その近似性の有無を確認しておきたい。聚楽第の復元は、近年、発掘調査や理化学的な探査などにより目覚ましく進んでいるが、ここでは馬瀬智光<sup>12)</sup>氏の復元プランから見ることにする。

図4は、高台院屋敷推定位置と聚楽第復元図を重ねたものである。両者を重ねる定点として、高台院屋敷が京都新城の中核部を引き継いでいることを前提とし、聚楽第本丸東辺を寺町通に置いた。聚楽第本丸の規模は、東辺の南北長が約330m、南辺の東西長が約210mで、高台院屋敷の規模は、先にみたように西側の張り出しを含めてであるが、南北約251m、東西約355mと規模が近いことがわかる。また、石垣312と堀313は聚楽第本丸西堀の西肩部にほぼ重なる。先に述べたように石垣312と堀313が京都新城と高台院屋敷の内郭と外郭を区画するものと考えられることから、高台院屋敷の西の張り出しは秀吉・秀頼期の廓の名残で、聚楽第の西の廓に相当し、京都新城と聚楽第との近似性を見ることも可能と思われる。ちなみに高台院屋敷の規模は、この西の張り出しを除くと東西約500m・南北約400m、面積が約20,000㎡、聚楽第本丸が東西約350m・南北が東辺で約550m、面積が約19,250㎡と近い面積となる。高台院屋敷が京都新城の主廓とすれば、京都新城と聚楽第の主廓の規模はほぼ同じとなり、何らかの意図を持って踏襲していたとみることもできる。

#### (4) まとめ

これまで述べてきたことを以下にまとめる。

- ・高台院の屋敷は京都新城の中核部を引き継いでいる。
- ・京都新城は複郭構造を持っていたと考えられる。
- ・石垣312と堀313は、京都新城外郭を構成するものではなく、内郭（主郭・本丸）と外郭を区画するものである。

- ・京都新城の主廓は、聚楽第の規模を踏襲している可能性がある。

この他に主廓には、「ワカゼカ池」または「ハコ瀬カ池」と呼ばれる池を取り込んでおり、その北東部に庭園を有していたと考えられる。

京都新城は、慶長2年正月に三条と四条の間に造営が始まるが、間もなく御所の東南の位置に計画変更がなされ9月に完成に至る。ただしその利用実態に関しては、慶長3年に秀吉が死去したこともあってか、秀頼の任官、上洛時の利用がわずかに知ることができるのみで、構造についても不

明な点が多い。高台院屋敷へと変化するに際しての規模縮小過程も不明である。しかし、今回の発掘調査によって石垣と堀が発見されたことにより、その復元に向けて定点を得たことは大きな成果といえる。

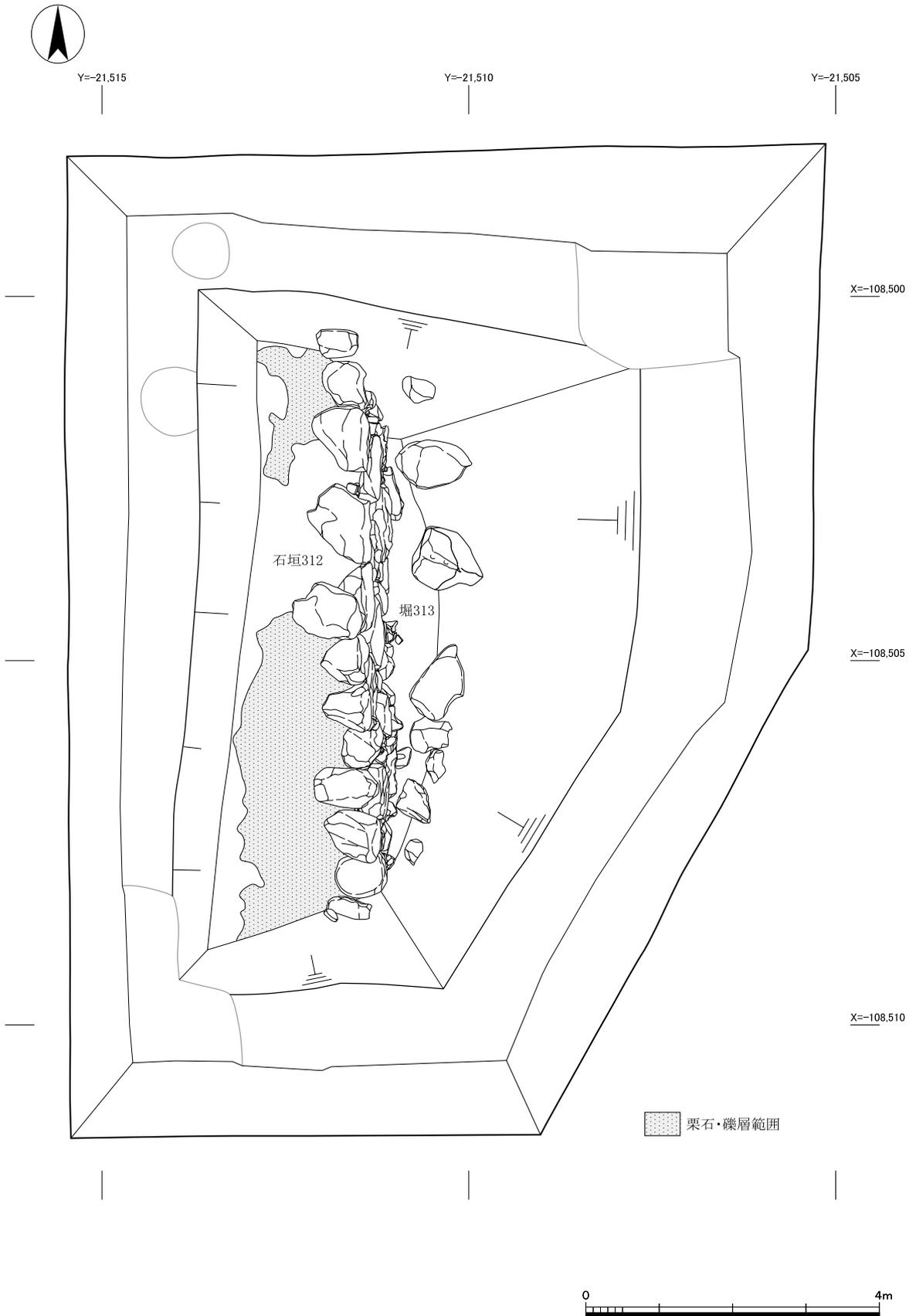
註

- 1) 京都新城の造営過程や規模については既にまとめられている。  
内藤 昌・油浅耕三「豊臣家京都新城－武家地の建築：近世都市屏風の建築的研究－洛中洛外図・その6－」『大会学術講演梗概集.計画系』47 一般社団法人日本建築学会 1972年  
また、京都新城に関する史料に関しては、福島克彦氏（大山崎町歴史資料館）、森島康雄氏（府立丹後郷土資料館）に御教示を得た。記して感謝する。
- 2) 図の平安京の条坊復元ラインは、平安京造営当初を復元したもので、京都新城造営当時の京都の道路区画とは若干異なっていたと思われる。しかし、当時の道路位置を復元することは困難であるし根本的な違いはないものとして、ここでは平安京の条坊復元ラインを復元の基準として用いる。
- 3) 『義演准后日記』慶長2年（1597）8月3日条
- 4) 宮内庁所蔵「寛永十四年洛中絵図」『慶長昭和京都地図集成』 柏書房 1994年  
平井 聖「近世に於ける仙洞御所の沿革」『日本建築学会論文報告集』第61号 1959年  
また以下の図によっても寛永度の仙洞御所の規模を知ることができる。  
「御所近傍之図・昔之図也」『大工頭中井家建築指図集 中井家所蔵』 思文閣出版 2003年
- 5) 『兼見卿記』慶長2年9月26日条、『舜旧記』慶長2年9月28日条
- 6) 『御所沿革 史料図譜』 芸艸堂 1914年
- 7) 京都府立京都学・歴彩館所蔵 中井家文書385  
「御所近傍之図・昔之図也」『大工頭中井家建築指図集 中井家所蔵』 思文閣出版 2003年
- 8) 『時慶記』慶長5年（1600）8月28日条
- 9) 『時慶記』慶長5年8月29日条
- 10) 『言経卿記』慶長5年9月13日条
- 11) 註10に同じ。
- 12) 『天下人の城』京都市文化財ブックス第31集 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 2017年



# 圖 版





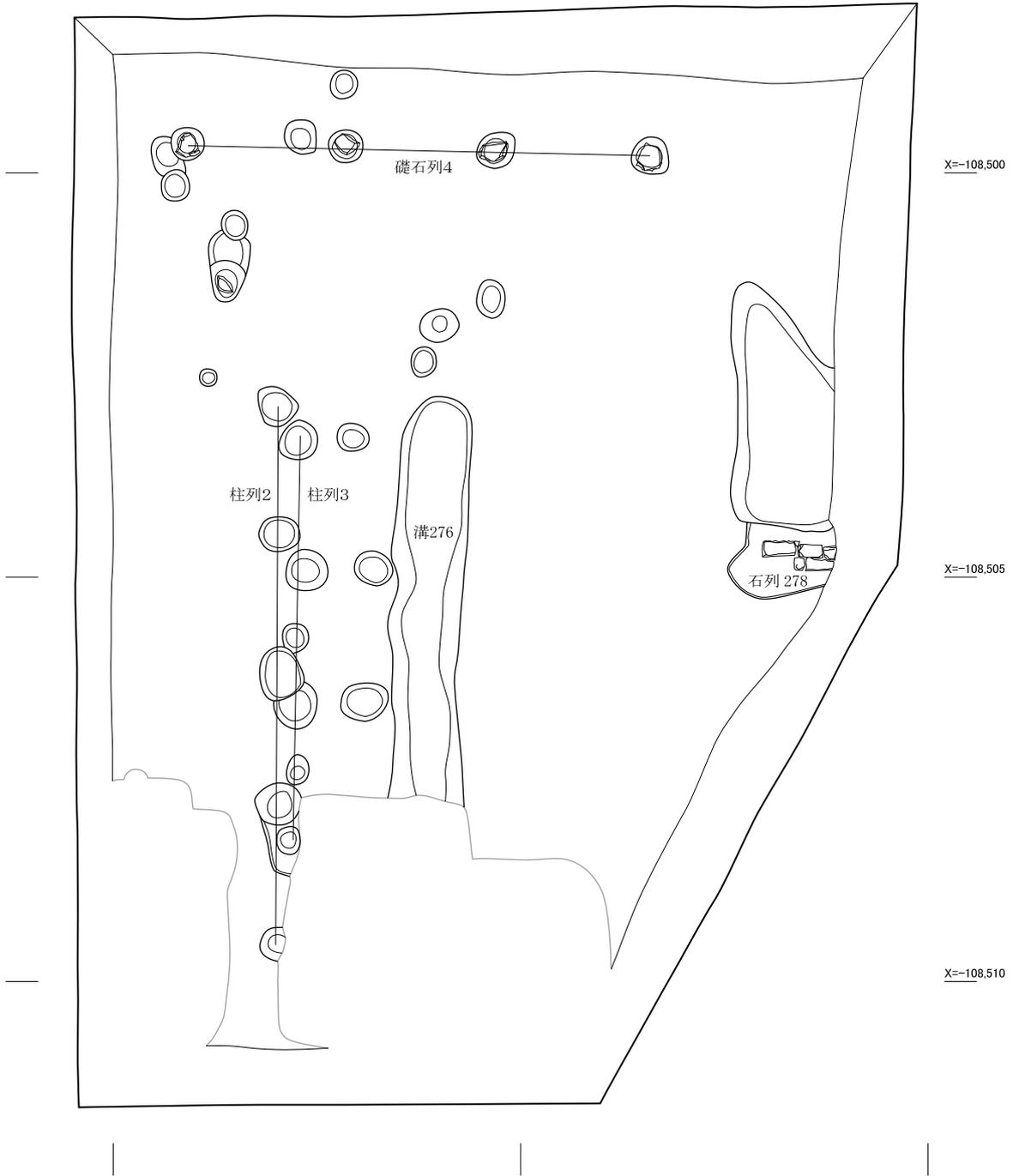
第5面遺構平面図 (1 : 80)



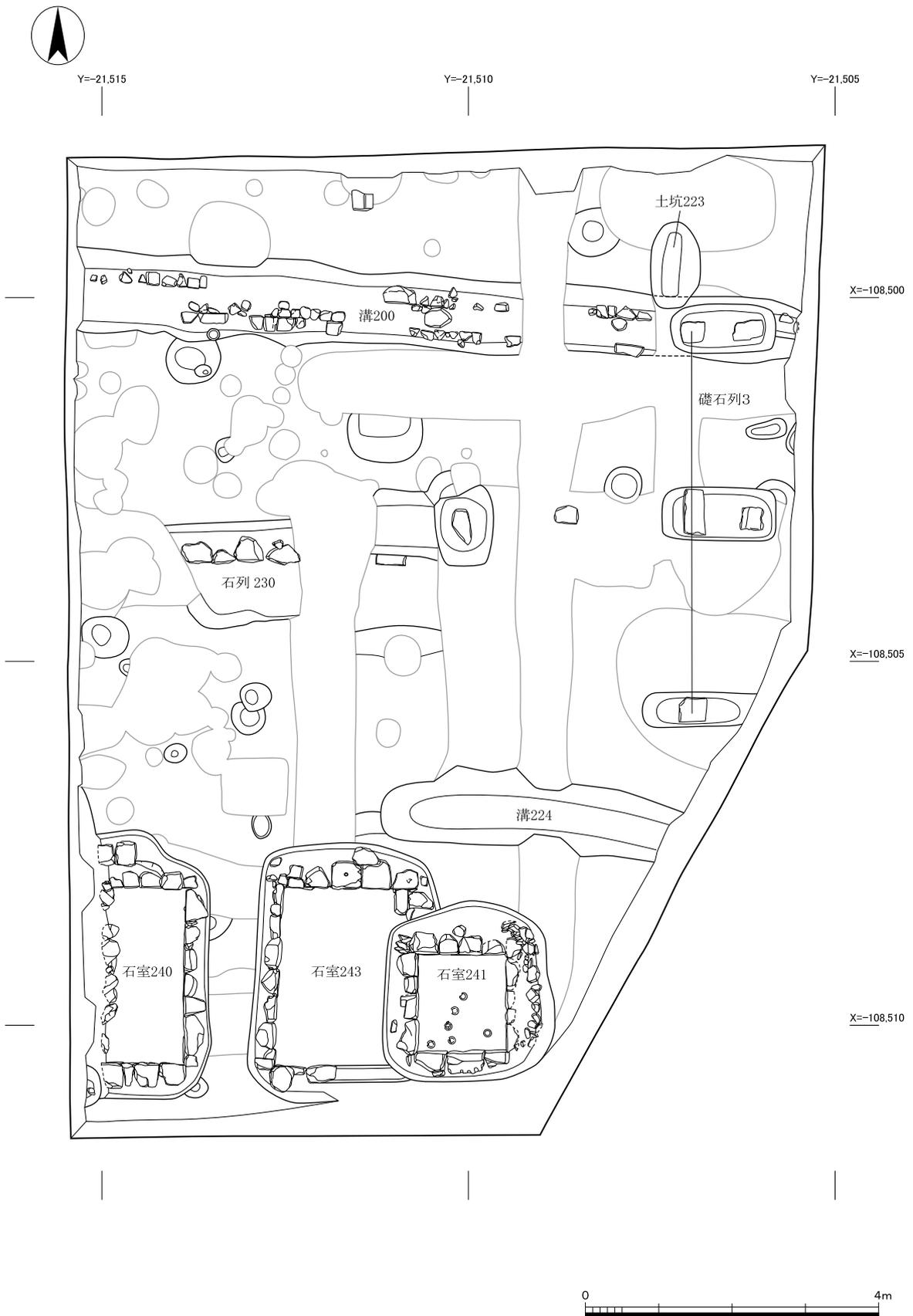
Y=-21,515

Y=-21,510

Y=-21,505



第4面遺構平面図 (1 : 80)

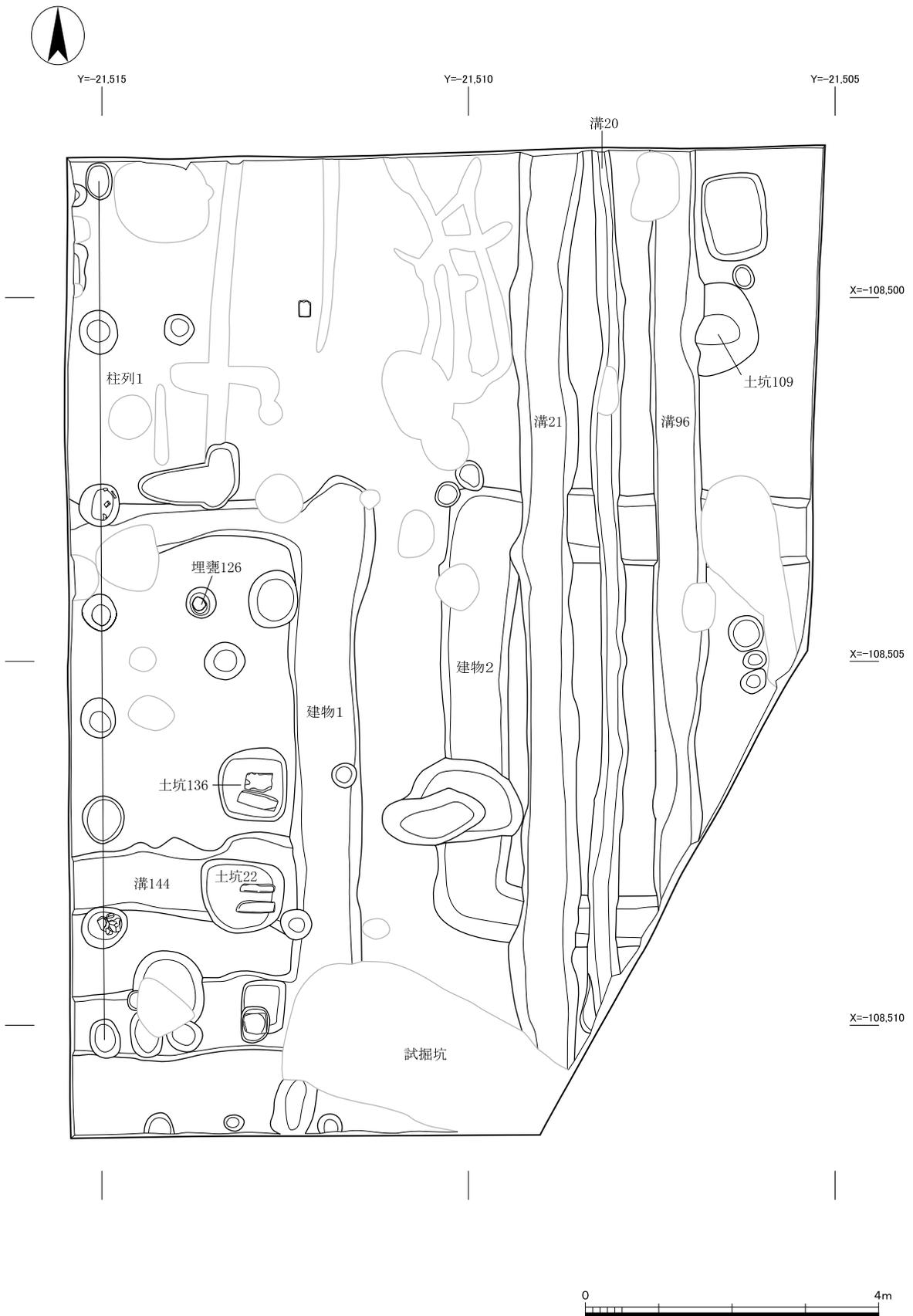


第3面遺構平面图 (1 : 80)

図版4  
遺構

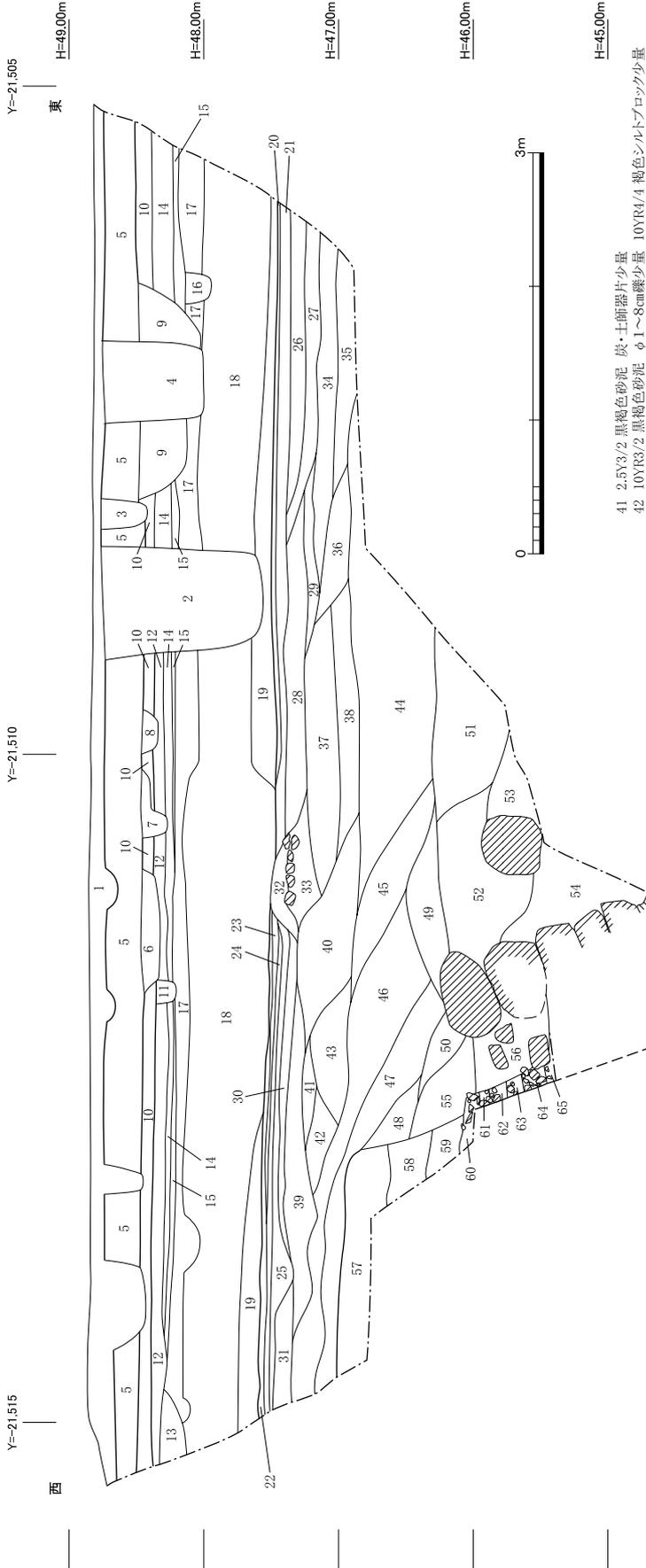


第2面遺構平面図 (1 : 80)



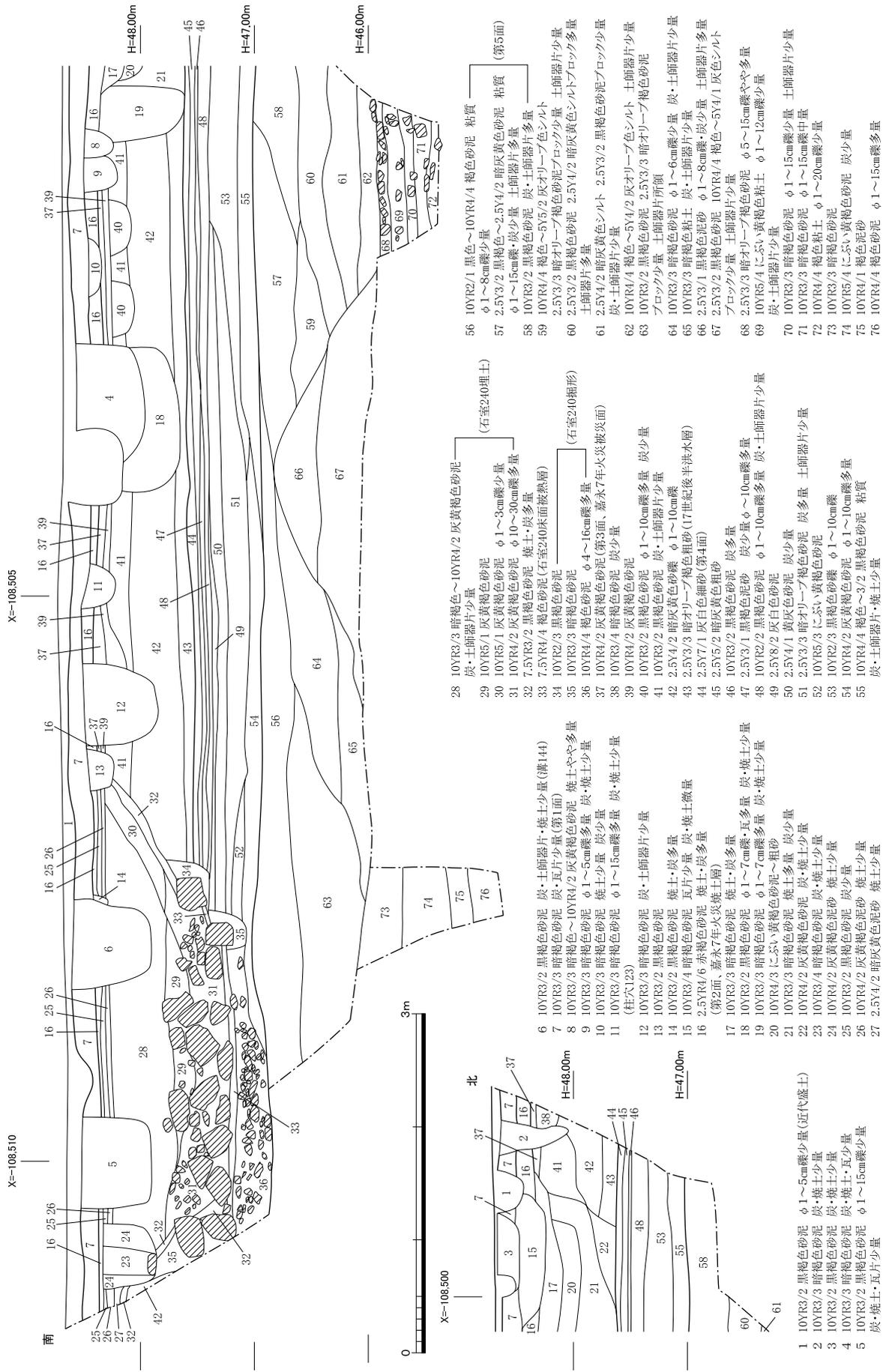
第1面遺構平面図 (1 : 80)

図版6 遺構



- |  |   |  |
|--|---|--|
| <p>1 10YR3/2 黒褐色砂泥 φ~5cm礫少量(近代盛土)</p> <p>2 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 φ~3cm礫少量(溝21)</p> <p>3 10YR3/2 黒褐色砂泥 炭・焼土少量(溝20)</p> <p>4 10YR3/2 黒褐色砂泥 φ~7cm礫少量 焼土少量(溝96)</p> <p>5 10YR3/2 暗褐色砂泥 炭・瓦片少量(第1面)</p> <p>6 10YR3/3 暗褐色砂泥 φ~5cm礫多量 炭・焼土少量(土坑)</p> <p>7 10YR3/4 暗褐色砂泥 焼土少量(ピット)</p> <p>8 10YR3/3 暗褐色砂泥 焼土少量(ピット)</p> <p>9 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 焼土少量(土坑)</p> <p>10 2.5YR4.6 赤褐色砂泥 焼土・炭多量(第2面、嘉永7年火災被災面)</p> <p>11 10YR4/2 灰黄褐色砂泥</p> <p>12 10YR4/2 灰黄褐色砂泥(第3面、嘉永7年火災被災面)</p> <p>13 10YR3/4 暗褐色砂泥 炭少量</p> <p>14 10YR3/3 暗褐色砂泥 φ1~7cm礫多量</p> <p>15 10YR3/3 暗褐色砂泥 焼土多量 炭少量(天明8年火災被災面)</p> <p>16 10YR3/2 黒褐色粗砂 焼土少量</p> <p>17 10YR3/2 黒褐色粗砂 炭・土師器片少量</p> <p>18 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 φ1~10cm礫</p> <p>19 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粗砂(17世紀後半洪水層)</p> | <p>20 10YR3/3 暗褐色砂泥 焼土少量</p> <p>21 10YR3/1 黒褐色砂泥 炭・土師器片少量</p> <p>22 2.5Y7/1 灰白色細砂</p> <p>23 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂</p> <p>24 2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂</p> <p>25 10YR3/2 黒褐色砂泥 炭多量</p> <p>26 10YR3/1 黒褐色砂泥 炭・焼土少量</p> <p>27 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 φ1~15cm礫多量</p> <p>28 2.5Y3/1 黒褐色砂泥+2.5Y4/2 暗灰黄色シルト 炭少量</p> <p>29 10YR2/2 黒褐色砂泥 φ1~10cm礫多量 炭・土師器片少量</p> <p>30 10YR2/2 黒褐色砂泥 φ1~4cm礫少量 砂・炭少量</p> <p>31 10YR2/2 暗褐色砂泥 φ1~10cm礫多量 炭・土師器片少量</p> <p>32 10YR3/3 暗褐色砂泥 φ~14cm礫多量 炭・焼土少量</p> <p>33 10YR3/2 黒褐色砂泥 炭・焼土少量</p> <p>34 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 粘質 炭・焼土少量</p> <p>35 2.5Y3/2 暗オリーブ褐色砂泥 φ1~12cm礫少量 炭少量</p> <p>36 2.5Y3/3 暗褐色砂泥 粘質 炭・焼土少量 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルトブロック少量</p> <p>37 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 粘質 炭・焼土少量 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルトブロック少量</p> <p>38 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 炭・焼土少量</p> <p>39 10YR2/3 黒褐色砂泥 φ1~10cm礫</p> <p>40 10YR3/2 黒褐色砂泥 φ1~8cm礫多量 炭・焼土少量</p> | <p>41 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 炭・土師器片少量</p> <p>42 10YR3/2 黒褐色砂泥 φ1~8cm礫少量 10YR4/4 褐色シルトブロック少量</p> <p>43 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 炭・焼土少量</p> <p>44 2.5Y5/3 黄褐色粗砂+2.5Y5/2 暗灰黄色泥砂 φ1~5cm礫少量</p> <p>45 2.5Y5/3 黄褐色粗砂 φ1~5cm礫</p> <p>46 10YR2/3 黒褐色粗砂 φ1~10cm礫</p> <p>47 2.5Y5/3 黄褐色粗砂 φ1~10cm礫多量</p> <p>48 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂 φ1~10cm礫多量</p> <p>49 2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂 φ1~20cm礫極めて多量 ほば栗石</p> <p>50 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土 7.5Y4/1 灰色シルトブロック多量</p> <p>51 2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂 φ1~15cm礫</p> <p>52 2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂 φ1~20cm礫多量</p> <p>53 2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂 φ1~10cm礫</p> <p>54 2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂 φ1~10cm礫</p> <p>55 10YR3/3 暗褐色粗砂 φ1~10cm礫 炭石(基込)</p> <p>56 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 粘質 φ1~15cm礫 炭・土師器片</p> <p>57 10YR3/2 黒褐色砂泥 炭・土師器片多量(第5面)</p> <p>58 2.5Y3/2 暗褐色砂泥 2.5Y4/2 暗灰黄色シルトブロック多量 土師器片多量</p> <p>59 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト 2.5Y3/2 黒褐色砂泥ブロック少量 炭・土師器片少量</p> <p>60 10YR4/4 褐色~5Y4/2 オリーブ褐色シルト 土師器片</p> <p>61 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 φ5~15cm礫やや多量</p> <p>62 10YR5/4 灰黄褐色粘土 φ1~12cm礫少量 炭・土師器片少量</p> <p>63 10YR3/3 暗褐色砂泥 φ1~15cm礫少量 土師器片少量</p> <p>64 10YR3/3 暗褐色砂泥 φ1~15cm礫中量</p> <p>65 10YR4/4 褐色粘土 φ1~20cm礫少量</p> |
|--|---|--|

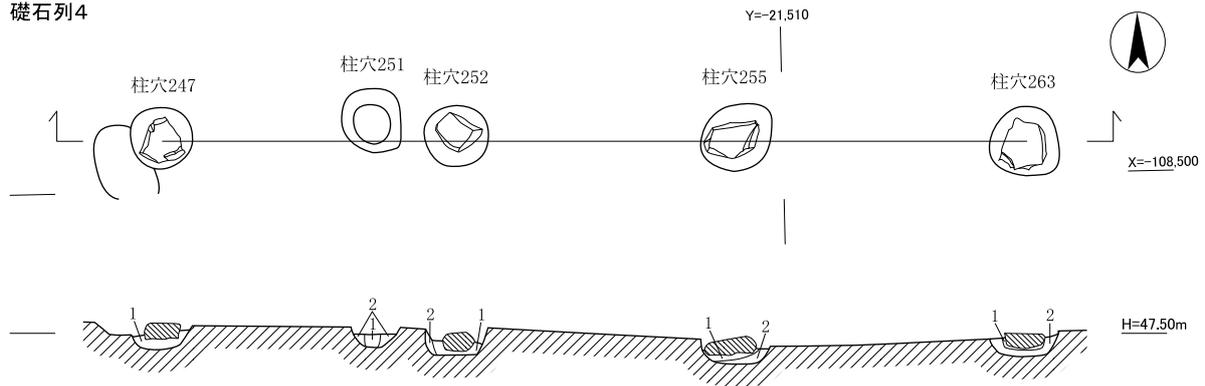
調査区北壁断面図 (1 : 50)



調査区西壁断面図 (1 : 50)

図版 8  
遺構

礎石列4



柱穴247

1 2.5Y4/4 オリーブ褐色粗砂礫 φ~5cm礫多量

柱穴251

1 10YR4/4 褐色泥砂  
2 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂

柱穴252

1 10YR4/2 灰黄褐色砂泥  
2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥

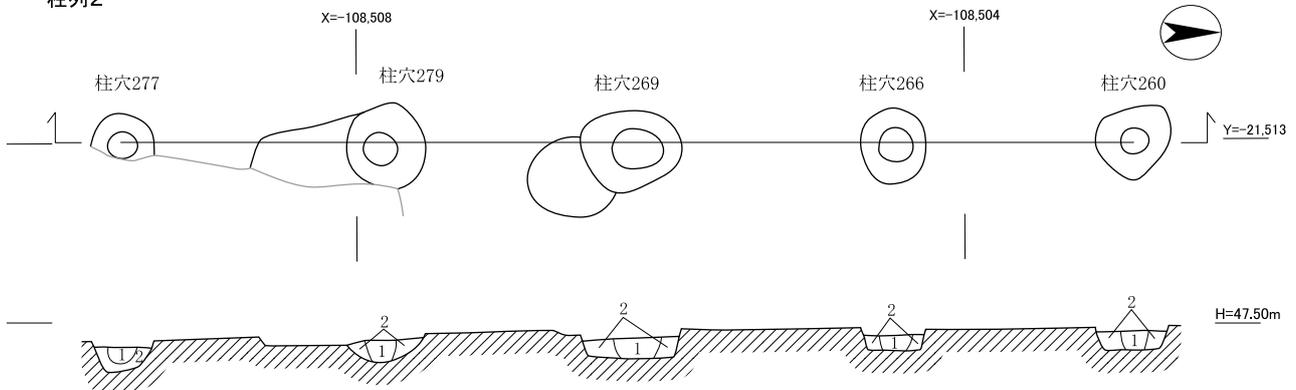
柱穴255

1 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂礫 φ~3cm礫多量  
2 2.5Y4/4 オリーブ褐色粗砂

柱穴263

1 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂礫 φ~3cm礫多量  
2 2.5Y4/4 オリーブ褐色粗砂

柱列2



柱穴277

1 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 2.5Y5/4黄褐色シルトブロック  
2 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 2.5Y5/3黄褐色シルトブロック

柱穴279

1 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 2.5Y5/4黄褐色シルトブロック  
2 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 2.5Y5/3黄褐色シルトブロック

柱穴269

1 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥 2.5Y5/4黄褐色シルトブロック  
2 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 砂混

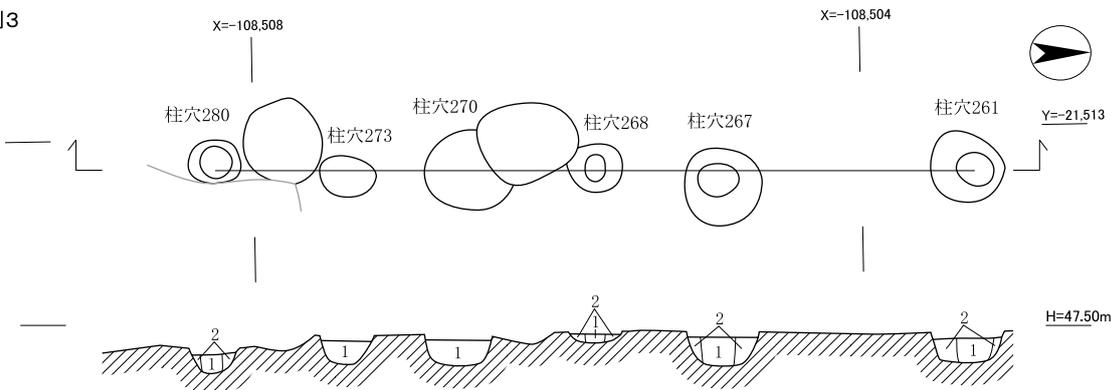
柱穴266

1 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥  
2 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥

柱穴260

1 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 砂混  
2 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥 砂混

柱列3



柱穴280

1 2.5Y5/2 暗灰黄色泥砂  
2 2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂

柱穴273

1 2.5Y3/2 黒褐色砂泥

柱穴270

1 2.5Y3/2 黒褐色砂泥

柱穴268

1 2.5Y3/2 黒褐色砂泥  
2 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 炭・土師器片少量

柱穴267

1 2.5Y5/2 暗灰黄色泥砂  
2 10YR4/2 灰黄褐色砂泥

柱穴261

1 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 砂混  
2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 砂混

礎石列4、柱列2・3実測図 (1:50)



1 石垣312（北東から）



2 石垣312（南東から）



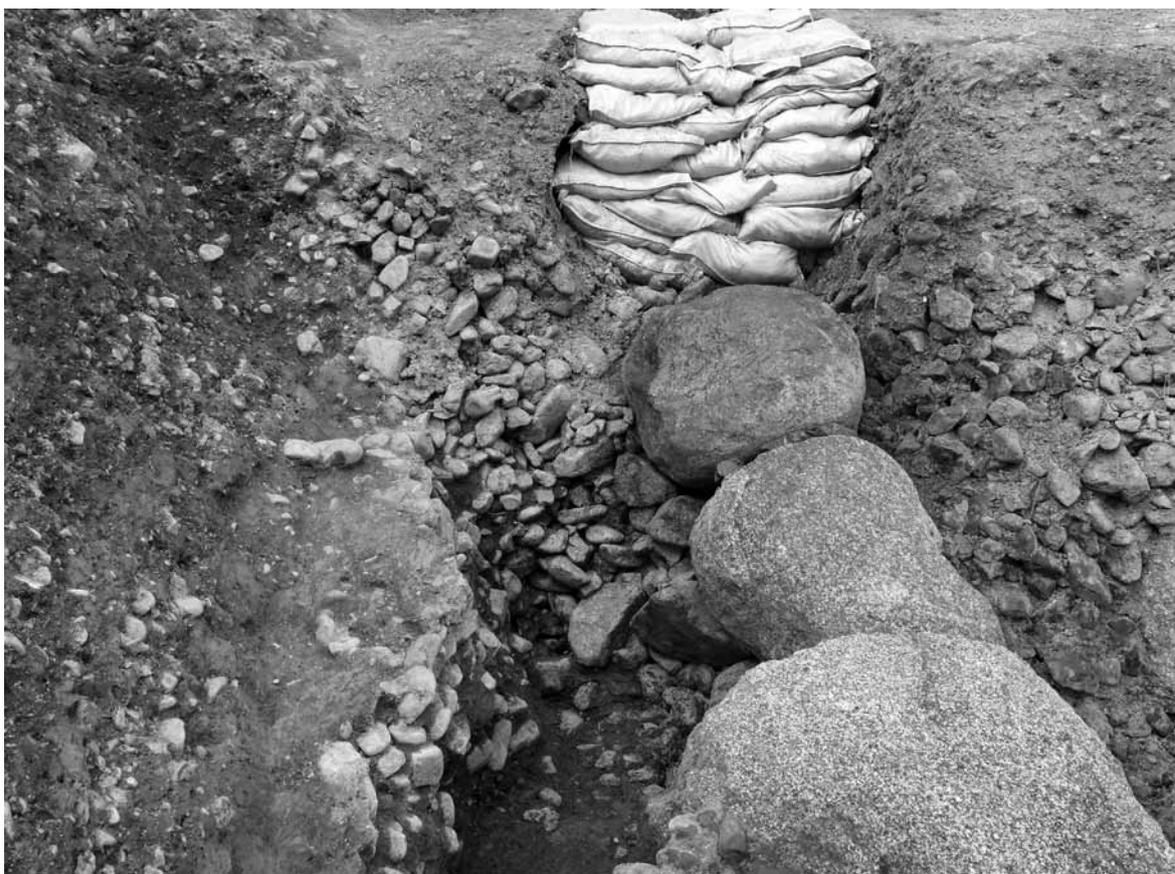
1 石垣312 (北から)



2 石垣312背面礫層 (北西から)



3 石垣312南側背面断割 (北から)



1 石垣312北側断割（南から）



2 石垣312と堀313底面（北東から）



3 石垣312の根石（北東から）



1 第4面全景（南東から）



2 礎石列4（東から）



3 礎石列4柱穴255（南から）



4 礎石列4柱穴263（南から）



1 第3面全景（北東から）



2 石室241・243・240（東から）



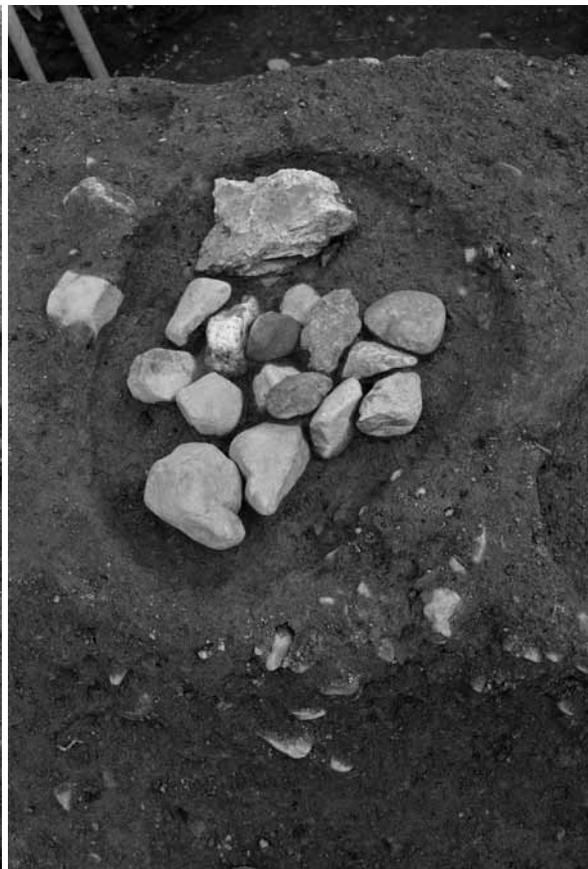
3 溝200（東から）



1 第2面全景（北東から）



2 第2面北東部（西から）



3 集石177（北から）



1 第1面全景（北東から）

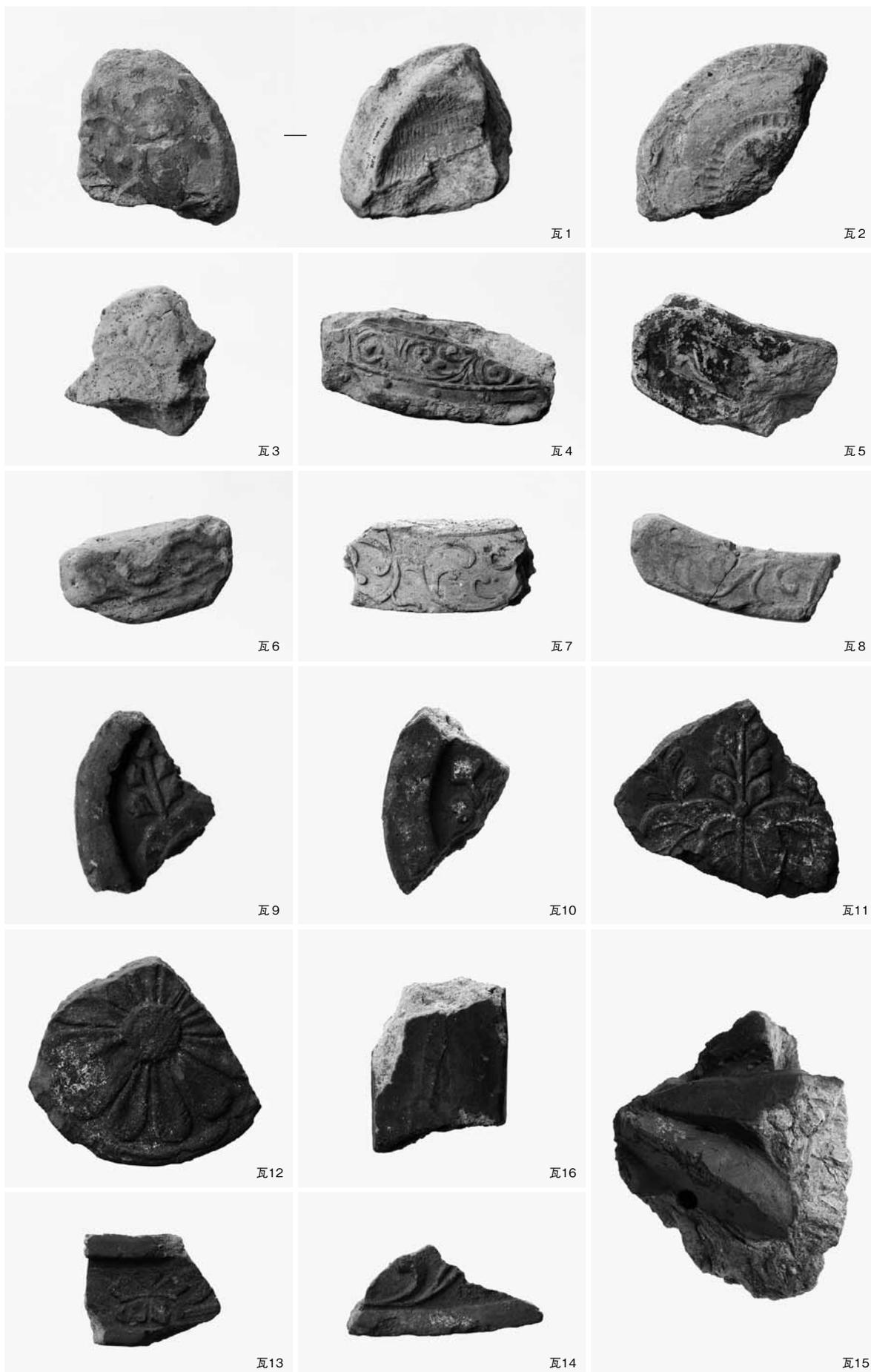


2 土坑136（北から）



3 埋甕126（北から）





出土瓦類 1



出土瓦類 2

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょういちじょうしぼうじゅつちょうあと・くげまちいせき・きょうとしんじょうあと							
書名	平安京左京一条四坊十町跡・公家町遺跡・京都新城跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2019-11							
編著者名	小檜山一良							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2020年5月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡	きょうとしかみぎょうく 京都市上京区	26100	1	35度 01分 18秒	135度 45分 51秒	2019年11月 5日～2020 年3月31日	125.3㎡	消火施設 建設
くげまちいせき 公家町遺跡	きょうとぎょえん 京都御苑3		241					
きょうとしんじょうあと 京都新城跡	きょうとせんとうごしよない 京都仙洞御所内		249					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡	都城跡	安土桃山時代	石垣、堀、整地層	土師器、金箔瓦、軒丸瓦、飾り瓦		慶長2年(1597)築城の京都新城の堀と石垣を検出した。寛永4年(1627)に造営された仙洞御所の明治時代までの4面の遺構面と5期に渡る変遷を確認した。		
公家町遺跡	邸宅跡	江戸時代	礎石列、柱列、柱穴、土坑、溝、石列、石室、集石、整地層	土師器、焼締陶器、施釉陶器、染付、瓦類、金属製品				
京都新城跡	城館跡	明治時代	建物、柱列、柱穴、土坑、溝、埋甕、整地層	施釉陶器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2019-11

平安京左京一条四坊十町跡・  
公家町遺跡・京都新城跡

発行日 2020年5月29日

編集  
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地  
〒604-0093 TEL 075-256-0961